

宮城県文化財調査報告書 40 集

宮城県文化財発掘調査略報

(昭和 48・49 年度分)

昭和 50 年 3 月

宮城県教育委員会

序

宮城県は全国でも遺跡の多いところで、現在、県の遺跡台帳に登録されている遺跡だけでも3000個所以上にのぼっております。これらのなかでも、仙台湾周辺の貝塚群、仙台平野の古墳群、古代東北の拠点多賀城跡、仏教文化の中心陸奥国分寺跡、奈良東大寺大仏建立の際に貴金した黄金山産金遺跡などは全国的にもよく知られた遺跡であります。

文化財保護課の体制も、県民各位の御理解と御協力によって、次第に確立の方向に向いつゝありますことは御同慶に堪えません。その反面、最近における土地開発の進展は誠に急激かつ大規模であり、それに伴う自然環境の破壊や埋蔵文化財の破壊が大きな問題を投げかけております。

このような事態のなかで、文化財保護行政をいかに適正に行なっていくかは、極めて緊急かつ重要な課題であります。

宮城県教育委員会では、本年度も文化財保護行政の一環として35遺跡の発掘調査を実施いたしました。本報告書は、そのうちの26遺跡と前年度に調査した7遺跡を加えた33遺跡に関する調査の概略を収録したものであります。

ここに、本書を上梓するに当たり、御尽力と御理解をいただきました関係各位に対し厚く感謝の意を表しますとともに、学界を初め深き関心を寄せられる諸賢に役立つことを切に願うものであります。

昭和50年3月

宮城県教育委員会

教育長 津 軽 芳三郎

例 言

1. 本書は昭和48年度東北自動車道関係遺跡（7遺跡），49年度同遺跡（10遺跡）及び49年度東北新幹線関係遺跡（8遺跡），49年度一般開発関係遺跡（8遺跡）等の調査内容を簡略にまとめたものである。後日，正式な調査報告書を刊行する予定である。
2. 本書収録の図面，写真等は最小限に留めた。なお，収録中の航空写真，地上写真の一部は北沢広氏の撮影によるものである。
3. 各遺跡の発掘調査は県文化財保護課が担当し，各学校教職員，学生補助員の方々の協力をいただいた。
4. 本書の執筆，編集，図版等の作成及び内容については，県文化財保護課の下記の職員並びに旧職員が全員で担当した。

課 長	西川 十郎	調査第一係	氏家 和典	調査第二係	係長 斎藤 良治	旧職員	志間 泰治（調査第一係長）
		技術主幹兼係長					
副 参 事	村上 正	技術主査	早坂 春一	技術主査	佐々木茂禎		
課長補佐	大石 正巳	” ”	平沢英二郎	技師	加藤 道男	藤沼 邦彦（技師）	
総 務 係	係長 桜井 雄二	技師	白鳥 良一	”	丹羽 茂	佐々木安彦（嘱託）	
	主事 佐藤 博重	”	鈴木惣之助	”	斎藤 吉弘	遊佐 二郎（ ” ）	
	” 小笠原 任	”	小井川 和夫	”	宮崎 敬典	田中 則和（ ” ）	
管 理 係	係長 扇 正人	”	高橋 守克	”	佐藤 好一	工藤 信一（ ” ）	
	主事 佐藤はちえ	嘱託	恵美 昌之	嘱託	柳田 俊雄	加藤 貞子（ ” ）	
	” 渡辺 和彦	”	熊谷 幹男	”	真山 悟	青柳 一民（ ” ）	
保護協会	書記 蜂谷マサ子	”	阿部 恵	”	芳賀 寿幸	松本 みち子（補乗員）	
		”	中島 直	”	阿部 博志	菊地 恵子（ ” ）	
		”	清野俊太郎	”	森 貢喜	菅原 正午（ ” ）	
		”	後藤 幸雄	”	手塚 均	八幡 恒一（ ” ）	
		”	林 和男	補助員	伊藤 玲子	庄司 修子（ ” ）	
		補助員	山崎くみ子	”	伊藤 康子		

目 次

I 昭和48年度東北自動車道関係遺跡

(1) 御所館跡.....	5
(2) 大蛸遺跡.....	13
(3) 駒場小屋館跡.....	17
(4) 混内山遺跡.....	23
(5) 舟場遺跡.....	27
(6) 藤屋敷遺跡.....	31
(7) 宮の脇遺跡.....	35

II 昭和49年度東北自動車道関係遺跡

(1) 上深沢遺跡.....	43
(2) 愛宕山遺跡.....	49
(3) 一本杉遺跡.....	55
(4) 西手取(沖A)遺跡.....	59
(5) 手取(沖B)遺跡.....	63
(6) 原田遺跡.....	67
(7) 山の上遺跡.....	71
(8) 鶴の丸館跡.....	75
(9) 佐野遺跡.....	79
(10) 有賀峯(地田)遺跡.....	83

III 昭和49年度東北新幹線関係遺跡

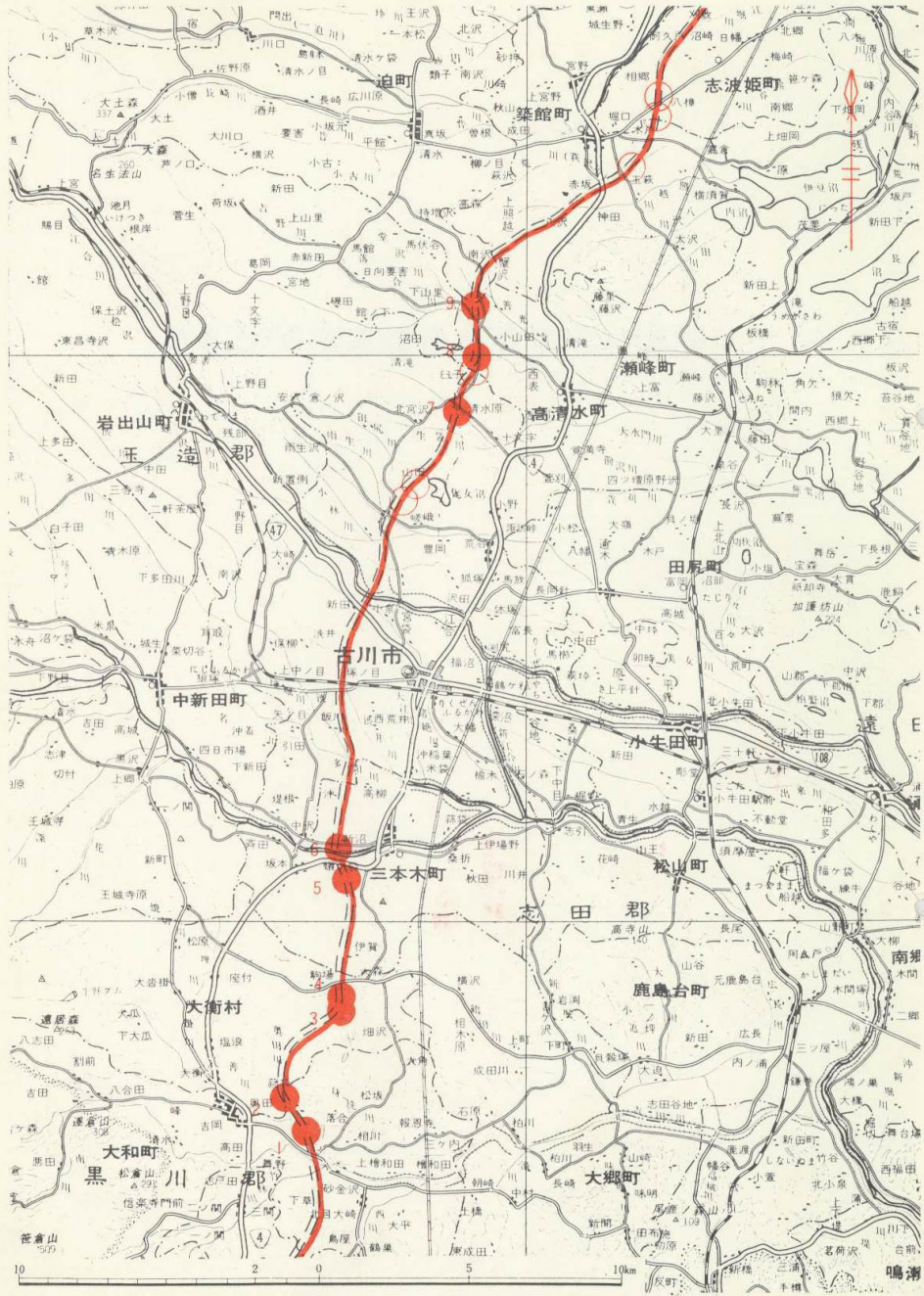
(1) 田中遺跡.....	91
(2) 谷津川遺跡.....	95
(3) 清水遺跡.....	99
(4) 八幡崎B遺跡.....	103
(5) 留沼遺跡.....	107
(6) 下折木遺跡.....	111

(7) 新庄館跡	115
(8) 八沢要害遺跡.....	121

IV 昭和 49 年度一般開発関係遺跡

(1) 鰻 沢 遺 跡.....	129
(2) 新田前遺跡.....	133
(3) 二木横穴古墳群.....	137
(4) 木戸瓦窯跡.....	141
(5) 船岡迫遺跡.....	145
(6) 新田遺跡.....	149
(7) 砂山横穴古墳群.....	153
(8) 十三塚 遺跡.....	157

I 昭和 48 年度東北自動車道関係遺跡



昭和48年度東北自動車道関係遺跡位置図 (○印は昭和49年度調査遺跡)

調 査 遺 跡

調査主体者 宮城県教育委員会
日本道路公団

調査担当者 宮城県教育庁文化財保護課

遺 跡 番 号	遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 日	収 録 ページ
1	御所館	黒川郡大和町落合蒜袋	昭和48年4月16日 ～ 11月17日	5
2	大 館	黒川郡大衡村奥田字大館	昭和48年6月25日 ～ 6月29日	15
3	駒場小屋館	黒川郡大衡村駒場字中里	昭和48年10月15日 ～ 3月30日	17
4	上深沢	黒川郡大衡村駒場字上深沢	(第1次) 昭和48年10月15日 ～ 12月27日	43
5	鏡内山	志田郡三本木町蟻ヶ袋字混内山	昭和48年7月23日 ～ 8月11日	23
6	舟 場	志田郡三本木町新沼字舟場・二股	昭和48年8月20日 ～ 9月1日	27
7	藤屋敷	古川市清滝字藤屋敷	昭和48年7月23日 ～ 10月6日	31
8	手取(沖B)	栗原郡高清水町小山田字沖	(第1次) 昭和48年7月23日 ～ 8月11日	63
9	菅ノ脇	栗原郡高清水町小山田荻生田字宮の脇	昭和48年7月3日 ～ 7月14日	35

(1) 御^ご所^{しょ}館^{だて}跡

遺跡所在地： 黒川郡大和町落合蒜袋

調査期間： 昭和48年4月16日～11月17日

調査面積： 22,000m²

発掘面積： 3,500m²

遺跡記号： A J

協力・参加者： 佐藤正人（東北学院大学学生）

橋本博幸（ " ）

佐藤房江（ " ）

斎藤真澄（ " ）

笹原百合子（東北大学学生）

柳瀬和幸（ " ）

今橋浩一（早稲田大学学生）

土肥 孝（成城大学博士）

大和町教育委員会

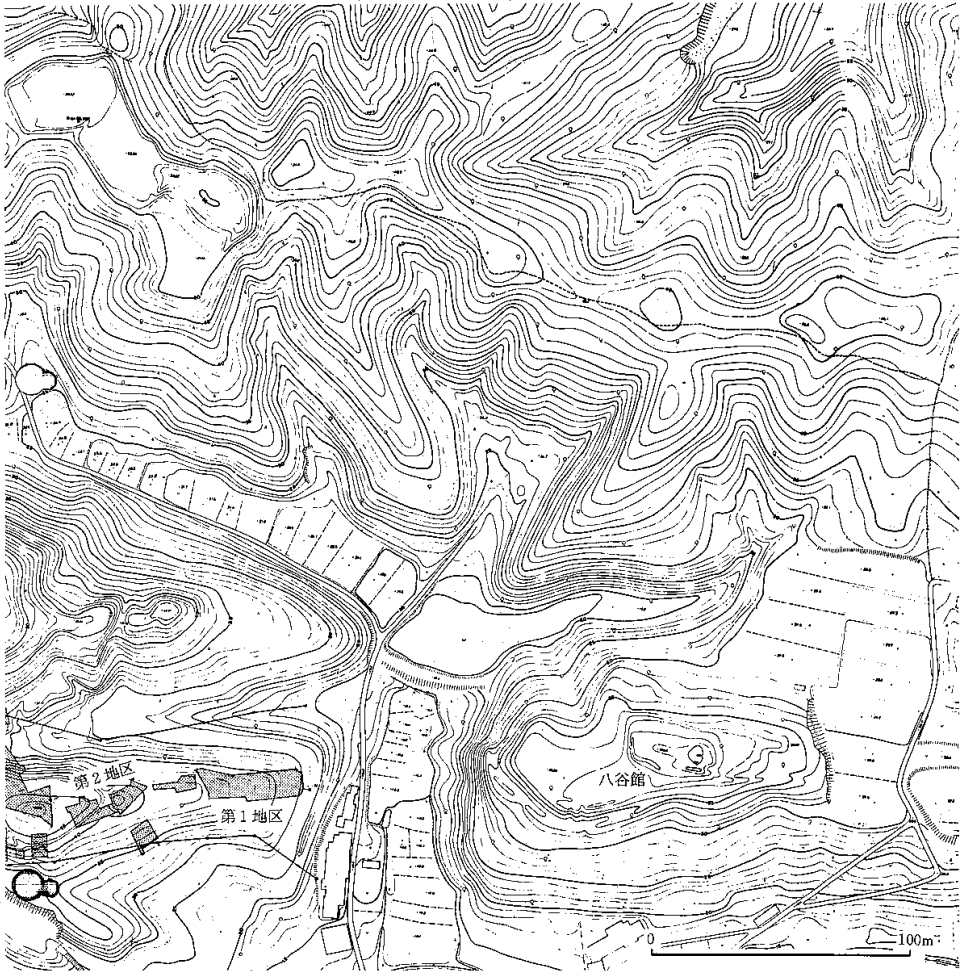


御所館跡全体地形図

1. 遺跡の立地と現状

黒川郡大和町の北東部には、大松沢丘陵が東から西に延びており、その南麓にあたる落合蒜袋地区には、大小の谷や沢が複雑に入り込んだ小丘陵が澁達している。これらの小丘陵の尾根上には、自然地形を利用して築かれた御所館・八谷館・古館・中楯などがある。この地域は、仙台平野および松島方面から大崎耕土に通じる交通上の要衝にあたり、ほかにも鴻巣館・吉岡古館・大衡館をはじめ多くの館跡がみられる。

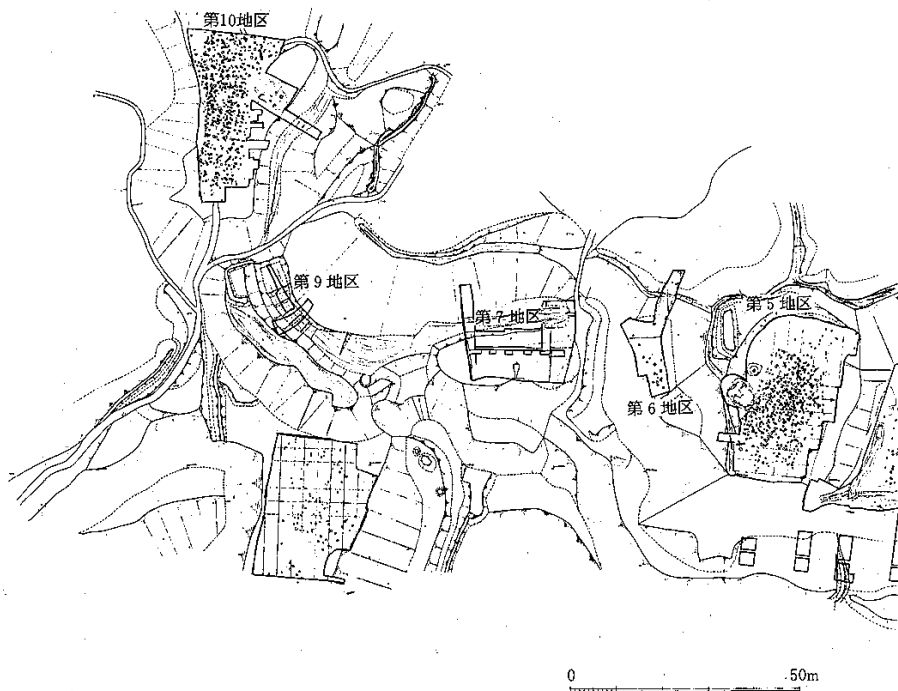
御所館は、谷をとり囲むように延びる標高約60mの小丘陵を利用した東西300m・南北400m



の「U字形」をなす館である。現在、石神神社が鎮座する地区は、最も高所にあたる広い平場で館の中で最も重要な役割を果たした平場と考えられる。これを中心に多数の平場が配されており各平場と平場は急峻な崖、堀切、土塁等で区画され、通路や土橋等によって連絡されている。館全域は、一部の畑地を除いて、杉林、雑木林になっていたため保存状態は良好である。

2. 調査の概要

今回の調査は、路線敷となる館の西側地域約22,000m²を対象としむ館の構成が複雑なので、全体に統一したグリッドは設けず、各地区ごとに調査区(第1～第10地区)を設定し、計約3,500



発掘区全図

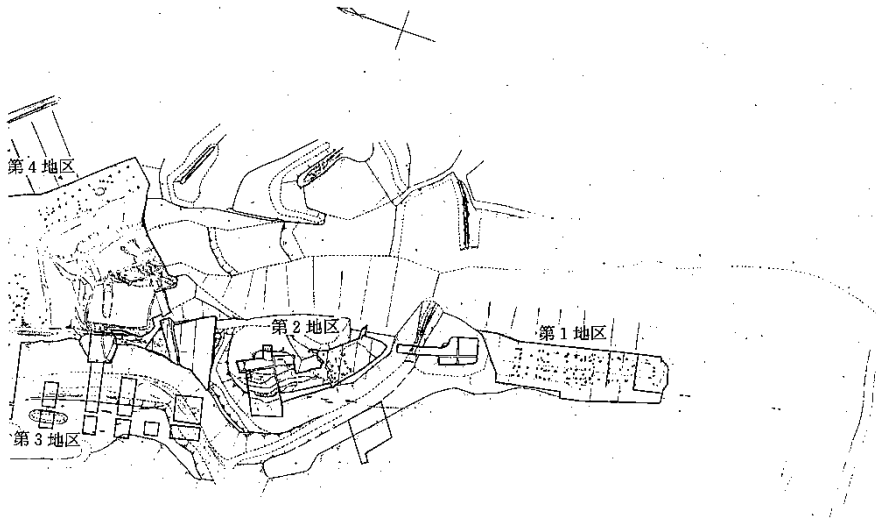
m²を発掘した。調査にあたっては、創設から廃棄までの館の変遷、館の構造と機能などについて明らかにすることに重点をおいた。各地区の特徴と遺構の概要は以下のとおりである。

第1地区 八谷館とほぼ等しい標高をもつ南北40m、東西10mの平場で、南側は大きな谷によって八谷館と区画されている。岩盤に掘り込まれた掘立柱の建物跡6棟が確認された。

第2地区 第1地区より8mほど高い位置にある15×8mの狭い平場である。2間×2間の掘立柱の建物跡1棟と2間×3間の礎石をもつ建物跡1棟が確認された。礎石をもつ建物跡の検出は、今回の発掘では唯一のものである。

第3地区 第4、第5地区西側斜面下端部にある80×15mの平場で、調査により、第7地区に続く通路と長さ約50mの空堀が検出された。平場の一部は、盛土によって整地されている。

第4地区 弓形の上段平場、沢へ続く緩斜面、緩斜面西側の平場によって構成されている。上段平場は、盛土によって整地されており、掘立柱の建物跡4棟、溝跡などが確認された。また、第5地区の整地層の下面より地山に掘り込んだ通路跡が検出された。沢へ続く斜面は、大規模に整地されていたが、箱堀形に地山が整形されている。緩斜面西側の平場は、東西10m、南北13mの桁形跡で、この桁形は後に整地し平坦面として使用している。桁形に隣接して、土塁を切り開いた門跡が検出された。以上から、沢を整形し桁形を構築した時期とこれを埋め立



てた時期との間に時期差が認められる。

第5地区 井戸跡，土倉跡，掘立柱の建物跡が検出された。井戸は深さ2m弱で，素掘りである。土倉は7×6m，深さ約1.5mで，南側と西側に階段状の入口があり，内部には柱穴，土嚢が認められ，床面は貼床が施されていた。建物跡は検討中であるが，現在まで5棟確認されている。この平場は，後に井戸，土倉を埋め，さらに西側を整地して平坦面を広くしている。

第6地区 東側の土塁および西側の平場に発掘区を設けた。場は整地され，そこから性格不明のピットが検出された。土塁は，一度構築したものに再度盛土をし修築している。

第7地区 通称「紫池」東側の斜面と空堀，やや傾斜する平坦地，東側の平場へ続く通路にある土橋に発掘区を設けた。「紫池」は，自然湧水の水溜である。空堀は，斜面を削平して構築しその廃止を利用し平坦地が築かれている。土橋は，空堀を埋めて構築されている。

第8地区 この平場全域の $\frac{1}{2}$ を調査した。この平場は，発掘区の西側に広がり，ほぼ中央に高さ約1mの土塁・西端には空堀がある。調査により掘立柱の建物跡2棟が確認された。

第9地区 「紫池」から第10地区南側へ続く空堀に2本のトレンチを設けた。土砂が1m以上堆積していたが，幅約3m，底部はU字型で，岩盤を掘り込んで構築されている。

第10地区 南側に土塁，「紫池」から続く空堀があり，北側は整地されている。調査により，北

側の斜面落ちぎわから柱列，平場全域にわたって柱穴群が確認されたが，それらの構造については検討中である。また，この平場は土塁，空堀が修築されていること，土塁の積土の下から門跡が検出されたこと等から，二期にわたって使用されたことが削る。

以上，調査の概要を述べたが，未調査の部分が多く，館の全容は把握できなかった。

3. 出土遺物について

中国産の青磁，白磁，室町時代後半の国内産陶器，石臼，石硯，鉄釘，刀子，和鏡，古銭，仏塔を模した青銅製品等が発見された。発掘面積に比し遺物の数，量ともに少ない。

4. 館主について

館主を明らかにする文献は，今のところ発見されていないが，延宝年間に著された「仙台領古城書立之覚」には，『右城主稔ト不相知御所楯ト申伝候，一説ニハ黒川安芸守先祖当国下向之最初取立被申侯共申侯』と記されている。また，黒川郡誌・富谷町誌では，黒川景氏は，「下草の鶴巢館に移る以前，蒜袋村御所館に住していた。」としてい。黒川郡各所には，八谷館・古館をはじめ黒川氏一族の館跡が多いところから，御所館主も黒川氏であると考えられる。

5. まとめ

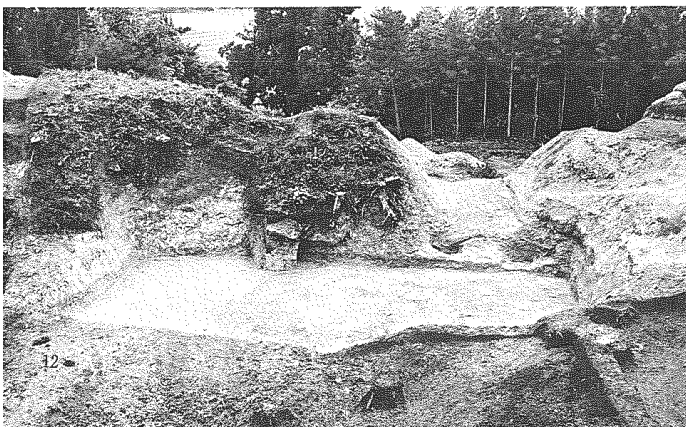
- ①御所館跡は，自然地形を巧みに利用して構築された山城跡である。
- ②各平場から検出された建物跡の構造上の相違から，各平場は館の中で独自の機能を果していたと考えられ，門跡，通路跡の発見によって，互いに関連していることが判った。
- ③各遺構の重複，修築等から考えて，少くとも二期にわたる大規模な構築が推定される。
- ④館跡の使用年代は，出土遺物，文献等から室町時代以降と推定される。



第6 地区土塁断面



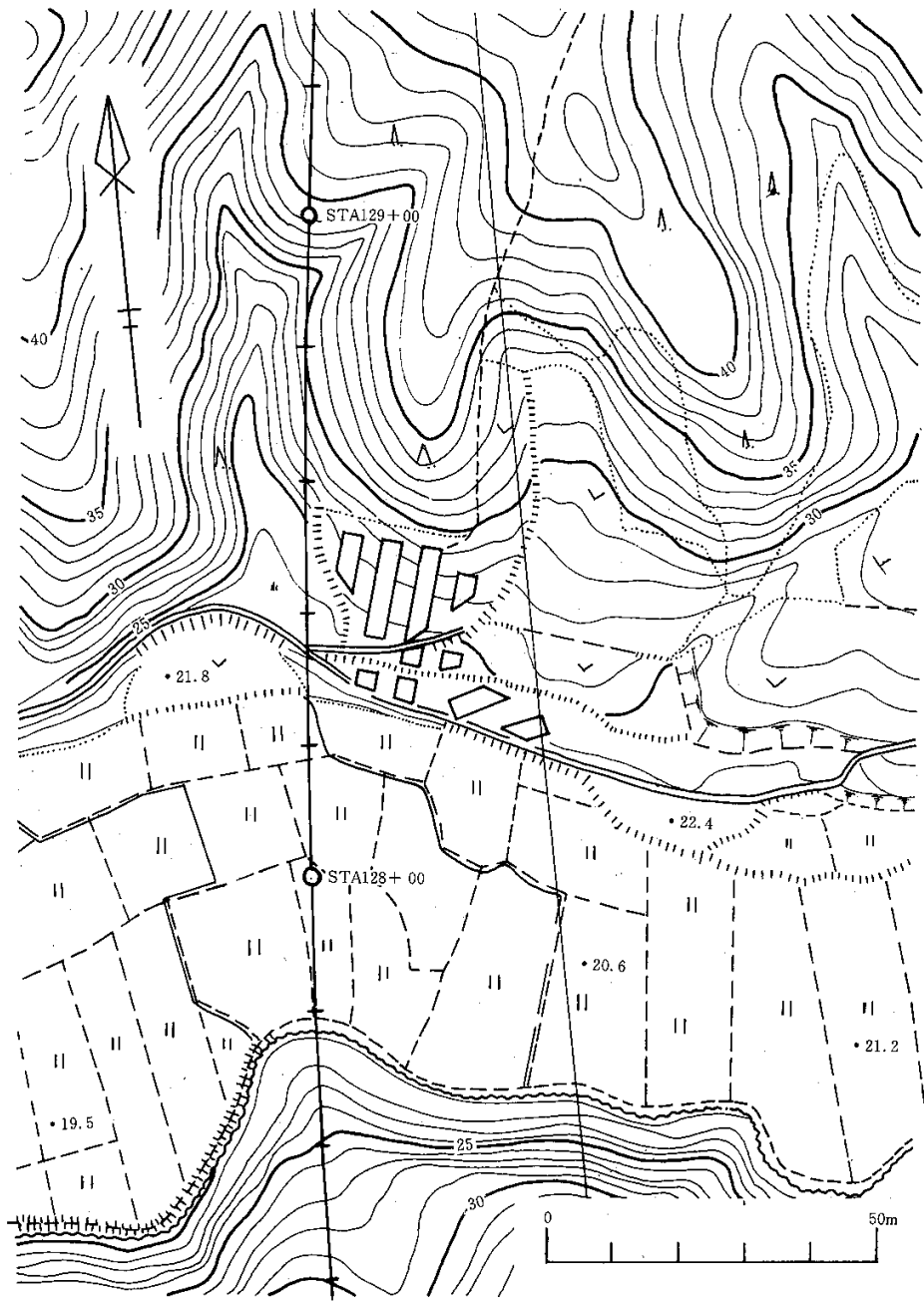
第5 地区土倉 (南側から)



第3 地区門および樹形

(2) 大^{おお}蛸^{たこ}遺跡

遺跡所在地： 黒川郡大衡村奥田字大蛸
調査期間： 昭和48年6月25日～6月29日
調査面積： 500m²
発掘面積： 189m²
遺跡記号： AL
協力機関： 大衡村教育委員会



遺跡地形圖

1. 遺跡の立地

大蛸遺跡は、大衡村役場の東方約2.5kmに位置している。この地域は大松沢丘陵の南麓にあたり、大小の谷や沢が複雑に入り込んだ丘陵地になっており、本遺跡もそれらのひとつである小丘陵の、小さな沢に面した南斜面に立地している。遺跡付近の標高は約2mである。

2. 調査の概要

調査は路線敷にかかる約500m²ほどを対象に調査区を設定して実施し、約189m²を発掘した。その結果、表土下がすぐ地山面となっており、遺構は全く検出されず、遺物も平安時代の土師器、須恵器の破片若干と、江戸時代の寛永通宝（鉄錢）が10枚ほど発見されただけであった。この調査結果から、遺跡の主体は路線敷の外側にあることが推測される。

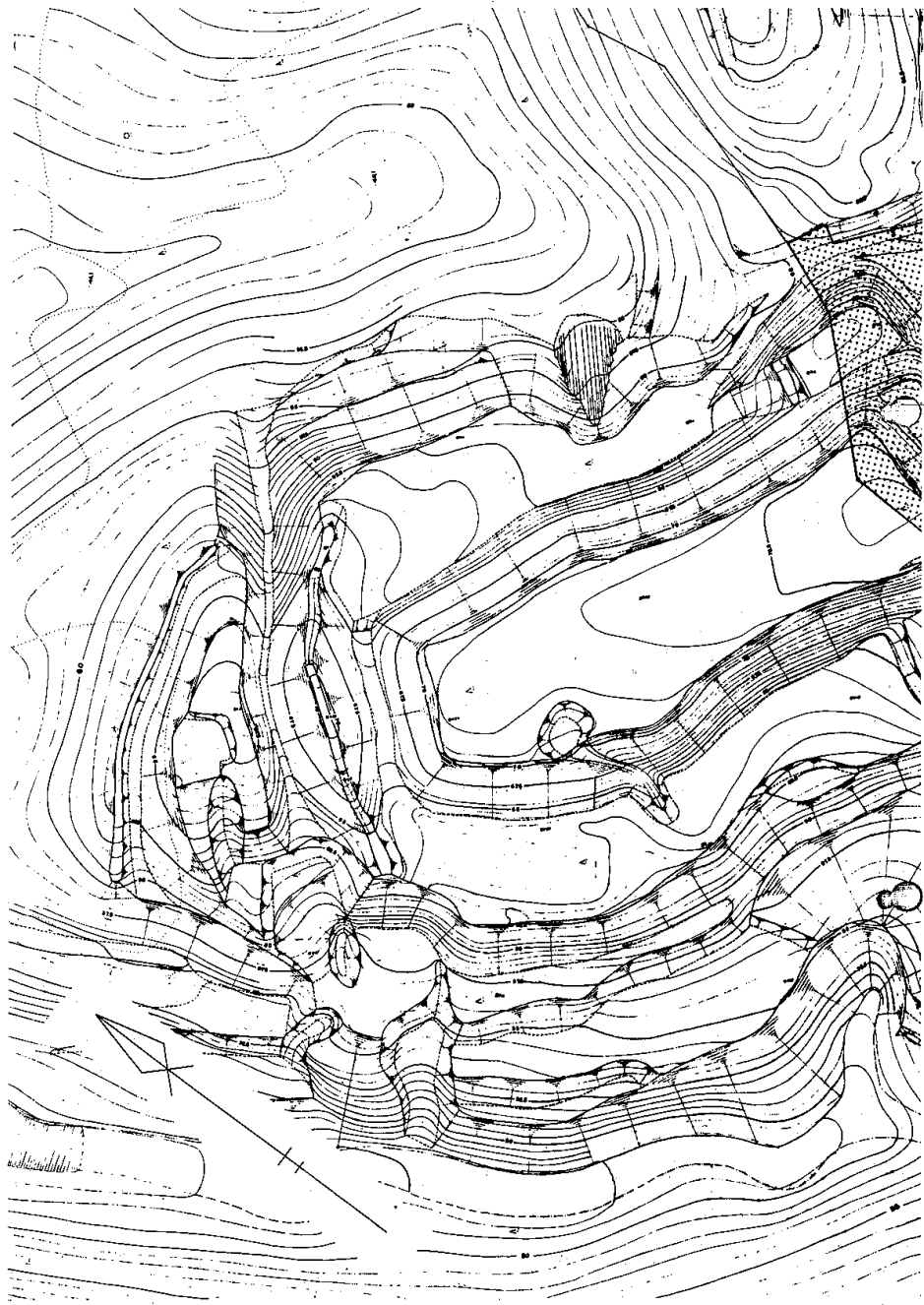


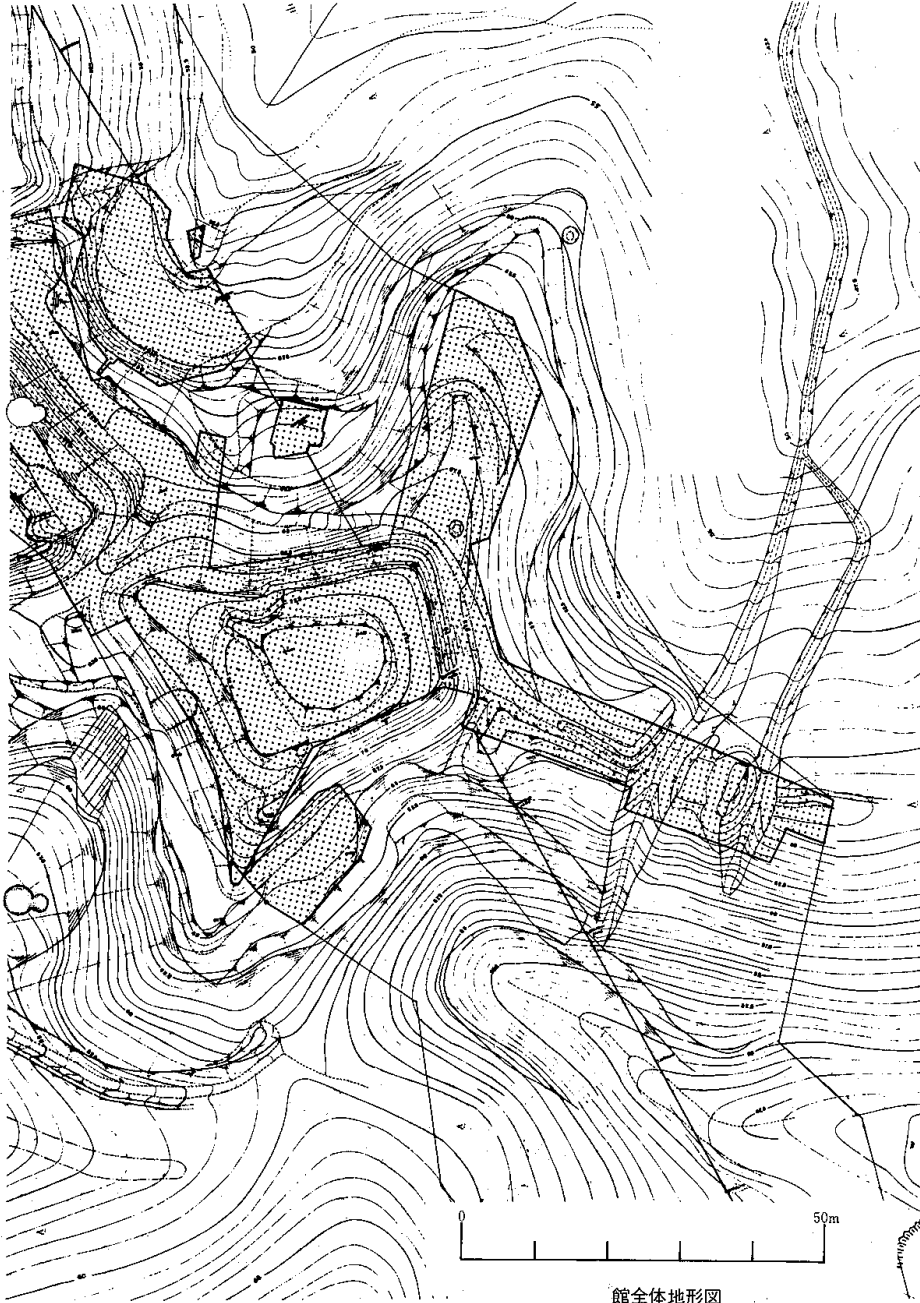
上：遺跡全景（南側から）

下：発掘区堆積層の状況

(3) 駒場こまば小屋館こやだて跡

遺跡所在地： 黒川郡大衡村駒場字中里
調査期間： 昭和48年10月15日～49年3月30日
調査面積： 8,500m²
発掘面積： 4,300m²
遺跡記号： AM
協力・参加者： 門間俊彦（東北学院大学学生）
佐藤正人（ " ）
佐藤房枝（ " ）
柳瀬和幸（東北大学学生）
大衡村教育委員会





館全体地形図

1. 追跡の立地

黒川郡の北東部には鳴瀬川と吉田川にはさまれて第三紀の泥岩を基盤とした大松沢丘陵が西から東に延びている。この丘陵は大衡村東部では大小の谷や沢が複雑に入り込み多数の枝状丘陵に分かれており、駒場小屋館跡も、それらのひとつである駒場部落の南東部にある小丘陵上に立地している。館の北側および南側には小河川によって形成されたせまい沖積地がみられる。周辺には式内社である須岐神社や中楯城、猫ノ森館などの中世館跡がある。

2. 駒場小屋館跡の概略

江戸時代初期に作成された「仙台領古城書上」にはこの館について次のような記載がみられる。

駒場村

^山小屋城 東西三十八間 南北十間

城主児玉右近・同苗惣九郎二代。天正年中迄居住。児玉玄程曾孫末孫文安玄程。

この史料によると、館主は児玉氏で天正年間まで居住していたことになる。

この館は東西に延びる標高約70mの小丘陵の自然地形を利用して築造されており、東西の尾根を堀切って谷につなげ、南北は小さな沢の一部に手を加えて館の境界にしている。この館の範囲は約27,000m²におよぶ。館は主郭・副郭を中心に腰部・小さな平場・通路・土塁などで構成されている。山林になっていたため、保存状態は非常に良好であった。

3. 調査の概要

東北自動車道は館の東半を通るため、主郭の一部・副郭・平場、空堀などが路線敷にかかっている。調査もこの地域約8,500m²に限定し、遺構の存在が予想された部分については、ほぼ全面発掘して館の構造をできるだけ明確にするよう努力した。発掘総面積は4,300m²である。調査によって発見された遺構、遺物の概略は以下のとおりである。

発見遺構 〈掘立柱建物跡〉主郭の東端部平担面で多数の掘立柱跡が検出された。新旧の柱穴が重複しているので幾度も建て替えられたことがわかる。建物の構造については部分的な調査のため解明できなかった。この主郭はこの館で最も主要な建物跡があった場所と考えられる。また副郭中央部の平担部では東西五間、南北一間の掘立柱建物跡が1棟検出された。床張りで四面に縁がつく建物跡である。重複は認められない。〈通路・門〉通路は主として腰部や平場と平場の間に配されていた。溝状の形態をとるものが多く、傾斜面ではすべり止めと思われる小さな段がつけられている部分もある。門跡は主郭や腰部の入口など計5ヶ所で検出された。4本柱のものが多く、改築や新旧関係が認められるものもある。〈空堀・土塁〉空堀は館の東端を区画するもの2本と北側を区画するもの1本が検出された。うち2本の空堀はV字状に掘り込まれている。これらは丘陵の尾根の部分の部分を切って谷と連続させ、館の範囲を画すると同時に、防

備の用も兼ねた施設と考えられる。土塁は東端の2本の空堀の間にあり、空堀をつくる際にその土を内側に盛り上げて構築されている。〈その他の遺構〉土橋状の遺構や性格不明のピット群などが検出された。

出土遺物 〈陶磁器〉陶器と白磁・染付の破片が若干発見された。陶器は大甕の破片である。白磁および染付は中国の明代のものであろう。〈石臼〉破片が数点出土した。〈古銭〉洪武通宝などの中国銭が数枚発見された。〈その他の遺物〉平安時代の須恵器片が少量出土した。また表土から寛永通宝やキセルも採集された。

4. まとめ

- ①駒場小屋館は江戸時代の記録によると「児玉氏」の居館で中世末の天正年間まで使用されさ
ていたらしい。「児玉氏」はおそらく黒川氏に関係し駒場一帯を支配していた小領主であ
ろう。
- ②この館は比較的小規模な館跡で。遺構の保存が良く実測によってその規模や形態が明らか
になった。
- ③調査の結果、従来の館跡調査で不明瞭であった通路や門が多数検出され、城館の構造を知る
重要な資料を得た。また本館跡でも掘立柱の建物跡が検出され、中世末における館の建物跡
が掘立柱によることが一般的なものであることが明らかになった。



主郭・副郭地区
発掘前の状況
(北側から)



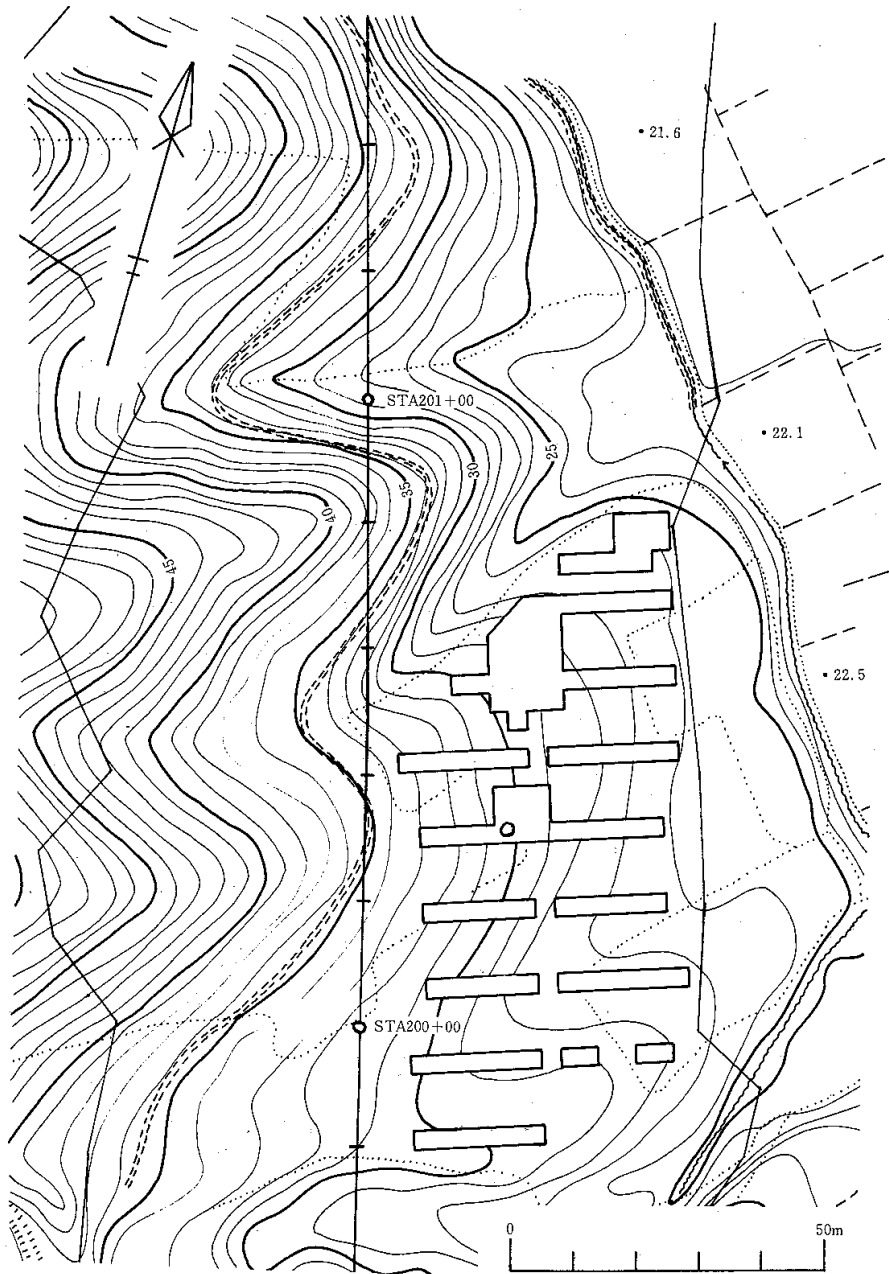
同上発掘後の状況
(北側から)



副郭で検出された
掘立柱建物跡
(西側から)

(4) 混内山遺跡

遺跡所在地： 志田郡三本木町蟻ヶ袋字混内山
調査期間： 昭和48年7月23日～8月11日
調査面積： 5,000m²
発掘面積： 1,125m²
遺跡記号： BQ
協力・参加者： 後藤勝彦（宮城県塩釜女子高等学校教諭）
 渋谷勝磨（三本木町立三本木中学主事）
 佐藤達夫（塩釜市立塩釜第一小学校教諭）
 今泉武男（塩釜市立塩釜第三中学教諭）
 土岐山武（丸森町筆甫中学校講師）
 一条孝夫（塩釜市立浦戸第二小学校教諭）
 佐藤正人（東北学院大学学生）
 石森 勉（東北大学学生）
 柳瀬和幸（ " ）
 三本木町教育委員会



遺跡地形図

1. 遺跡の立地

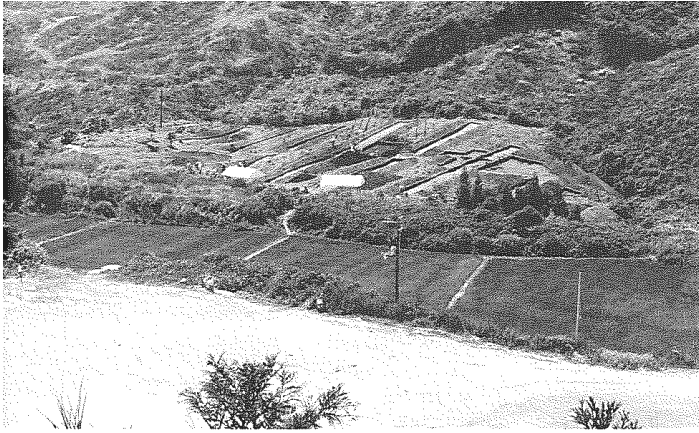
混内山遺跡は三本木町役場の南西約2km、鳴瀬川の南岸に位置している。三本木町の南部には大松沢丘陵が西から東に延びており、その北端では多数の枝状小丘陵が北にはり出している。本遺跡はこれらの枝状丘陵のひとつに立地しており、小さな沢に面した東緩斜面の畑地に縄文土器片などが散布していた。遺跡付近の標高は26～32mで、東に10度ほど傾斜している。現状は大部分が山林で、一部が畑地となっている。なお本遺跡が立地している丘陵の北端には装飾横穴古墳などが発見された山畑横穴古墳群や混内山横穴古墳群などがある。

2. 調査の概要

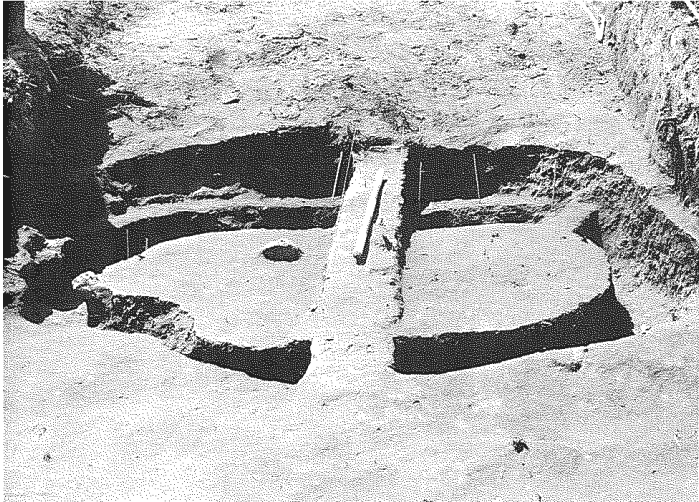
路線敷となる約5,000m²について調査区を設定し、地形にあわせて発掘地点を選定しながら調を進め、計1,125m²を発掘した。基本的な層序は、第1層表土、第2層黒褐色土層、第3層地山層で、第2層は調査区の北側を中心に分布しており、縄文時代早期～前期の遺物を包含している。調査の結果発見された遺構は小竪穴遺構1基だけである。この小竪穴遺構は調査区西側の地山面で検出されたもので、ほぼ円形プランを呈し、径約2.3m、現存する壁高約30cm（最高部）で、東半分はかなり削平されている。出土遺物からなど縄文早期ないし前期のものと推定されるが、性格については今のところ不明である。遺物は主に第2層から、縄文時代の土器（早期、前期、晩期）および石器（石鏃、石斧、石匙、石篋、搔器など）が発見された。縄文土器は前期初頭の上川名Ⅱ式、大木Ⅰ式が主体を占めている。他に平安時代の土師器、須恵器などが少量出土した。土器類はいずれも小破片である。出土遺物の総量はダンボール箱3箱分ほどで、発掘面積に比べて遺物の出土量は少ない。

3. まとめ

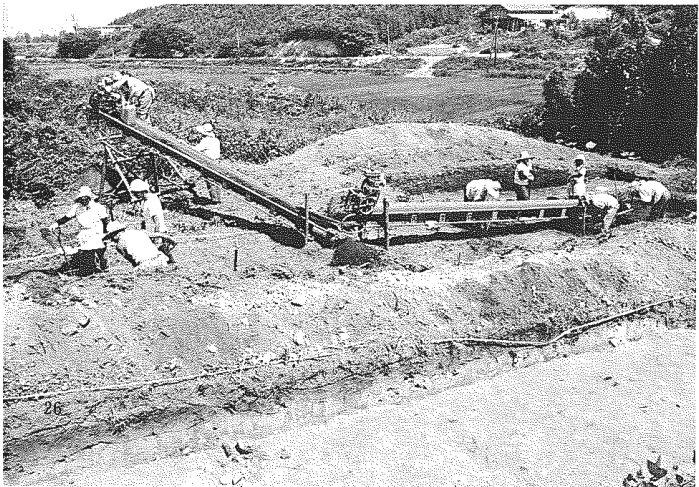
今回の調査で縄文時代および平安時代の遺物が発見されたが、これに伴う遺構は殆んど検出されず、遺跡の性格を明らかにすることはできなかった。



遺跡全景（東側から）



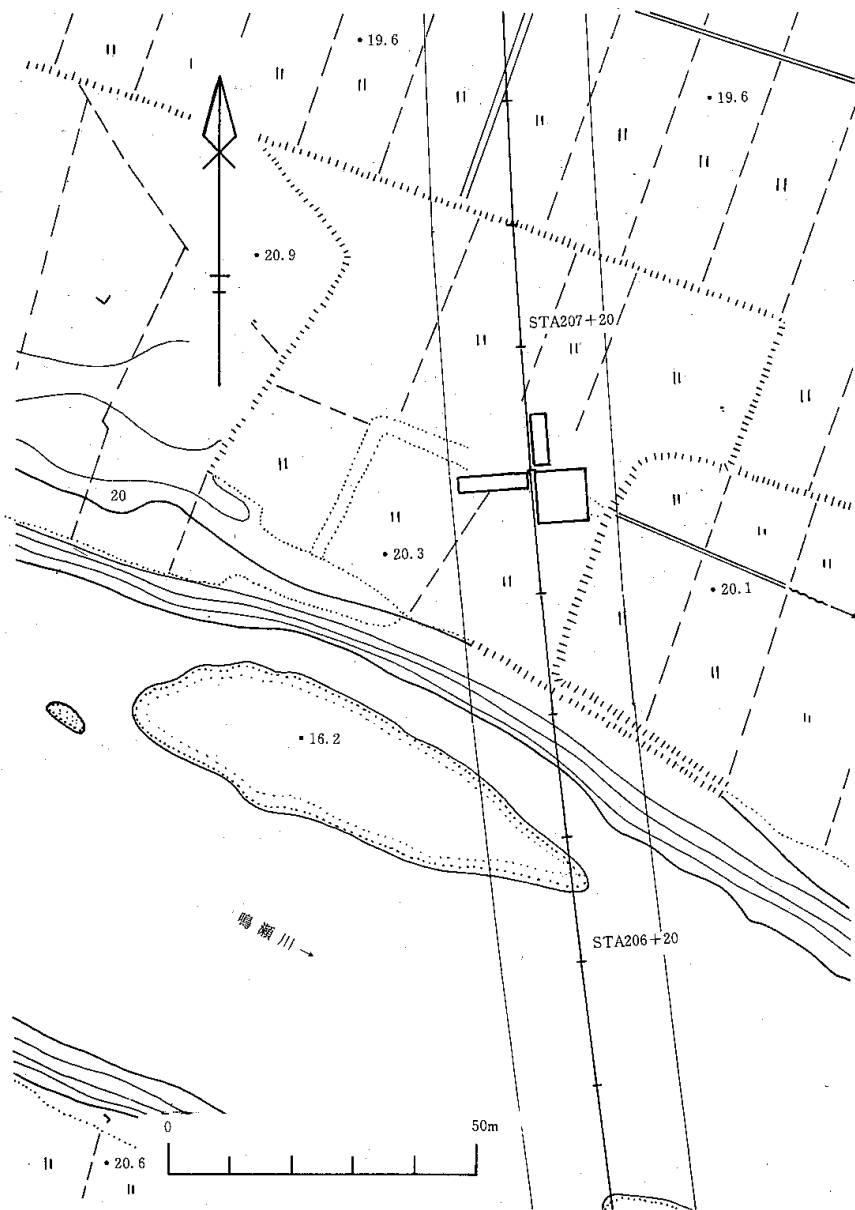
小竪穴遺構（東側から）



発掘作業状況

(5) 舟場遺跡

遺跡所在地： 志田郡三本木町新沼字舟場・二股
調査期間： 昭和48年8月20日～9月1日
調査面積： 400m²
発掘面積： 144m²
遺跡記号： AY
協力・参加者： 渋谷勝磨（三本木町三本木中学主事）
柳瀬和幸（東北大学学生）
三本木町教育委員会



遺跡地形図

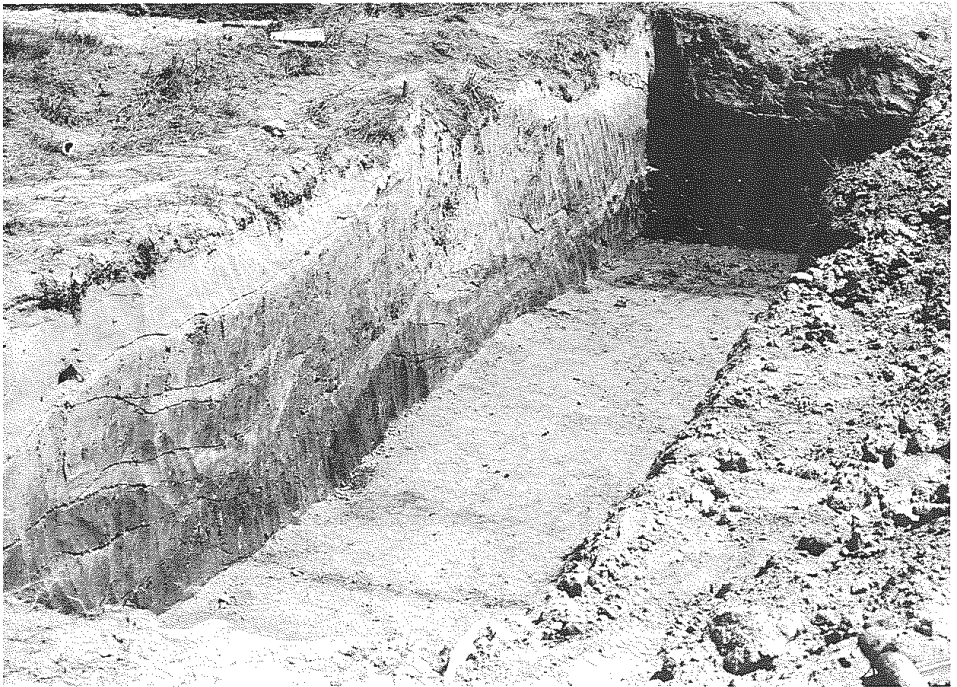
1. 追跡の立地

舟場遺跡は三本木町役場の西約3km、鳴瀬川の北岸に位置している。遺跡は現堤防内の自然堤防とみられる微高地上に立地している。遺跡付近の標高は約20m、後背湿地との比高は約0.5m、鳴瀬川の現河床面との比高は約4mである。この微高地一帯には古墳時代から平安時代にかけての土師器をはじめ、須恵器、中世陶器などが多数散布しており、かなり長期にわたって集落が営まれた形跡が認められる。

2. 調査の概要

東北自動車道は遺跡が立地する微高地の東端を高架で通り、遺跡の一部に橋梁が建設されるため、これにかかる約400m²について調査を行ない約144m²を発掘した。調査の結果、いずれの調査区でも深さ1.5mほどに達すると湧水が激しく、更に掘り下げることが危険な状態になったため調査を打ち切った。表土から発掘区掘り下げ面までの層位は約20層に分れる。いずれも砂質土で、鳴瀬川の氾濫によって運ばれた土砂が堆積したものとみられる。発掘区北側の掘り下げ面で長径1m、短径0.8m、深さ0.3mの楕円形の土壇が検出されたが、埋土には遺物も含まず時期や性格は不明である。

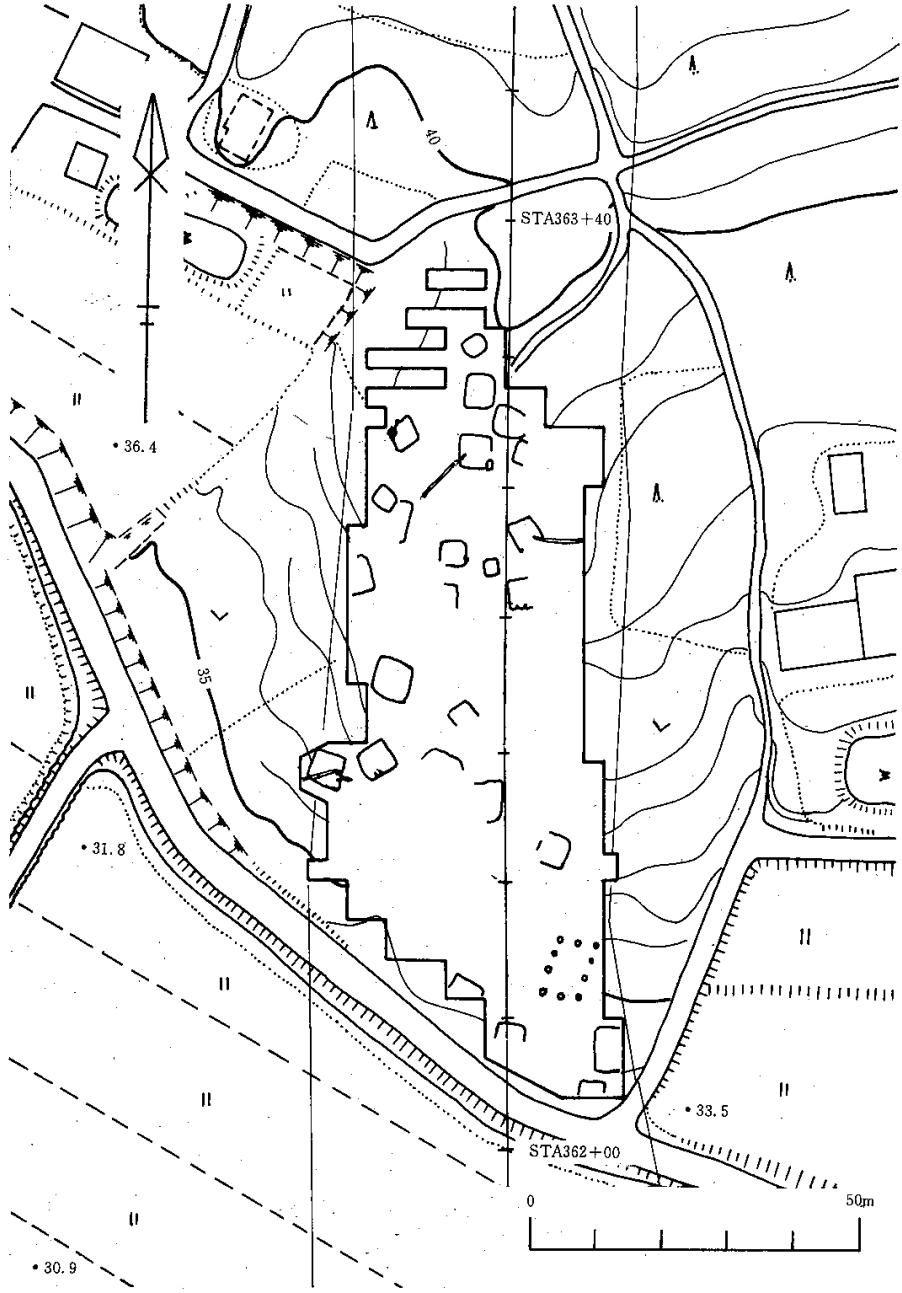
遺物は平安時代の土師器、須恵器、中世陶器などが各層から混在して発見されたが、全体として出土量は少ない。中世陶器は大甕、火鉢の破片も含まれ、鎌倉時代後半から室町時代と推定される。



上：遺跡近景（南側から）
下：発掘区堆積層の状況

(6) 藤屋敷遺跡

遺跡所在地： 古川市清滝字藤屋敷
調査期間： 昭和48年7月23日～10月6日
調査面積： 6, 000m²
発掘面積： 3, 70m²
遺跡記号： CC
協力・参加者： 高橋多吉（石越町立石越中学校教諭）
木村敏郎（石巻市立住吉中学校教諭）
芳賀良光（宮城県佐沼高等学校教諭）
千葉宗久（河北町飯野川第二小学校教諭）
桜井伸孝（宮城県涌谷高等学校教諭）
菅原正則（ ” ）
遊佐五郎（色麻町立色麻小学校講師）
清水 毅（東北学院大学学生）
門間俊彦（ ” ）
田中礼子（ ” ）
笹原百合子（東北大学学生）
青山 均（早稲田大学学生）
磯本昭彦（ ” ）
古川市教育委員会



遺跡地形図

1. 遺跡の立地

大崎平野の中心である古川市の北西部には、奥羽山脈から派生した幾条もの丘陵が荒雄川に併行して走っている。遺跡はその中のひとつ、古川市清滝地内に北西から南東に延びる標高40mほどの小丘陵の、暖かな南斜面に営まれている。この丘陵上には、縄文時代から古代にかけての遺跡が数多く分布しており、この地域が各時代の人々にとって良好な生活の舞台であったと考えられる。

2. 調査の概要

東北自動車にかかる約6,000m²を調査対象とし、約3,700m²を発掘した。遺跡は一部が近世における削平のため破壊されていたが、破壊をまぬがれた地域からは奈良時代から平安時代にかけての多数の遺構や遺物が発見された。その概略は以下のとおりである。

竪穴住居跡 合計31軒が発見された。奈良時代と平安時代のものであるが、大部分は後者に属している。これらは殆んど地山面で輪郭が確認されており、プランは方形あるいはやや長方形に近い。住居内の施設としてはカマド・貯蔵穴・周溝・柱穴などをもっている。特異のものとして住居内に大きな土壇をもち、その壁面が熟をうけて赤変し硬くなっているものや、住居内から外方へ延長する溝をもつものもみられる。これらの遺構の機能や性格については、今後に検討すべき問題をのこしている。

掘立柱建物跡 発掘区の南端で1棟検出された。2間×3間の規模である。掘り方は1辺約1m、柱穴の直径は15cmほどである。年代は、掘り方の埋土より須恵器片が出土しているので古代のものである可能性がある。この建物跡が竪穴住居跡群と関連するものであるとすれば、集落内におけるこの建物の性格があらためて問題となろう。

その他の遺構 掘立柱の建物跡とみられるピット群や多数の円形・楕円形をした土壇・溝・池・井戸などが発見された。池や井戸はごく最近のものである。

出土遺物 ダンボール箱で20個分出土した。大部分は須恵器（坏・壺・甕など）や土師器（坏・甕・甗など）である。そのほか布目瓦片・砥石・土製紡錘車・鞆の羽口・鉄鏟が若干出土している。

3. まとめ

このような古代における集落跡の検出は、最近の調査によって各地で増加しつつあり、宮城県北部でも栗原郡志波姫町糠塚遺跡や登米郡迫町対島遺跡などがこれまでも知られていた。だが大崎地方において、合計31軒にもものぼる竪穴住居跡が発見されたのは、今回調査した藤屋敷遺跡が最初であり、この遺跡の調査成果は、今後の大崎地方の歴史を解明していくうえで、ひとつの重要な指標となるであろう。



遺跡近景（南西側から）



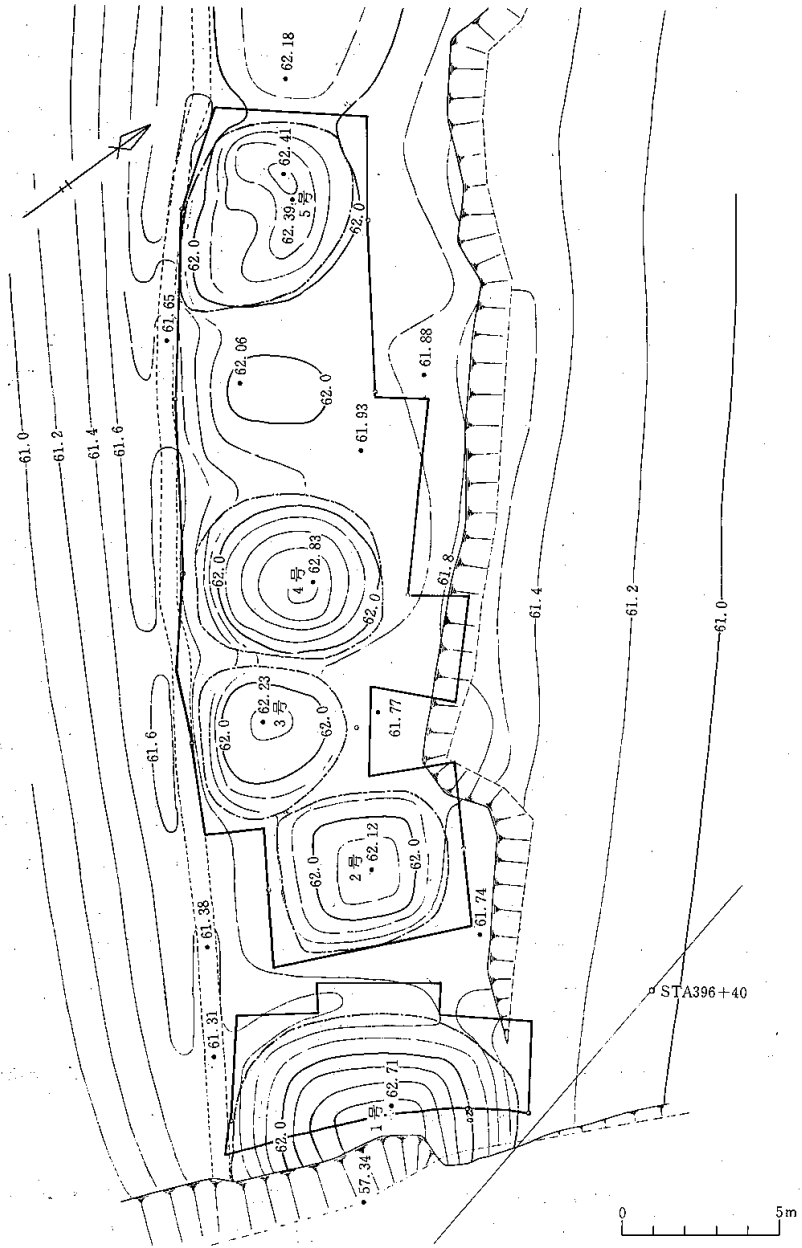
第25号住居跡（東側から）



掘立柱建物跡（南側より）

(7) ^{みや}宮の^{わき}脇遺跡

遺跡所在地： 栗原郡高清水町小山田荻生田字宮ノ脇
調査期間： 昭和48年7月3日～7月14日
調査面積： 400m²
発掘面積： 210m²
遺跡記号： B F
協力・参加者： 三崎一夫（河北新報社勤務）
佐藤正人（東北学院大学学生）
佐藤房江（ " ）
斎藤真澄（ " ）
高清水町教育委員会



地形圖

1. 遺跡の立地

宮ノ脇遺跡は高清水町役場の北西約4kmに位置している。この地区には築館丘陵の一部である標高約60～70mの小丘陵が西から東に延びており、丘陵の南側は小山田川によって形成された沖積地がひらけ、北側には丘陵に沿って善光寺川が東流している。本遺跡はこの小丘陵の尾根に立地しており、分布調査の際、この丘陵尾根上の雑木林中に東西に並んでいる5基の小塚が発見された（東から第1～5号塚と命名）。塚周辺の標高は約62m、南側水田面との比高は約30mある。

2. 調査の概要

調査では塚の性格を把握するとともに、塚周辺についても遺構の有無を調査することを意図し、路線敷かかる約400m²のうち、塚およびその周囲約210m²発掘した。塚の状況、調査によって検出された遺構の概略は以下のとおりである。

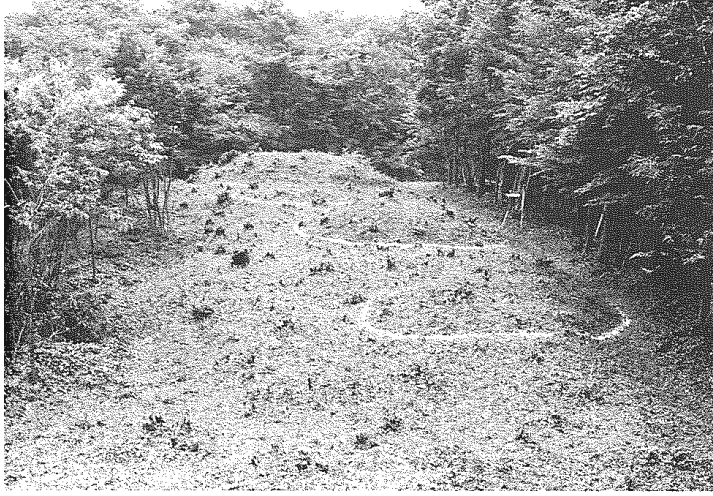
塚 5基の塚は尾根上の平担面につくられているが、その配列や間隔は不規則である。平面形は各塚ともやや変形した隅丸の方形を呈している。規模は一辺が4～9mほどで、5m前後のものが多い。高さは30cmのものから130cmのものまであり、一定していない。調査の結果、いずれの塚も黒色有機質土、地山の黄褐色土、および両者が混りあった土による積土によって築かれており、塚の基底面は表土や地山面を削り、平坦に整地してある。第2～4号塚では中央部の基底面で多量の木炭片や微量の焼土の散布が認められた。塚に関連するとみられる遺構は第1号塚でピット2個、第2号塚で木炭が充満した土壇1基・ピット3個、第3号塚で土壇1基、ピット7個、第5号塚で土壇1基が発見された。第1～3号塚の土壇やピットはすべて基底面から掘り込まれたものであり、土壇は塚中央部で、ピットは土壇周辺で検出された。これに対して第5号塚の土壇だけは塚の積土上面から掘り込まれたものであった。第4号塚では遺構は全く検出されなかった。遺物は第2号塚の土壇から古銭4枚・第5号塚の土壇中から古銭6枚・磁器片、ヒトの歯の残片が発見された。古銭はいずれも中国銭であった。

塚を伴わない土壇 塚周辺の表土下で、長辺100～120cm、短辺50～80cm、深さ35～70cmの隅丸の長方形を呈する土壇が4基検出された。このうち2基の土壇は短辺に外接するピットを1個備えている。遺物はいずれの土壇からも発見されなかった。

溝 第4号塚と第5号塚の間で尾根を横断して南北に延びる幅約1m、深さ約30cmの溝が検出された。溝の埋土からは土師器片が数点発見されている。

3. まとめ

塚や発掘によって検出された遺構の性格や年代についてはまだ詳細な吟味検討をしていないが、塚や塚を伴わない土壇は出土遺物および土壇の形状などからみて、中世末～近世初頭頃の墓である可能性が強い。溝の年代や性格については今のところ不明である。



発掘前の塚の状況
(西側から)

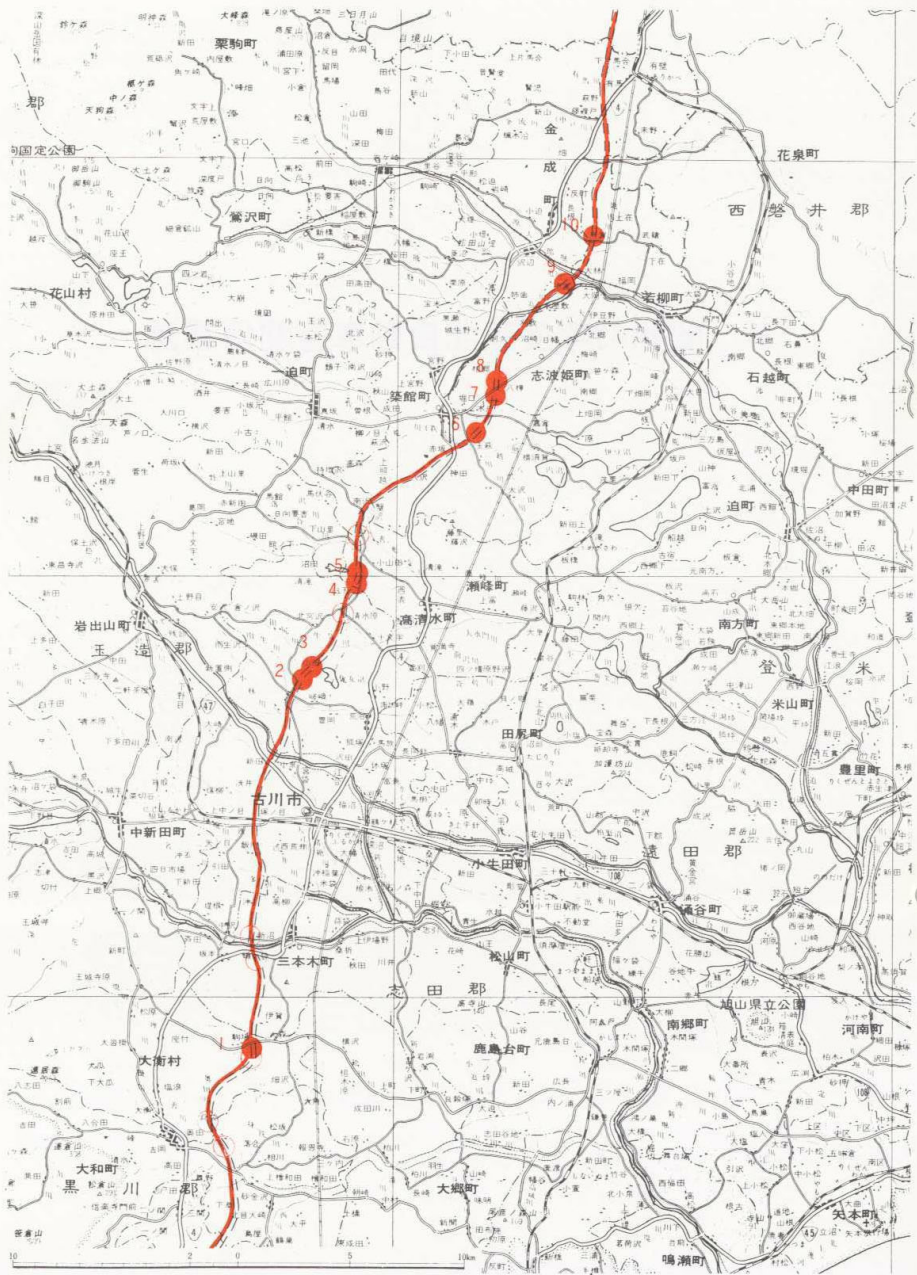


同上発掘後の状況
(西側から)



第3号塚下で検出された
土壌およびピット

Ⅱ 昭和 49 年度東北自動車道関係遺跡



昭和49年度東北自動車道関係遺跡位置図 (○印は昭和48年度調査遺跡)

調査遺跡

調査主体者 宮城県教育委員会

日本道路公団

調査担当者 宮城県教育庁文化財保護課

遺跡番号	遺跡名	所在地	調査期日	収録ページ
1	かみ かの かわ 上 深 沢	黒川郡大衡村駒場字上深沢	(第1次) 昭和48年10月15日 ~ 12月27日 (第2次) 昭和49年4月15日 8月2日	43
2	あま かの やま 愛 宕 山	古川市宮沢字愛宕山	(第1次) 昭和49年9月17日 ~ 3月30日	49
3	いっ ほん すぎ 一 本 杉	古川市宮沢字一本杉	昭和49年12月3日 ~ 12月20日	55
4	にし て どり 西 手 取 (沖 A)	栗原郡高清水町小山田字沖	昭和49年7月3日 ~ 9月6日	59
5	て どり 手 取 (沖 B)	栗原郡高清水町小山田字沖	(第1次) 昭和48年7月23日 ~ 8月11日 (第2次) 昭和49年7月18日 ~ 9月12日	63
6	はら だ 原 田	栗原郡築館町秋沢字新田前	昭和49年9月17日 ~ 9月26日	67
7	やま の うえ 山 の 上	栗原郡志波姫町堀口字西風前	昭和49年10月7日 ~ 11月8日	71
8	つる の まる 鶴 の 丸	栗原郡志波姫町八樟字谷地	(第1次) 昭和49年9月11日 ~ 11月29日	75
9	さ の 野 佐 の 野	栗原郡金成町梨崎字佐野	昭和49年7月22日 ~ 10月16日	79
10	あり が みね 有 賀 峰 (地 田)	栗原郡若柳町有賀字峰	昭和49年8月5日 ~ 9月6日	83

(1) 上^{かみ}深^{ふか}沢^{ざわ}遺跡

遺跡所在地：黒川郡大衡村駒場字上深沢

調査期間：昭和48年10月15日～12月27日（第1次調査）

：昭和49年4月15日～8月2日（第2次調査）

調査面積：4,900m²

発掘面積：2,575m²

遺跡記号：AN

協力・参加者：阿部正光（東北学院大学学生）

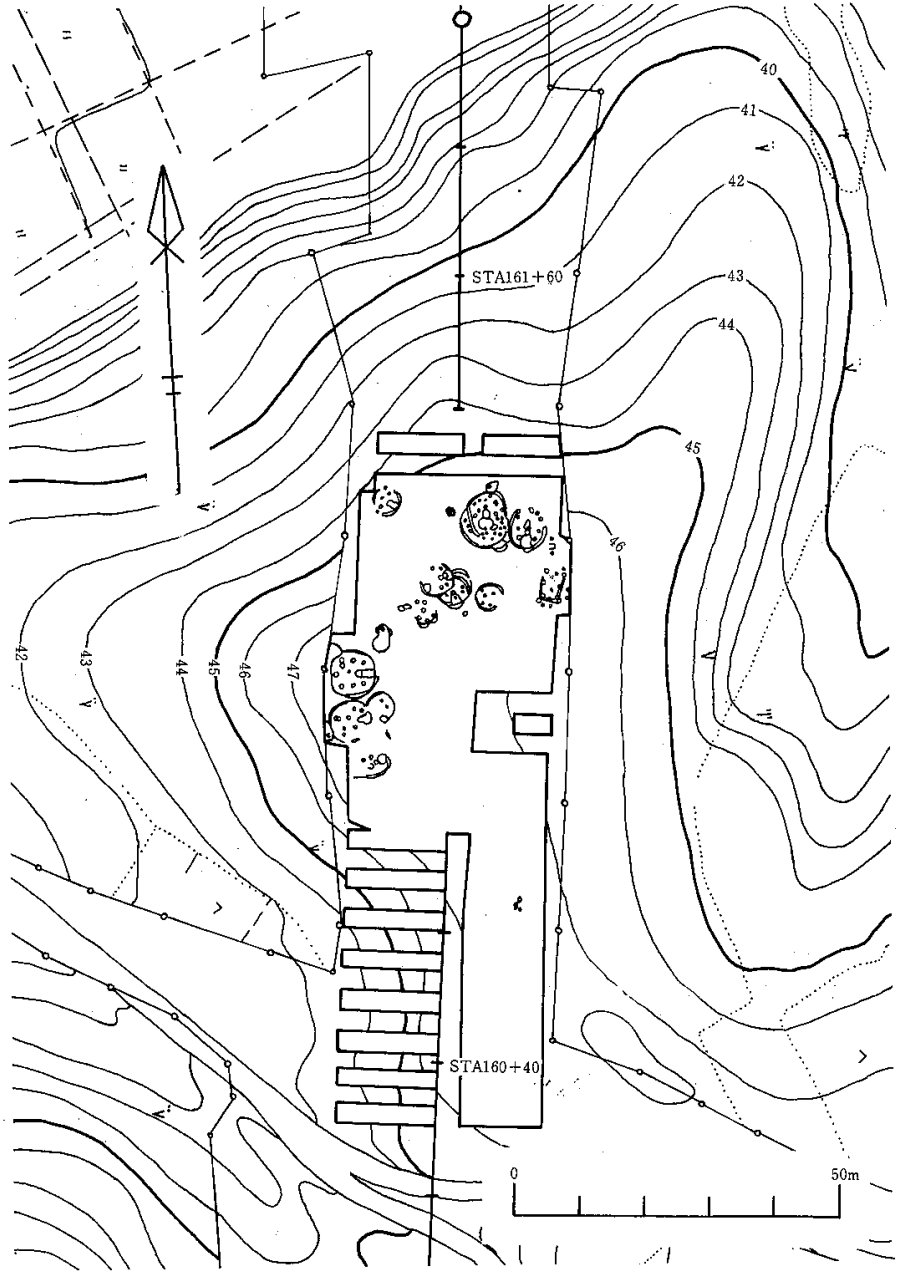
佐藤正人（ " ）

佐藤房江（ " ）

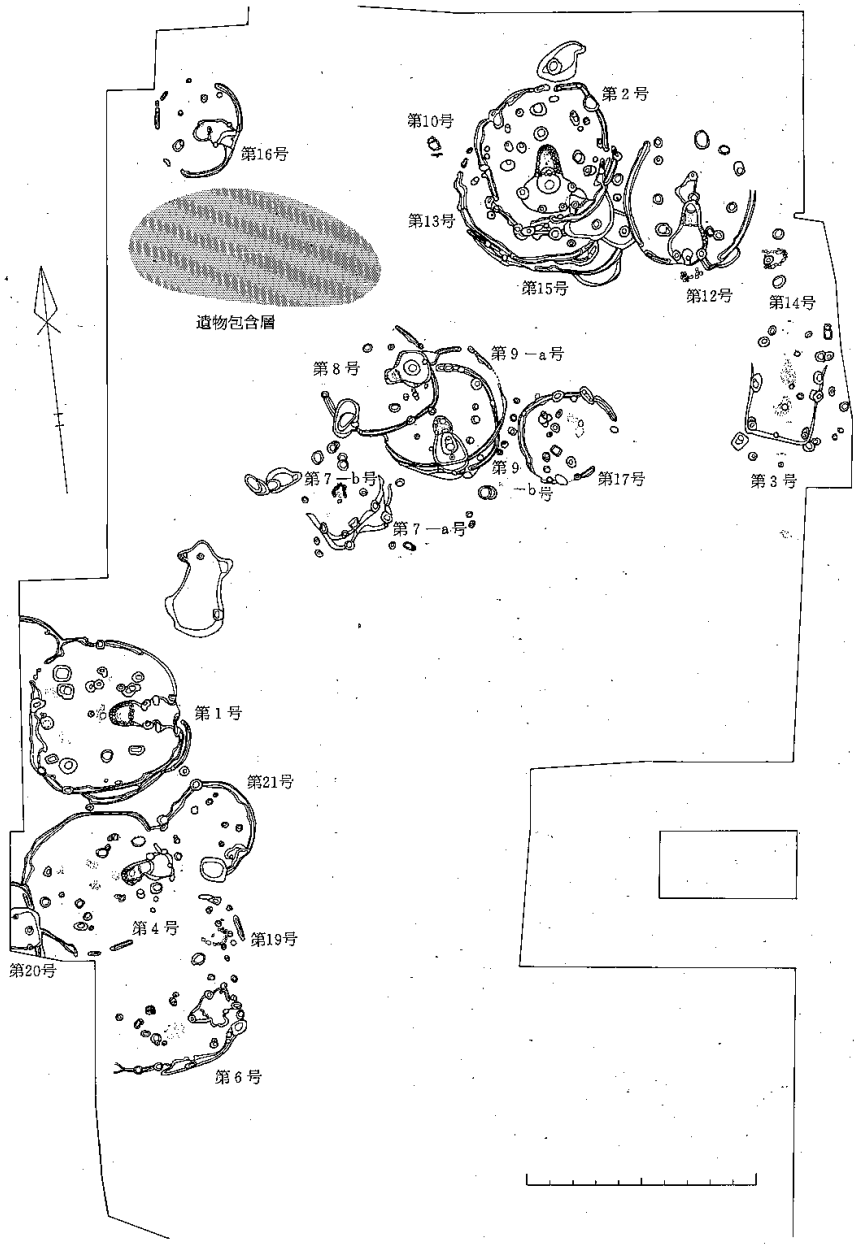
斎藤真澄（ " ）

三塚敏明（東北大学学生）

大衡村教育委員会



遺跡地形図



遺構配図(部分)

1. 遺跡の立地

上深沢遺跡は、国道4号線沿いにある大衡村役場から北東約5kmに所在する。遺跡は第三紀の泥岩を基盤とした大松沢丘陵から北側にはり出した舌状台地上に立地しており、調査以前には山林となっていた。遺跡付近の標高は約47m、低い現在の水田面との比高は約10mである。本遺跡の東約9kmとは縄文中期の遺跡と知られている大松沢貝塚（大郷町）がある。

2. 調査の概要

東北自動車道は、遺跡が立地する台地の中央部を南北に縦断して通るため、路線敷にかかる約4,900m²を対象に昭和48・49年の2次にわたり調査を行ない計2,575m²を発掘した。第一次調査では、台地平坦面で縄文時代の遺構・遺物を発見したが、12月以降天候が悪化したため調査を第二次調査にもちこした。第二次調査では路線敷内の遺物が散布する地域についてほぼ全面発掘を行なった。その結果、台地の北側で縄文時代の竪穴住居跡21軒と同時期の遺物包含層、台地中央部から南側にかけての平坦面で中世以降と推定される溝やピット群などが検出された。

縄文時代の遺構と遺物 〈竪穴住居跡〉発見された住居跡群は台地北側の平坦面から北緩斜面の縁辺に沿って円弧状に配置されている。本遺跡は表土層から地山まで4層で構成され、Ⅲ層の黒ボク（火山灰）の下に縄文時代の包含層がみられた。住居跡はすべて地山面で確認された。住居の平面形は円形ないし、不整形円形を呈するものが多いが、中には長方形を呈するものもある。規模は直径6～7m程度のものが一般的で、直径4mほどの小さいものもみられる。大部分の住居跡は周溝や炉を備えている。炉は形態上・複式炉・土器埋設炉・石組炉・地床炉に分類でき、複式炉をもつ住居跡が最も多い。複式炉は土器埋設部・石組部・掘り込み部からなり、その全長は、住居の直径のほぼ $\frac{1}{2}$ に達している。支柱穴は6個のものが多い、住居跡の多くは改築された形跡が認められる。これらの住居跡群は出土遺物により縄文中期大木9式期のものと推定される。

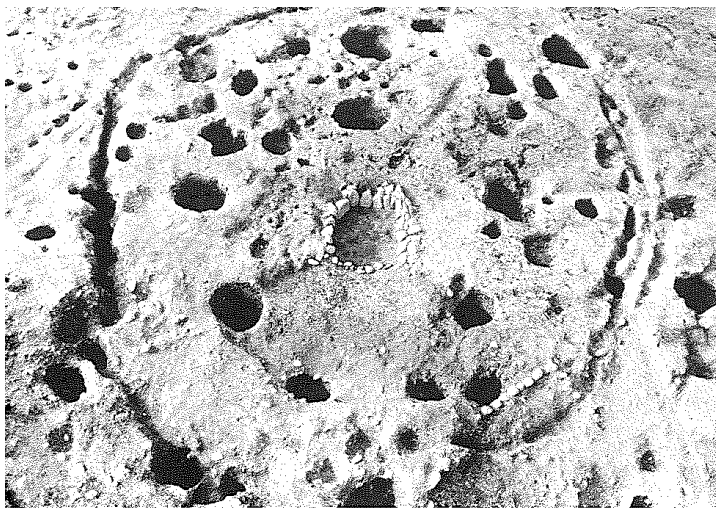
〈遺物包含層〉調査区の北西部でほぼ東西9m×南北6mの範囲に大木9式期の遺物包含層が検出され、層中から、多量の土器・石器などがまとまって出土した。

遺物 遺物包含層および住居跡などから・多量の遺物が出土した。土器以外の遺物としては石鏃・石斧・石錐・搔器・石匙・石皿・敲石・磨石・剥片・石核・装身具類・土偶・土製斧などが発見されている。

その他の遺構と遺物 調査区域の中央部から南側にかけて多数の溝やピット群が検出された。これらの遺構からは中世以降のものと推定される陶磁器・石臼・永楽銭などが出土した。

3. まとめ

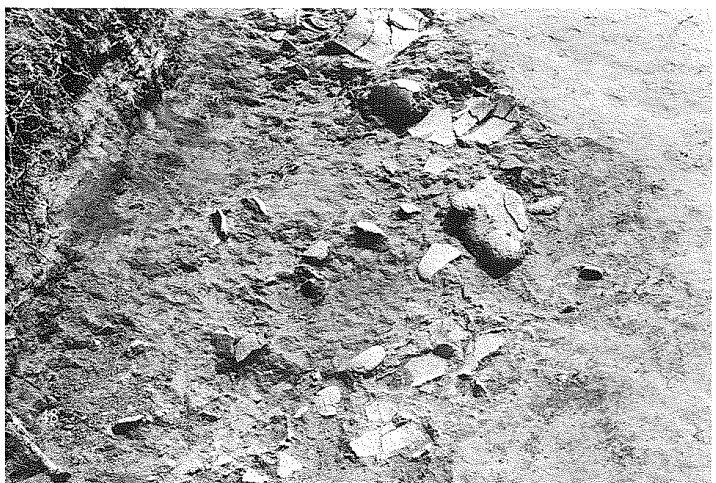
今回の調査は台地の一部を対象としたものであったが、台地縁辺に沿って円弧状ないし馬蹄形に配置された縄文時代中期の住居跡が21軒検出されたのをはじめ、同時期の遺物が多量に発見された。これらは縄文時代の集落の研究に貴重な資料を提供することになる。



第2号住居跡（南側から）



第4号住居跡炉
（東側から）



北西部遺物包含層
（東側から）

(2) 愛宕山遺跡

遺跡所在地：古川市宮沢字愛宕山

調査期間：昭和49年9月17日～50年3月30日（第1次）

調査面積：15,000m²

発掘面積：6,700m²（8,700の予定）

遺跡記号：AZ

協力・参加者：柳瀬和幸（東北大学学生）

古川市教育委員会

1. 遺跡の立地

愛宕山遺跡は、陸羽東線陸前古川駅より北西約6kmの宮沢字愛宕山に位置する。古川市を中心として広がる大崎平野の北には、奥羽山脈より派生する標高50m前後の丘陵が江合川（荒雄川）に沿って東に幾重にも伸びており、それらの丘陵上には旧石器時代から中世までのさまざまな遺跡・遺構が豊富に存在することが知られている。遺跡の立地する長岡丘陵もそれら丘陵の中のひとつである。遺跡は、長岡丘陵のほぼ西端、西に突出する小高い丘のほぼ全体をしめている。遺跡付近の標高は頂上部で約48mあり、水田面との比高は約20mである。この丘に立ち南を望むと眼下には大崎平野が広がり、さらに鳴瀬川に沿う大松沢丘陵がその背後に続き、遠くには七ツ森や船形山が望まれる。

2. 調査概要

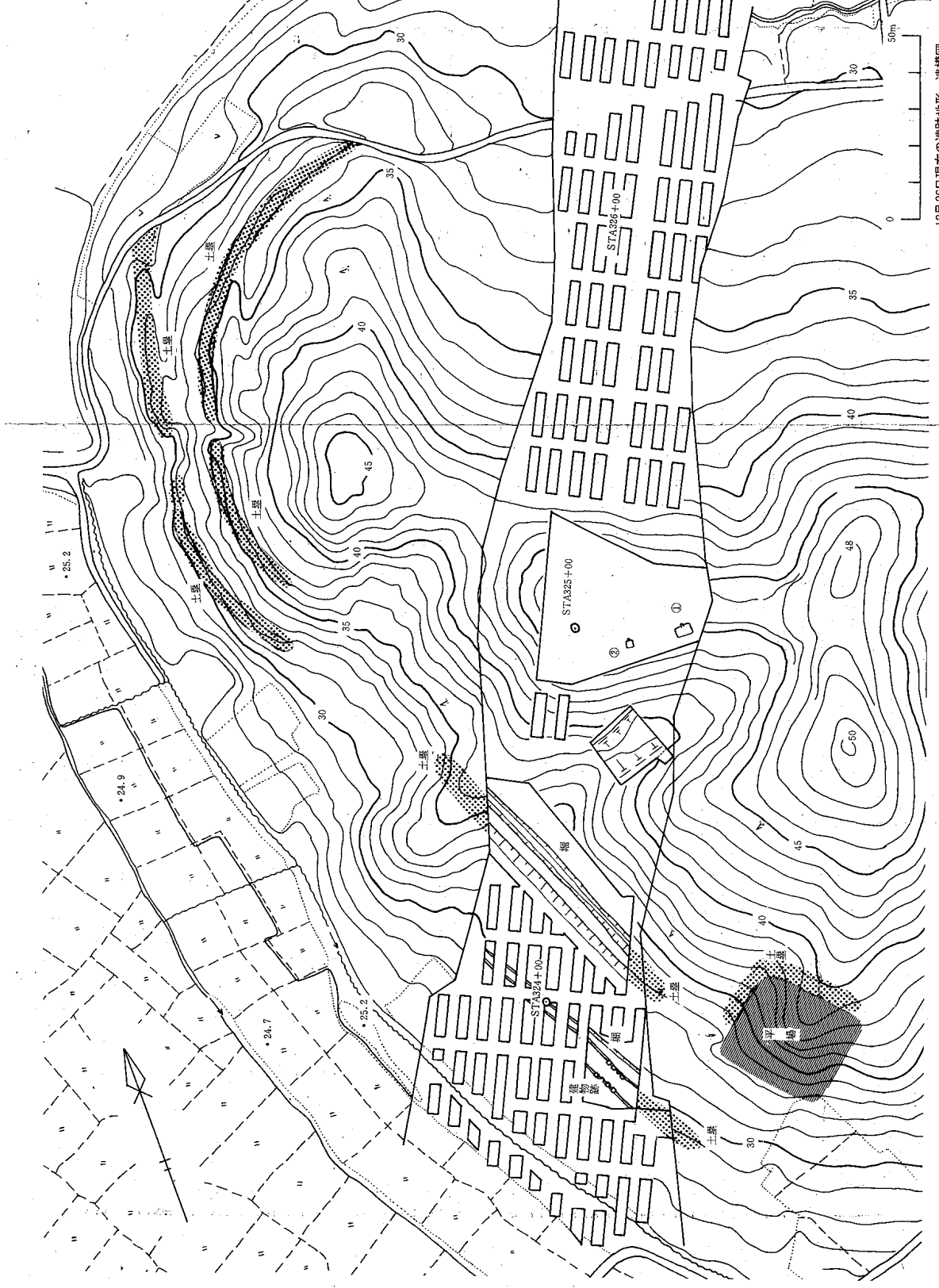
調査は、東北自動車道敷地内約15,000m²のうち丘陵頂上部と南北両斜面のほぼ全域を対象として行ない、昭和49年12月現在約6,700m²を発掘したが、一部は未調査である。調査の結果、下記の遺構および遺物を検出した。

縄文時代 遺跡南斜面裾部東側に約100m²範囲で縄文時代の遺物包含層が確認された。この包含層は厚さ20～40cmで、その中から多量の土器や石器が出土した。土器には精製・粗製の2種類があるが、粗製土器が圧倒的に多い。粗製土器の口縁部は平縁となる大形のものと山形突起をもつものがあり、器形は単純な深鉢形が多い。精製土器には沈線による工字文が付され、発達した山形突起などをもつものが多く、器形としては鉢形・壺形・浅鉢形・台付鉢などが見られる。これらの土器は、器形・文様などの特徴から晩期末大洞A¹式と考えられる。また石器は、石鏃・石錐・石匙・石斧・搔器・石核・剥片などが発見されたが、右鏃が最も多く、他は数点だけである。なおこの包含層の北東部は堀によって切断されている。

弥生時代 遺跡中央頂上平坦部から南斜面にかけて広範囲に弥生式土器の分布が見られた。土器は、椀形図式と思われるものが少量と天王山式と思われるものが比較的まとまって出土した。

平安時代 平安時代の遺構として、遺跡中央頂上部南斜面において、竪穴住居跡が3軒発見されている。そのうち調査の終了したものが2軒、未調査のものが1軒である。第1号住居跡は東西5.2m×南北3.1mの方形を呈し、床面は平坦で南側に一部分貼床が見られ・カマドは北壁中央やや東よりに位置し煙道を備えている。壁に沿ってV字状の周溝がめぐり、床面からピットが20個発見されている。遺物はいずれも土師器で、坏が1個体と少量の破片が出土した。第2号住居跡は東西2.5m×南北2.3mの方形を呈し、床面は平坦で全面に貼床が見られ。カマドは北壁中央やや西よりに位置し煙道を備えている。周溝はなく、床面からピットが2個、住居外北西隅から1個発見されている。遺物はいずれも土師器で、坏などの破片が少量出土した。

なお遺跡南斜面裾部において、布目瓦、須恵器の破片が少量出土している。



比例尺 1:5000

土塁・堀・建物跡 遺跡南斜面の中央部と裾部を、土塁・堀が斜面に沿って二重にめぐっている。これらの土塁・堀の間隔は約15mあり、いずれも路線外に続いており、丘陵の南斜面を東西にめぐっている土塁・堀の一部であることが確認された。しかし、裾部の土塁については発掘区のほぼ中央から西半分を欠いている。裾部の土塁は、基底幅約5m、高さ約1mである。

この土塁をまたぐような形で8個の柱穴が発見されたが、これらの柱穴から、柱間約1.8m、約4.2mの3間1間の建物跡の存在が推定された。北接する堀は、幅約3.5m、深さ約1m、基底幅約2.5mの箱堀形で、底から土師器、須恵器が出土している。中央部の土塁は、基底幅約7m、高さ約1.5mであり、堀は、幅約4m、深さ約0.6m、基底幅約1.5mである。この土塁の積土から弥生式土器、土師器、須恵器の破片および布目瓦が少量出土している。

3. まとめ

①遺跡の南斜面裾部東側に縄文時代の遺物包含層が確認された。これは道路敷の東側にまで広がっているものと思われる。

②遺跡の頂上部近くに、現在のところ3軒の竪穴住居跡が検出されている。これらは出土遺物から平安時代のものと考えられる。

③遺跡南斜面の中央部と裾部において検出された土塁・堀・建物跡は、路線外における土塁堀・平場などの存在から、館などの軍事的施設に伴うものと考えられ、年代は出土遺物などから古代末頃のものである可能性がある。



遺跡遠景（南側から）



第1号住居跡（南側から）



土塁・堀（西側から）



土塁・堀・堀立柱建物跡
（西側から）

(3) ^{いっ ぽん すぎ}一本杉遺跡

遺跡所在地：古川市宮沢字一本杉

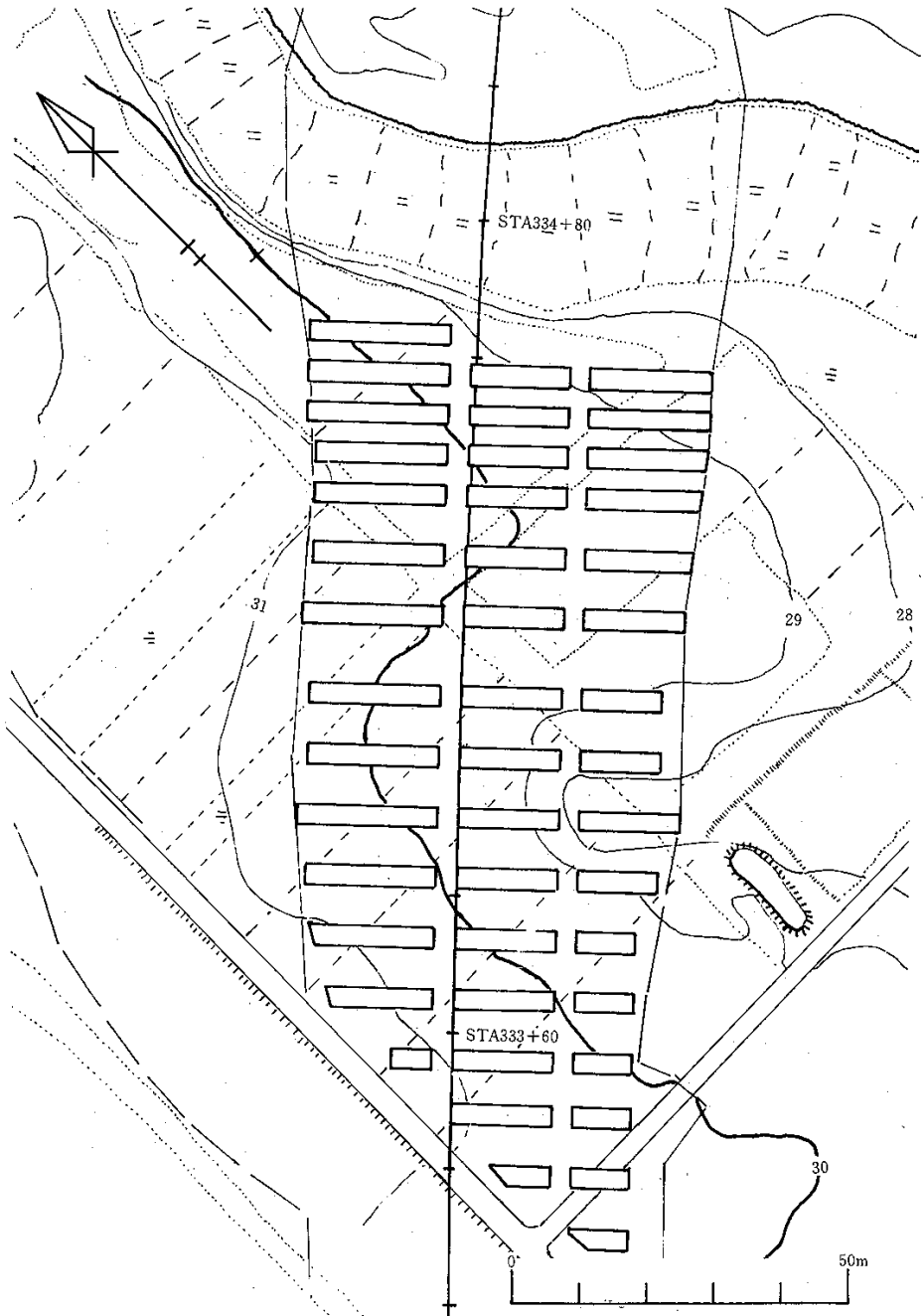
調査期間：昭和49年12月3日～12月20日

調査面積：6,000m²

発掘面積：2,070m²

遺跡記号：BB

協力期間：古川市教育委員会



遺跡地形図

1. 遺跡の立地

一本杉遺跡は、陸羽東線古川駅より北西約7kmの古川市宮沢字一本杉に位置する。古川市を中心に広がる大崎平野の北側には、奥羽山脈より派生する標高50m前後の丘陵（築館丘陵）が樹枝状に東に延びている。この丘陵の南端で大崎平野に直面するのが長岡丘陵である。本遺跡は、長岡丘陵が化女沼に東面する標高30m前後の緩斜面上にある。付近には、南約700mに愛宕山遺跡、同約400mに長者原遺跡、そして化女沼の東500mには朽木橋横穴古墳群などがある。

2. 調査の概要

調査地点は、化女沼に東面する緩斜面畑地（一部原野）である。道路敷にかかる約6,000m²を調査対象とし、約2,070m²を発掘調査した。表土は、耕作土で、以下地山に至るまで黒ボク土であり、地山は黄色の凝灰岩質風化土である。表土上面より地山までは40cm～150cmで、平均50cmである。

遺構は、検出されず、遺物は標高30～31mの発掘区北西部と道路際の南部の2地点で、縄文晩期の土器片・平安時代の土師器・須恵器片をそれぞれ少量、無茎の石鏃1点を発見しただけである。これらの遺物は、いずれも黒ボク層から出土した。

3. まとめ

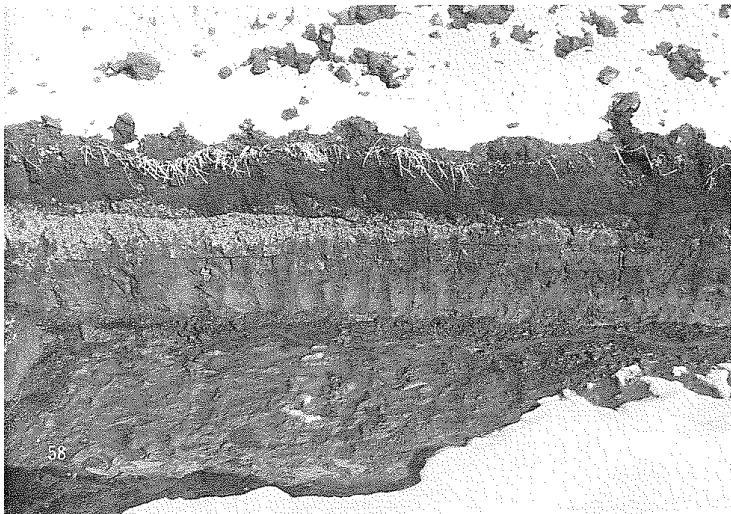
以上のことから、本遺跡の中心は道路敷外にあり、今次発掘区はその散布地であることが判明した。



遺跡全景（南側から）



遺跡全景（北側から）



発掘区堆積層の状況

(4) ^{にしてとり}西手取 (沖A) 遺跡

遺跡所在地：栗原郡高清水町小山田字沖

調査期間：昭和49年7月3日～9月6日

調査面積：6,300m²

発掘面積：2,365m²

遺跡記号：BD

協力・参加者：遠藤智一（岩出山町真山中学校教諭）

木村敏郎（石巻市立住吉中学校教諭）

渋谷勝磨（三本木町三本木中学校主事）

佐藤信行（栗原郷土研究会員）

小山 純（宇都宮大学学生）

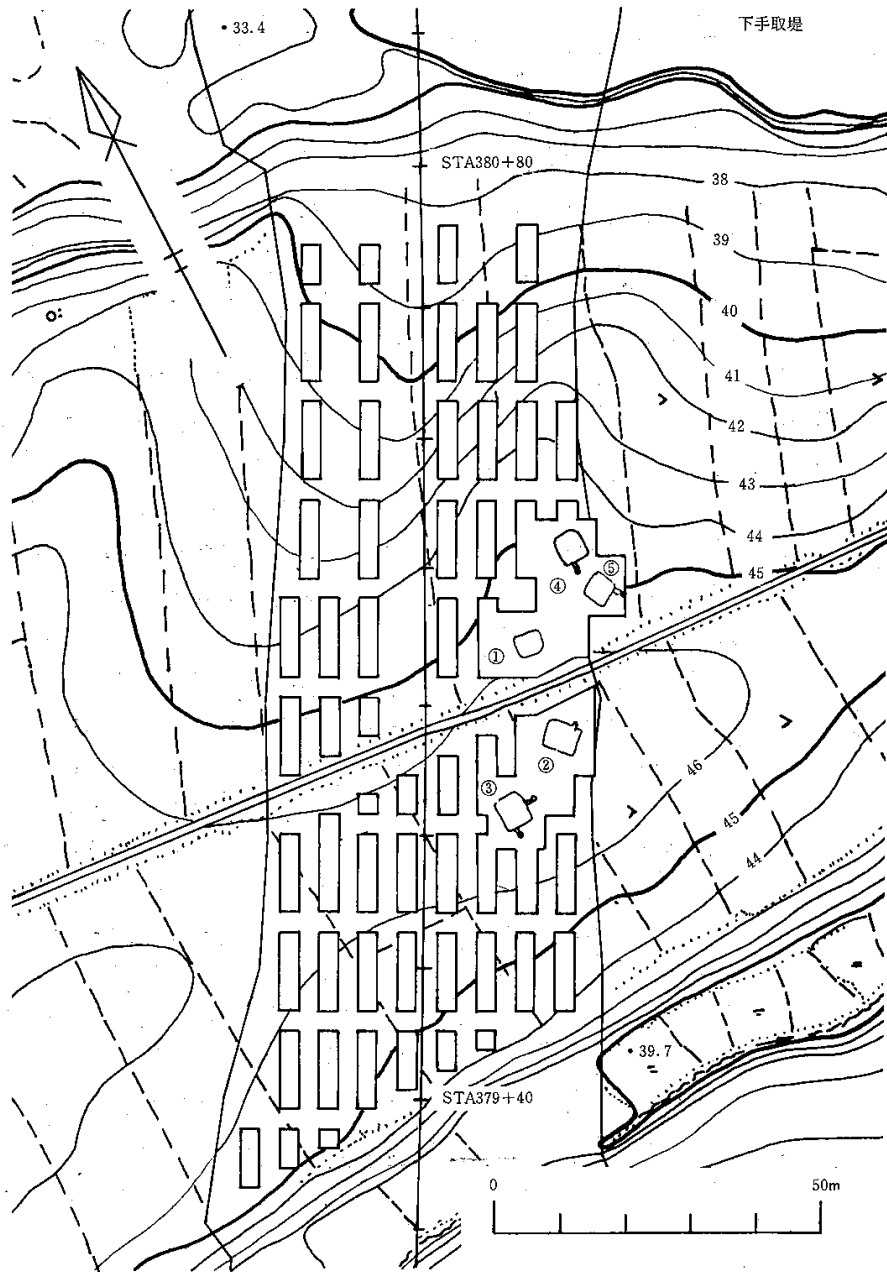
小泉道典（東北学院大学学生）

柳瀬和幸（東北大学学生）

上村淳一（東洋大学学生）

高清水町教育委員会

※本遺跡は、当所は「沖A遺跡」を呼んでいたが今回『西手取遺跡』と改めた。



遺跡地形図

1. 遺跡の立地

西手取遺跡は国鉄高清水駅の北西約3kmの手取地区に位置する。高清水町の北部から西部にかけて奥羽山脈からなだらかな丘陵が数条派生している。これらのひとつで東西にはしる標高約45mの丘陵平坦面を中心として遺跡は形成されている。現在畑地や牧草地となっている。

2. 調査の概要

調査は路線敷にかかる約6,300m²を対象に行ない、2,395m²を発掘した。調査の結果、縄文時代の遺物と平安時代の住居跡が発見された。

縄文時代 羽状縄文をもつものや裏面に条痕文をもつ縄文時代早期末から前期初頭にかけての土器片少量と石鏃・石匙などの石器が出土している。

平安時代 調査区中央部で竪穴住居跡が5軒検出された、各住居跡の概略は次のようである。

第1号住居跡 東西4.5m、南北3.5mの隅丸長方形プランを呈する。周溝は東南隅のみにみられ、カマドは東壁の北端につくられていた。柱穴・貯蔵穴は検出されず、貼床はない。

第2号住居跡 東壁3.8m、西壁4.3m、南北壁5.1mの台形プランを呈する。カマドは北壁の東よりにつくられており、長さ約60cmの煙道を伴っている。東北隅に径90cmの貯蔵穴と思われるピットがあり、中から土師器の甕が2点出土した。東北隅を除く三隅に柱穴が検出された。周溝・貼床は認められない。

第3号住居跡 東西約3.9m、南北4.7mの隅丸長方形プランを呈し、柱穴を住居跡の各隅にもっている。煙道をもつカマドが北壁中央部と東壁南よりの2個所で検出された。東壁カマド本体はこわされており裾部の痕跡を残すだけであり、北壁カマドより古いことがわかる。床面上にかなりの焼土が散らばっており、棒状木炭が北東・北西両隅から住居跡中心部にむかって横たわっているのが検出された。木炭を含む厚さ15cmの貼床が認められ、貼床の下に南壁付近で幅80cm、長さ3m、深さ約30cmの溝が見出される。

第4号住居跡 東西4.2m、南北約4.4mの隅丸長方形プランを呈し、床がみられ1mの煙道をもつカマドが南壁西よりにつくられている。周溝はない。

第5号住居跡 一辺が約4.2mの隅丸方形プランを呈し、貼床があり、カマドが東壁北よりにつくられている。カマドの南側に不整円形の貯蔵穴が1個検出された。周溝はない。

各住居跡内からは土師器・須恵器・鉄製品・砥石などの遺物が出土した。それらの中にはロクロ成形による内面黒色処理された糸切り底の土師器坏が認められ、遺構遺物共に平安時代に属すると思われる。又第4号と第5号住居跡埋土より、白磁と思われる破片が2点出土している。

3. まとめ

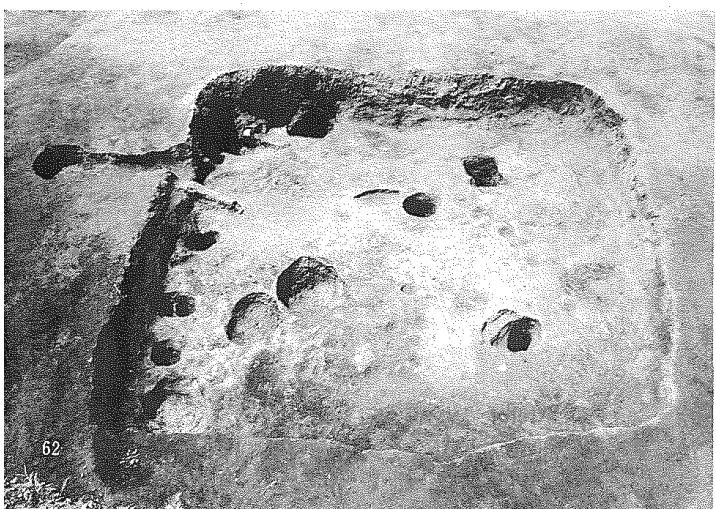
今回の調査では縄文時代早期～前期の遺物と平安時代の竪穴住居跡5軒が発見された。平安時代の集落跡の中心は路線敷から外れた東側の丘陵上にあるものと考えられる。



遺跡遠景（北側から）



第3号住居跡
遺物出土状況



第4号住居跡

(5) 手取^{てどり} (沖B) 遺跡

遺跡所在地：栗原郡高清水町小山田字沖

調査期間：昭和48年7月23日～8月11日（第1次調査）

昭和49年7月18日～9月12日（第2次調査）

調査面積：16,500m²

発掘面積：2,274m²
1,681m² > 3,955m²

遺跡記号：BE

協力・参加者：金野 正（宮城県築館女子高等学校教諭）

遠藤智一（岩出山町立真山中学校教諭）

三宅宗議（宮城県古川工業校学校教諭）

佐藤信行（栗原郷土研究会員）

青山 均（早稲田大学学生）

磯本明彦（ " " ）

泉 信次（国学院大学学生）

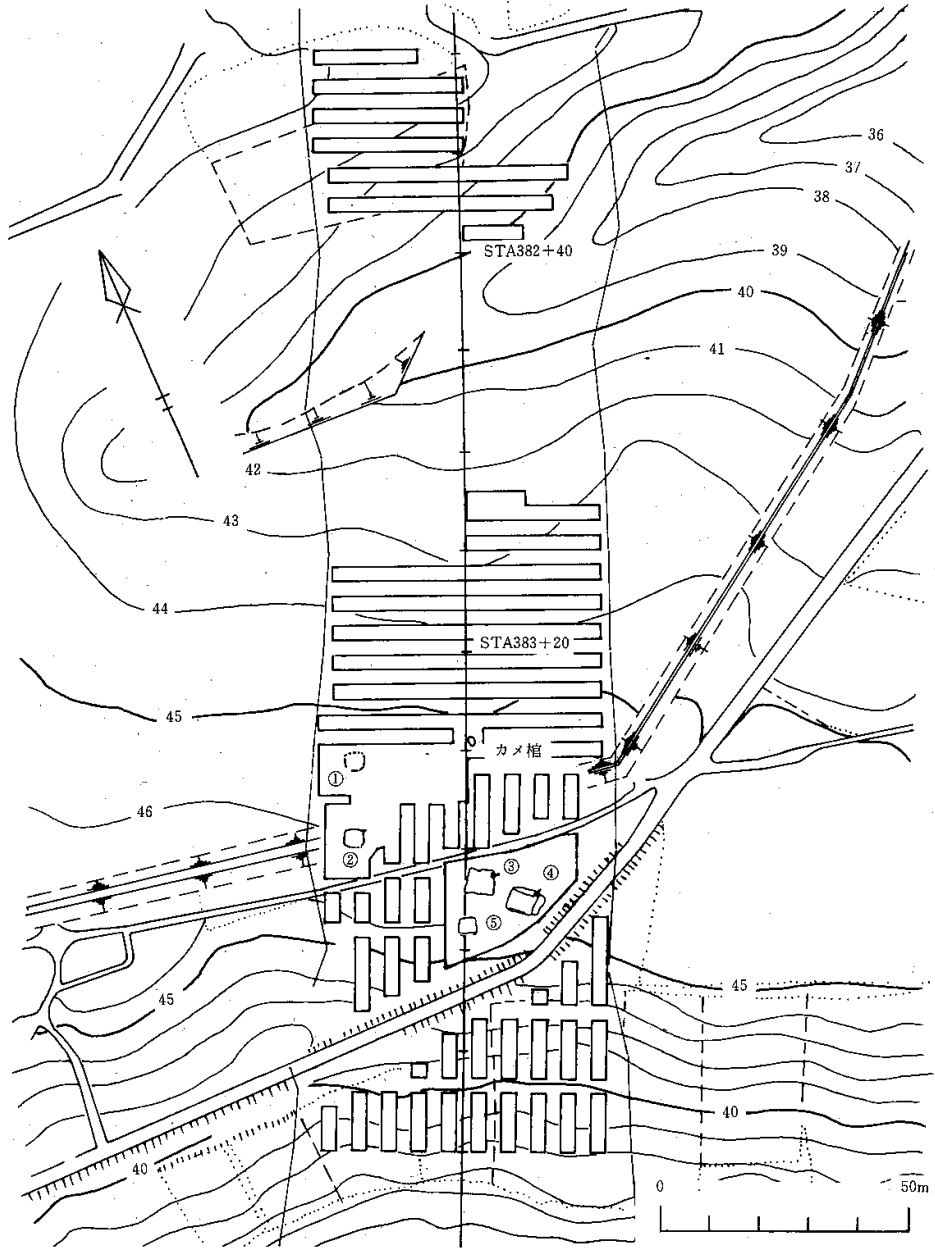
小山 純（宇都宮大学学生）

小泉道典（東北学院大学学生）

柳瀬和幸（東北大学学生）

高清水町教育委員会

※本遺跡は、当社は「沖B遺跡」と呼んでいたが、今回『手取遺跡』と改めた。



遺跡地形図

1. 遺跡の立地

手取遺跡は高清水町の中心から北西約3kmの位置にある。遺跡は小山田川に沿って東に突出する標高45mほどの丘陵上に立地し、前述の西手取遺跡とは下手取堤をはさんで北に約200m離れている。遺跡の北半はモトクロス場で、その造成によって地形は著しく変えられている。

2. 調査の概要

調査は48・49年の2次にわたり、路線敷内の約16,500m²を対象に行なった。一次調査ではモトクロス場内で2,274m²、二次調査では丘陵平坦面と南斜面で1,681m²、合計3,955m²を発掘した。調査の結果、丘陵平坦面を中心として一次調査では平安時代の竪穴住居跡1軒と合口甕棺1基が、二次調査では竪穴住居跡が4軒検出された。各遺構の概略は次のようである。

第1号住居跡 削平のため破壊が著しく不明な点も多いが、東西3.8m、南北約3.3mの隅丸方形プランを呈すると思われる。東壁北端に切石を基部としたカマドをもち、東南隅に貯蔵穴と考えられる直径60cmのピットが発見された。柱穴は検出できなかった。

第2号住居跡 東西3.8m、南北3.6mの隅丸方形プランを呈し、南端を新しい溝で切られている。北東隅に新旧関係の不明なカマドを2つもつ。貼床はなく、柱穴もみつからなかった。

第3号住居跡 東西5.7m、南北4.7mの長方形プランを呈する。カマドは東壁北隅にあり、北壁はこの部分で若干外側に張り出す。カマドには長さ90cmの煙道と煙出しのピットがつく。

第4号住居跡 東西6.9m、南北5.1mの長方形プランを呈する。しかし、貼床の範囲などから拡張が考えられ、本来は5.3m×4.1mのプランであったと思われる。北壁東よりに長さ約70cmの煙道をもつカマドがつくられ、カマド内には円柱形の土製支脚が残っている。

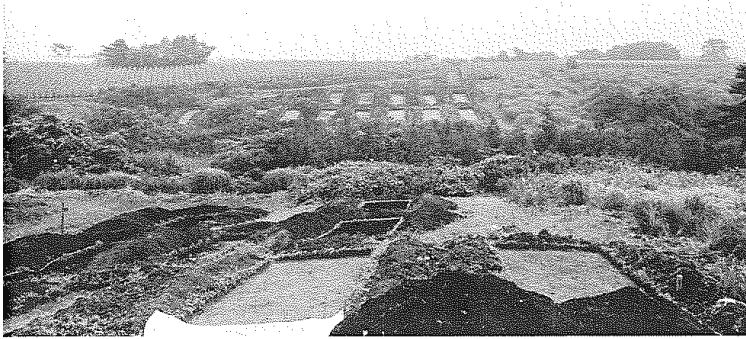
第5号住居跡 東西3.4m、南北3mの隅丸方形プランを呈する小規模な住居跡で、貼床がある。カマドは東壁北隅に壁を約40cm掘り込んでつくられている。煙道の長さは65cmで天井部が崩落せず残っていた。煙出しピットには煙突状に土師甕が埋め込まれている。

合口甕棺 住居跡群から若干離れた北斜面から検出された。長径90cm、短径45cmの長楕円形の土塚の中に、2個の土師甕の口を合わせ、その一方の甕の底にさらに2個の甕をつぎ足した合計4個からなる合口甕棺を横位に埋設したものである。かたわらには回転糸切り底で内面黒色処理された土師器坏が1個そえられていた。遺構の主軸方向はN-1°-Eである。

3. まとめ

手取遺跡では平安時代の竪穴住居跡5軒と合口甕棺1基が発見された。この集落は路線敷の東と西側に丘陵づたいにひろがっているものと考えられる。平安時代の合口甕棺の類例は東北では少なく、岩手県で3例、秋田県で1例を数えるのみである。^(註1) 県内では初めてで、平安時代の庶民の墓を考える上で重要な資料である。

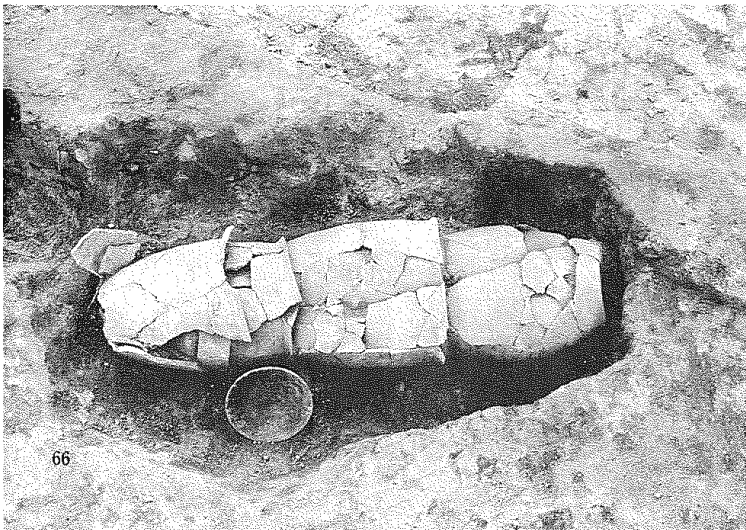
(註1) 斎藤尚己、沼山源喜治「東北地方の合口甕棺遺構について」北奥古代文化第6号。



遺跡遠景（南側から）



第5号住居跡



合口甕棺の出土状況

(6) ^{はら} ^だ 原 田 遺 跡

遺跡所在地：栗原郡築館町萩沢字新田前

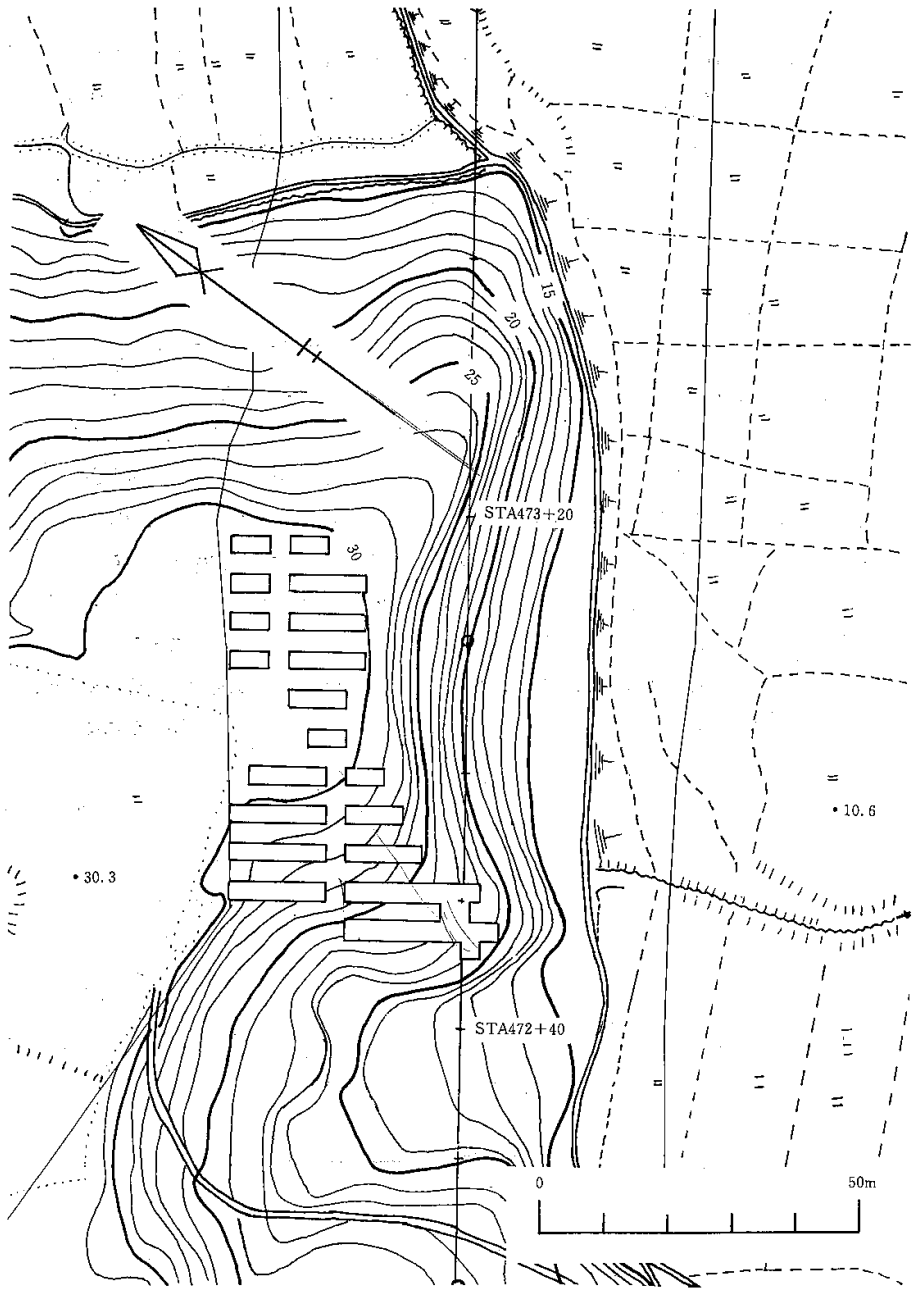
調査期間：昭和49年9月17日～9月26日

調査面積：2,200m²

発掘面積：657m²

遺跡記号：BG

協力・参加者：金野 正（宮城県築館女子高等学校教諭）
築館町教育委員会



遺跡地形図

1. 遺跡の立地

原田遺跡は、築館町役場の南東1.8kmに位置し、県道築館・瀬峯線の東側にある。築館町の中央部には一迫町柳ノ目付近から志波姫町横峯にかけて広い平坦面をもつ丘陵が東西に延びており、この丘陵の縁辺には縄文時代から中世までの多くの遺跡が存在する。本遺跡もこの丘陵の南縁平坦面から南斜面に立地している。遺跡のすぐ南側は萩沢川が形成した狭い沖積地になっている。遺跡付近の標高は約23m～30mであり、丘陵平坦面と沢あいの水田面との比高は約20mある。

2. 調査の概要

東北自動車道は、遺跡が立地する丘陵の南端を通るため、路線敷となる丘陵平坦面および南斜面の畑地に調査区を設定し、657m²を発掘した。調査の結果、丘陵平坦面や斜面上部の調査区では開墾や耕作などのため地形が著しく変えられ、表土（耕作土）下がすぐ地山になっており、遺構、遺物ともにほとんど発見されなかった。斜面下部の調査区では、表土下に有機質の黒褐色土が斜面にそって堆積している。遺物は、表土および黒褐色土層中から、縄文中期（大木7式、8式）の土器片、剥片、奈良・平安時代の土師器・須恵器片などが少量出土した。またこの地区では東から西に向ってはしる幅約60cm・深さ約20cmの溝が検出され、埋土中から奈良時代の土師器（甕）の破片が数点出土したが、正確な所属時期については不明である。

これらの調査結果および周囲の地形・遺物の散布状況などから、本遺跡は付近の丘陵平坦面一帯に広がっているものと思われ、その主体は路線敷から外れていることが明らかになった。



遺跡遠景（南側から）



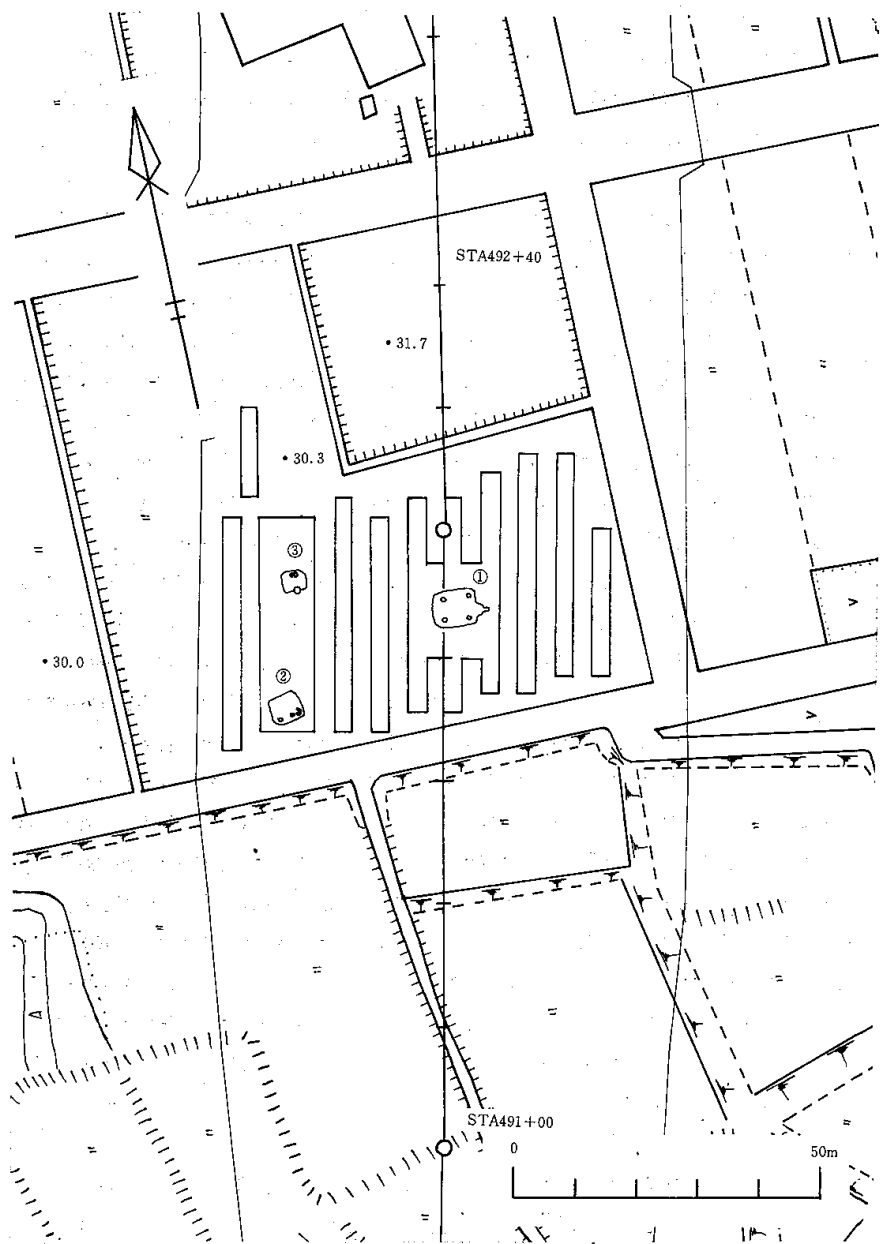
溝検出状況（東側から）



同上発掘後の状況

(7) 山^{やま}の上^{うえ}遺跡

遺跡所在地：栗原郡志波姫町堀口字西風前
調査期間：昭和49年10月7日～11月8日
調査面積：4,140m²
発掘面積：1,341m²
遺跡記号：B I
協力・参加者：佐藤信行（栗原郷土研究会会員）
志波姫町教育委員会



遺跡地形圖

1. 遺跡の立地

山の上遺跡は、築館町の中心部より北東約2km、志波姫町と築館町の境界付近にあり、一迫川が形成した砂礫を基盤とした段丘上に立地している。遺跡の南縁は熊谷川によって開析され急崖をなしている。標高は約30mで現状は水田となっている。

2. 調査の概要

調査は、道路敷内の約4,000m²を対象に行い1,350m²を発掘した。調査の結果、奈良時代末期の竪穴住居跡3軒が発見された。〈1号住居跡〉東西6.6m、南北6.4mでやや長方形のプランをもつ。現存する壁高は南壁が最も高く約20cmほどである。床面全体に多量の木炭片や少量の焼土が散布堆積している。特に、南壁・西壁沿いには、焼土に混って炭化財が多く検出され、壁・床面ともかなり硬く焼けている。柱穴は住居の対角線上に4個検出された。西壁中央部を除き幅の狭い周溝がめぐっている。白色粘土で構築されたカマドが東壁中央部に壁を挟り込んで造られている。焚口幅50cm、奥行までの長さ120cmで、幅20cm、長さ120cmの煙道をもつものである。本体内部から土師器甕1個体分と、煙道方向に斜めに傾いて立っていた土製支脚が出土している。壁、床面の状態等から、本住居跡は火災によって焼失したものである。〈2号住居跡〉東西5.3m、南北4.7mの長方形のプランをもつ。縦横に走る後世の2本の溝によって一部こわされているが、比較的保存は良く、現存する壁高は全体的に25cmほどである。床面は北壁寄りを除いて、厚さ10cmほどの貼床が施され、非常に軟弱なため検出は困難であった。周溝は検出されなかった。支柱穴と考えられるピットは2個検出されたのみで、全体としての支柱穴の配置は不明である。さらに、壁沿いをめぐって径、深さとも10cmほどの壁柱穴と考えられるピットが23個検出された。南東隅にはU字状に粘土で構築されたカマド状の遺構が検出された。この遺構は、火を受けた痕跡や焼土等は全く認められず、カマドとして使用されたものかどうかは不明である。

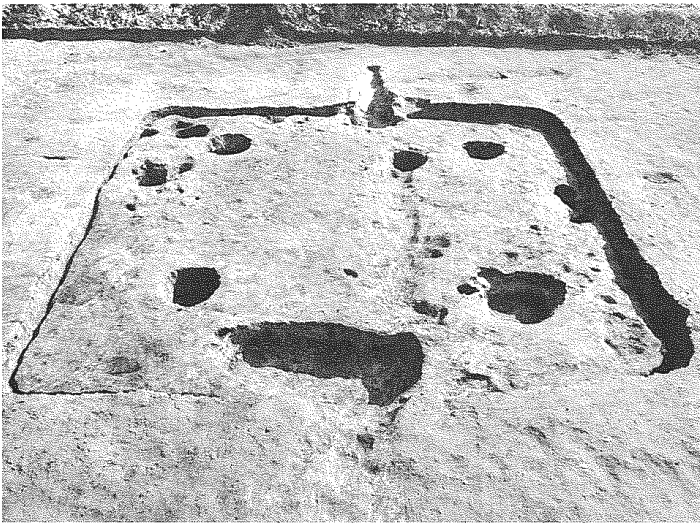
〈3号住居跡〉南北3m・東西2.8mの方形プランをもつ。現存する壁高は最も高い北壁で20cmほどである。床面は全面にわたって厚さ10cmほどの貼床が施され、軟弱なものである。周溝および柱穴は検出されていない。粘土で構築されたコの字型のカマドが北壁中央部に接して付設されている。焚口幅50cm、奥行までの長さは40cmほどである。煙道は検出されていない。カマドの右側に貯蔵穴状のピットがあり、その上部に須恵器他大甕数個体分の破片が廃棄されていた。また、南壁中央部に床面より10cmほど高く、出入口の施設とも考えられる東西70cm、南北60cmの張り出し部が構築されている。

3. まとめ

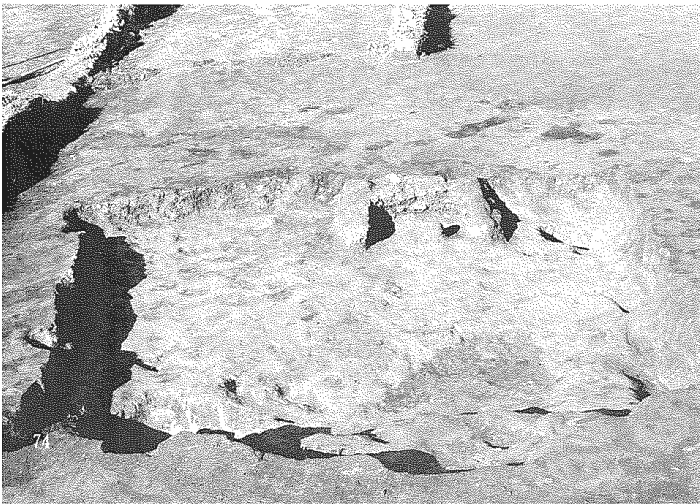
本遺跡は奈良時代末期の集落跡であり、今回の調査によって、規模および内部施設においてそれぞれに異なる特色をもつ3軒の住居跡が発見された。住居の構造を考える上に好資料を提供してくれるものである。



遺跡遠景（南側から）



第1号住居跡（西側から）



第3号住居跡（南側から）

(8) ^{つる}鶴 ^{まる}の ^{だて}丸館跡

遺跡所在地：栗原郡志波姫町八樟字谷地

調査期間：昭和49年9月11日～11月29日（第1次調査）

調査面積：6,000m²

発掘面積：660m²

遺跡記号：BK

協力機関：志波姫町教育委員会



館跡地形全体図

1. 遺跡の立地

鶴の丸館跡は、志波姫町中心部より西方約1.7kmに位置し、県道築館・若柳線八樟停留所より北0.4kmに在る。迫川の形成した沖積地の中に築館から若柳にかけて標高20m前後の砂礫段丘が東に延びている。この砂礫段丘が北側の沖積地に張りだした部分に立地し、館中央部と現水田面との比高は約5mである。

2. 遺跡の現況

本館跡は、北西～南東約90m、北東～南西約70mの上段平場とこれより約2mほど低い緩斜面をなす下段平場とからなる。館跡全域は家屋・通路・畑地となり、南側では上段平場と下段平場の差が判然としない。上段平場北西縁に長さ約30m、高さ0.5～1.2mの土塁が残っているが以前は上段平場縁辺にまわっていたと考えられる。上段平場中央北寄りの地点から南東に長さ約45m、深さ約1mの溝状の掘り込みがあるが館跡に伴う遺構か否か不明である。下段平場と現水田面との境は削平をうけ不規則な形を呈する。館には堀がめぐっていたと伝えられているが、その痕跡と思われる低湿地が南側を除いて残っている。

3. 調査の概要

東北自動車道は、館跡のほぼ中心部を南北に縦断するので、道路敷にかかる約6,000m²を対象として調査区を設定し、下段平場北側660m²を発掘した。その結果、一部で整地面、地山面でピット群と下段平場の上段平場との境付近に幅約3m、深さ約1.5mの堀が検出された。いずれも未調査であり、整地面、ピット群、堀の性格について明らかでない。しかも館跡に直接関連すると思われる遺物は殆んど発見されていない。なお、栗原郡誌^(註)によると、「鶴の丸館」跡は、日良館（東方約1kmに所在）を本館とする沼田氏が文治～天正年間まで別館とし、その後元和4年より茂庭氏、元禄16年より西大條氏が居館とした。（要約）」とされている。

4. まとめ

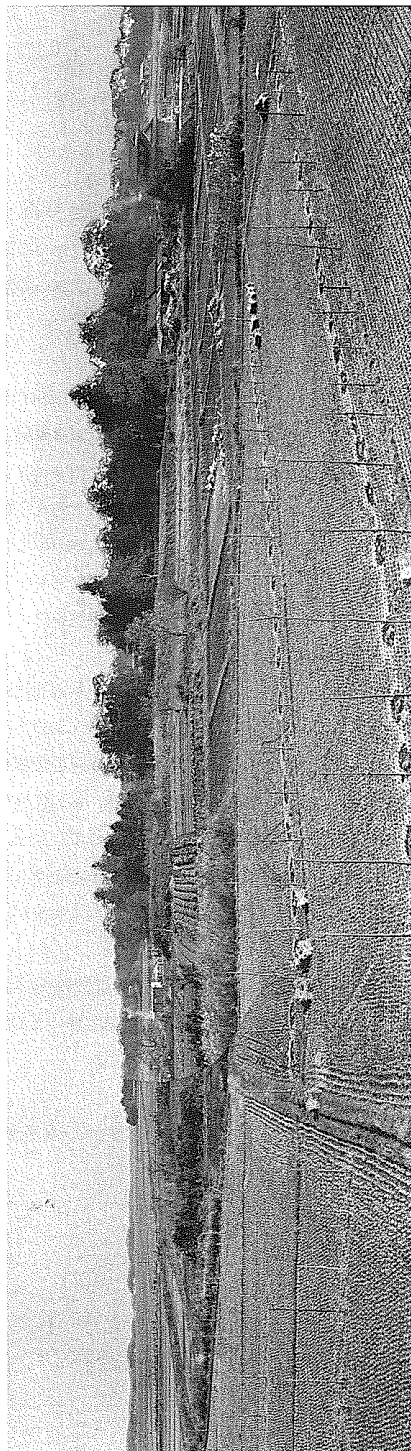
第1次調査は、日程の関係上発掘区が限定され、本館跡の本格的調査は第2次調査にもちこした。第2次調査に当っては、発掘調査による成果とより確かな史料の収集によって、この館の全容を明らかにするよう努めたい。

註 「栗原郡誌・下篇町村誌・志波姫村・名所舊蹟及口碑伝説」郡誌の原典が何に依ったものか不明である。

館跡全景（北側から）



館跡全景（西側から）



(9) ^さの 佐野 遺跡

遺跡記号：栗原郡金成町梨崎字佐野

調査期間：昭和49年7月22日～10月16日

調査面積：2,250m²

発掘面積：1,656m²

遺跡記号：BL

協力・参加者：金野 正（宮城県築館女子高等学校教諭）

後藤利喜郎：（蔵王町立円田小学校教諭）

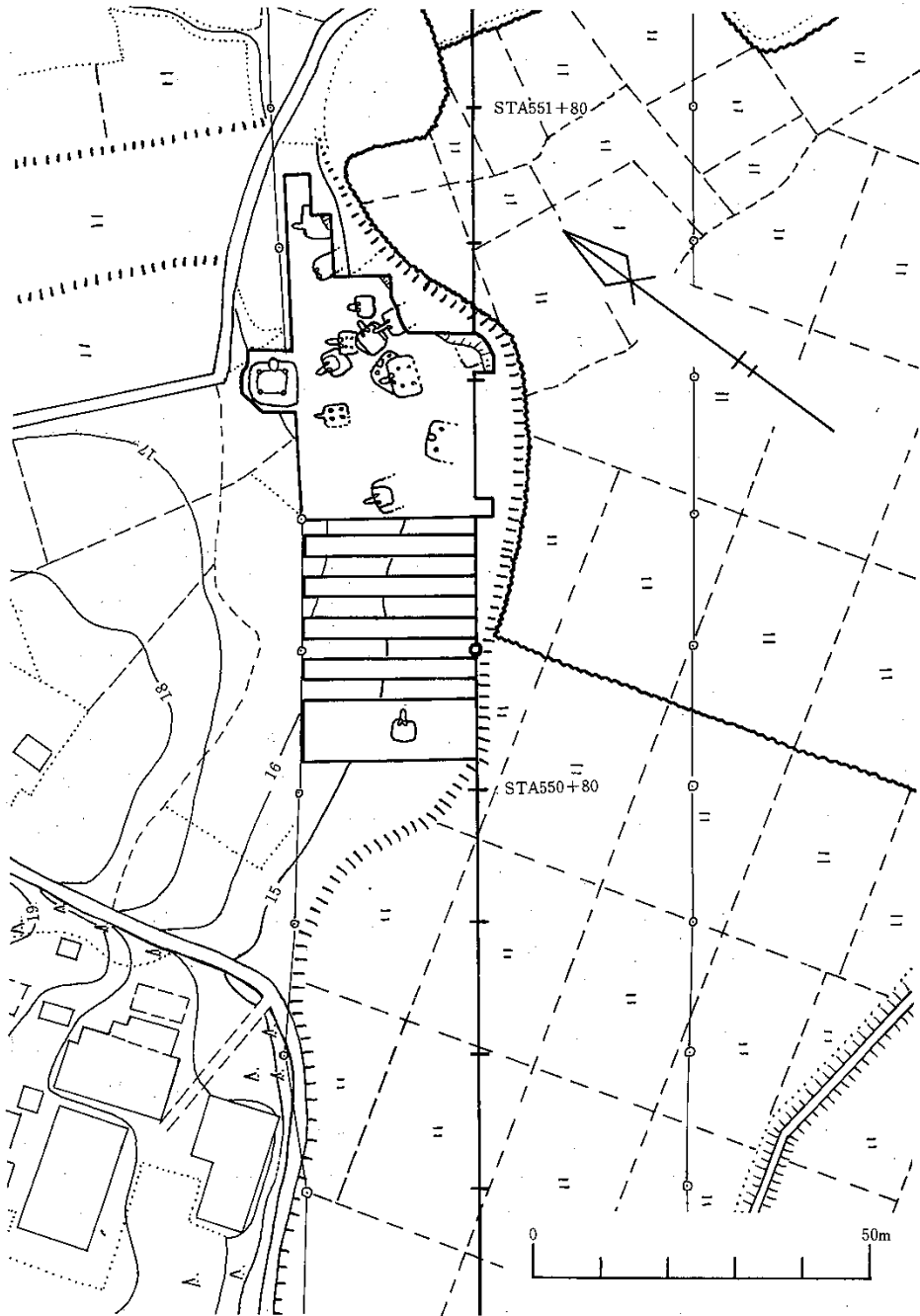
後藤勝彦：（宮城県塩釜女子高等学校教諭）

高橋多吉：（石越町立石越中学校教諭）

佐藤達夫：（宮城町立大倉小学校教諭）

今泉武男：（塩釜市立第3中学校教諭）

金成町教育委員会



1. 遺跡の立地

佐野遺跡は金成町の栗原電鉄沢辺駅から南東約1.4kmの地点に位置する。この付近は栗駒山から連なる丘陵が分岐し、標高約60～70mの三つの丘陵に分かれ東へ延び、それらの山間より発する一、二、三迫川がそれぞれ合流するところに近い。遺跡は二・三迫川に挟まれた丘陵東端微高地東斜面（標高14～16m）の畑地と水田とに立地している。なお、この遺跡の北約0.2kmには東北では発見例の少ない人面墨画土器の出土地、西約2kmには横穴の北限に属する姉齒横穴古墳群、さらに西南約4kmの築館町城生野には古代城柵の一つ伊治城跡などが知られている。

2. 調査の概要

調査地点は微高地東側の緩斜面にあたり、道路敷にかかる東西25m、南北90mの範囲に調査区を設定、約1,650m²を発掘した。発見遺跡は、調査区域中央部から北部にかけての東斜面に集中し、一部破壊されているものもある。また、調査区域の南、北、東端で一部整地層や後世の耕作による再堆積層などもみられるが、多くは耕作上下の凝灰岩泥砂礫（地山）面で確認することができた。

竪穴住居跡 全部で15軒発見され、これらの住居跡には重複するもの、改築されたものなど含まれる。平面プランは一辺が4～5mの隅丸方形に近いものと長軸が約7mの隅丸長方形のものが検出されている。ほとんどの住居跡が粘土で構築されたカマドと煙道とを付設し、その位置は微高地東斜面に対し高い方の壁にとりつけられている。柱穴は4個あるものとまったくないものがある。住居跡に伴う遺物の種類は土製品（土師器、須恵器、土玉）、鉄製品（刀子、鏃）である。遺物の中でも土師器は、住居跡をつくる際に転用されたもの（カマド袖の芯、支脚の代用、カマド内床面に敷いたもの、煙出部に使用）と住居廃絶後廃棄されたものに分けられる。また、製作技法上ロクロ成形と非ロクロ成形のものがある。

井戸跡 住居跡関連隣接施設として井戸跡1基が発見され、直径2.2mの円形で深さ0.8mのところまでスリバチ状にくぼみ、井戸底まで一辺1m方形をなし、全体として深さ2mを計る。また、方形の掘り方には枳板が若干残存し、井戸底より土師器の破片が少々出土している。

焼土遺構 全部で8つ発見され、住居跡の埋土や地山上面で確認されている。長軸1m、短軸0.7mの長方形と長円形との二つのプランがみられ、舟底状の内部は全体が焼け、炭や焼土がつまり土師器の破片も少々出土している。この遺構の年代や性格は不明である。

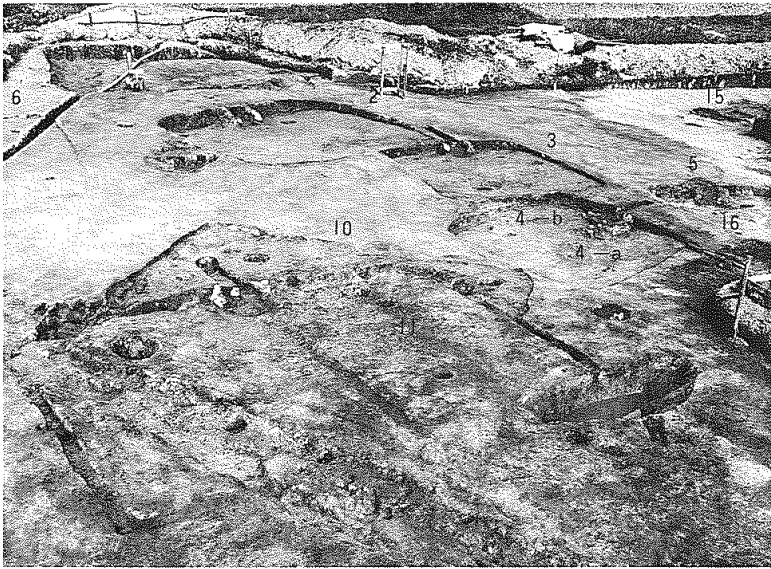
その他 縄文時代の石鏃、弥生時代のアメリカ式石鏃、江戸時代の土壇墓より人骨、寛永通宝など発見されている。

3. まとめ

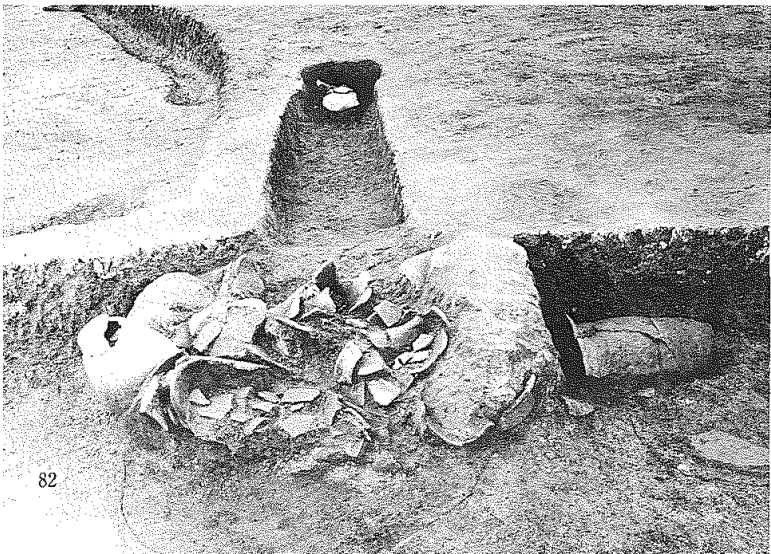
佐野遺跡は奈良時代末から平安時代の集落跡であり、今回発見の住居跡15軒を含み、道路敷西側の微高地上への広がりが考えられる。



遺跡遠景（南側から）



調査区北側地域の住居群
(数字は住居跡番号)



第3号住居跡
カマドの状況

(10) ^{ありがみね}有賀峯（地田）遺跡

遺跡所在地：栗原郡若柳町有賀字峰

調査期間：昭和49年8月5日～9月6日

調査面積：2,000m²

発掘面積：750m²

遺跡記号：BM

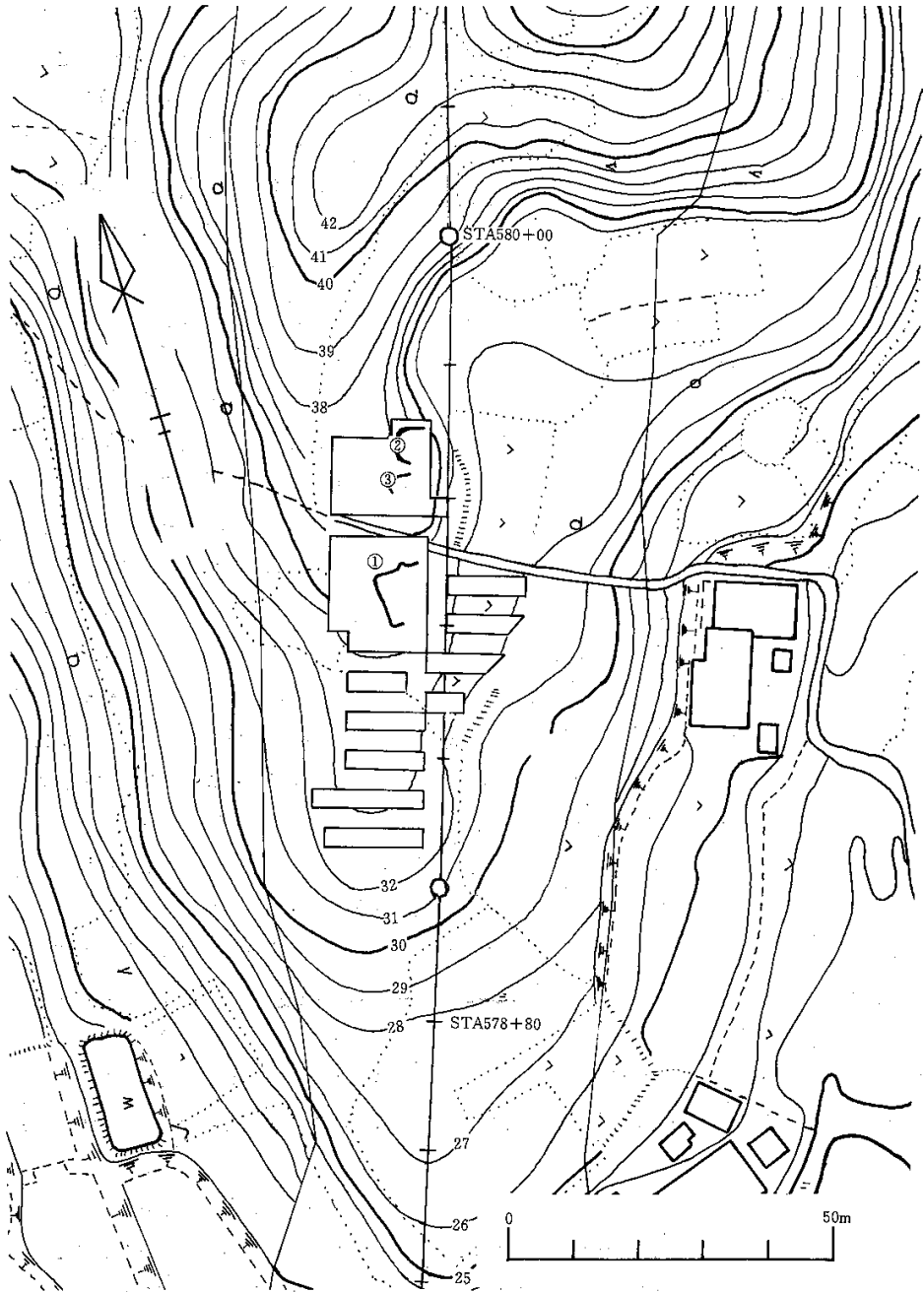
協力・参加者：佐藤正人（東北学院大学学生）

門間俊彦（ ” ” ）

柳瀬和幸（東北大学学生）

若柳町教育委員会

※本遺跡は当初「地田遺跡」と呼んでいたが、今回『有賀峯遺跡』と改めた。



遺跡地形図

1. 遺跡の立地

有賀峯遺跡は、若柳町の北西部、金成町との町界付近に位置し、県道栗駒・油島線の宮城交通三田通停留所から500mほど北へ入った小丘陵上に立地している。この小丘陵は若柳町の北部に広がる新山丘陵群から南へはり出しており、丘陵の南側は夏川および三迫川流域に発達した沖積平野に接し、西側は地田川によって開析された沢がはしっている。この丘陵上は丘頂面が狭く、現在一部が畑地、他の大部分が山林および原野となっている。遺跡付近の標高は約35mで周囲の水田面との比高は約20mある。

2. 調査の概要

東北自動車道は遺跡が立地する丘陵を尾根づたいに縦断して通るため、尾根上の平坦面および東斜面に調査区を設定し、750m²発掘した。その結果、東斜面で地山面に掘り込まれた土師器・須恵器を伴う竪穴住居跡が3軒検出された。いずれも表土が浅く、斜面に構築されているため耕作などで東壁や南壁はかなり削平されている。各住居跡ともに床面やカマドから出土した土師器・須恵器などにより、奈良時代末期から平安時代初期頃のものと思われる。

第1号住居跡 西壁および北壁・南壁の一部が検出された。西壁の長さは7.7mあり、比較的規模の大きな方形プランをもつ住居跡である。現存する壁高は最高部（北西隅）で37cmある。床面はやや硬くしまり、うすい炭化物の層が一面に堆積していた。床面でピットが16個検出されたが、これらがどのような組合せで柱を構成するものかはまだ検討していない。壁沿いに幅約25cm、深さ約10cmの周溝がめぐっている。北壁に粘土で構築され、煙道をもつカマドが付設されている。両袖部には土師器甕を補強に埋込んでいる。床面は非常に硬く焼けている。煙道は幅55cm、長さ1.9mで、先端部に径40cm、深さ15cmのピットをもつ。遺物はカマド内から土師器坏が5個伏せた状態で発見されたほか、床面や煙道先端部のピットなどからも土師器や須恵器が出土した。また住居の堆積土中からは須恵器蓋や鉄鏟なども出土している。

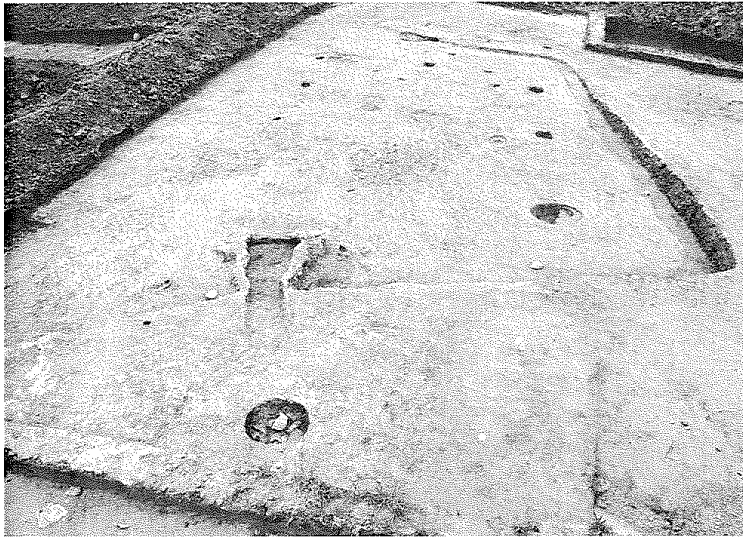
第2号住居跡 西壁と南壁・北壁の一部が検出された。隅丸方形プランをもつ住居跡で、西壁の長さは5mある。現存する壁高は最高部（北西隅）で30cmである。床面は非常に硬く、一面に炭化物が散布している。床面で計8個のピットが検出された。このうち支柱穴と思われるものが3個ある。壁沿いに幅約20cm、深さ約12cmの周溝がめぐっている。北壁付近にカマドおよび煙道の残痕とみられる焼土面が認められた。遺物は床面やカマド付近から土師器や須恵器が出土したが、いずれも小破片で量も少ない。

第3号住居跡 北西隅の一部が検出されただけであり、不明な点が多い。方形プランをもつと思われる、現存する壁高は20cmある。床面はやや硬く、炭化材が散布していた。壁沿いを幅約15cm、深さ約10cmの周溝がめぐる。遺物は床面や周溝から少量出土しただけである。

これらの遺構の他に、近世以降のものと考えられる土塚や暗渠施設なども検出されている。



遺跡遠景（南西側から）

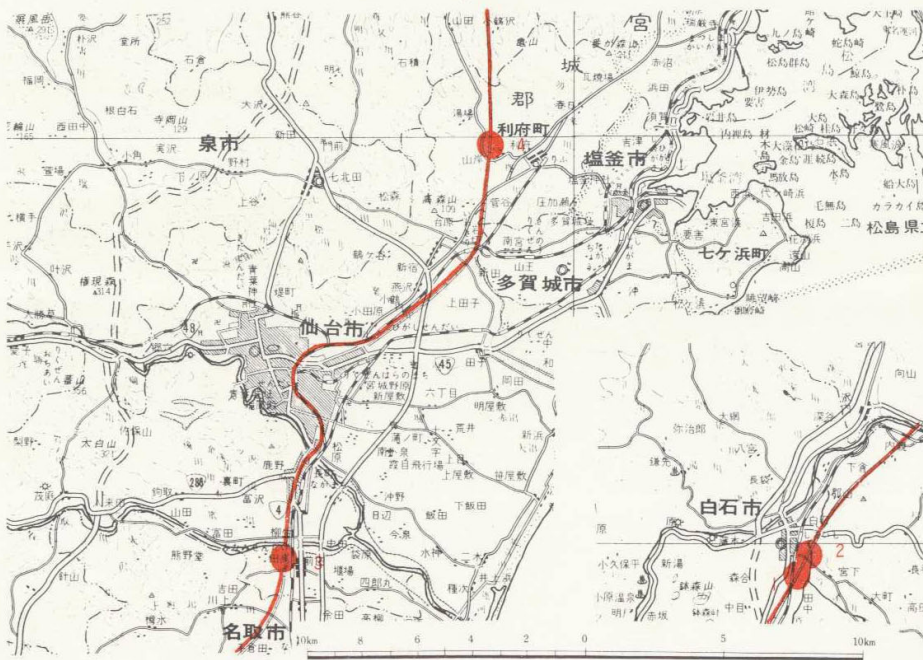
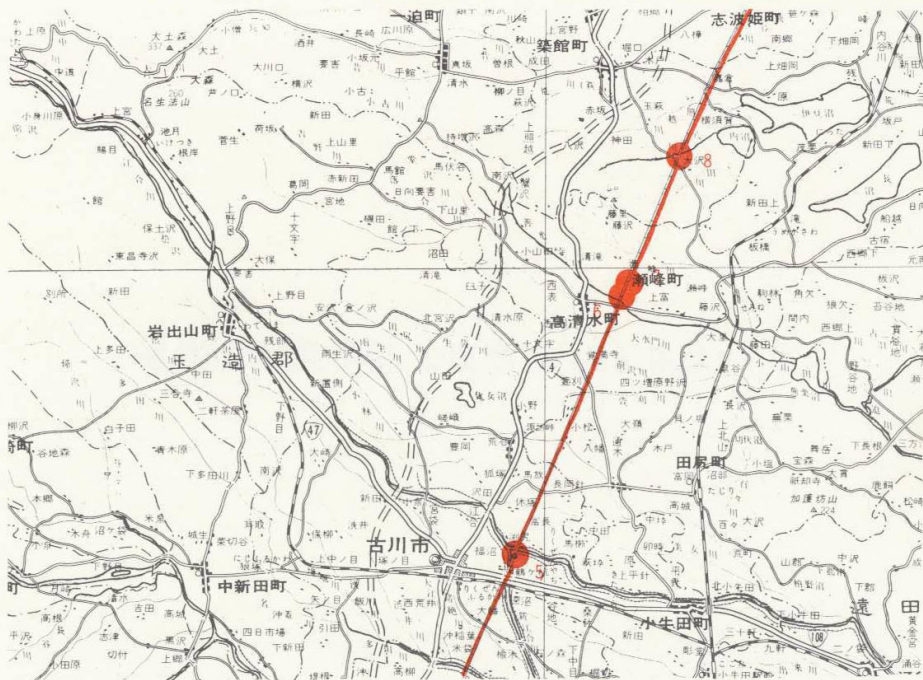


第1号住居跡（北側から）



第2号住居跡（北側から）

Ⅲ. 昭和 49 年度東北新幹線関係遺跡



昭和49年度東北新幹線関係遺跡位置図 (○印は調査遺跡)

調 査 遺 跡

調査主体者 宮 城 県 教 育 委 員 会

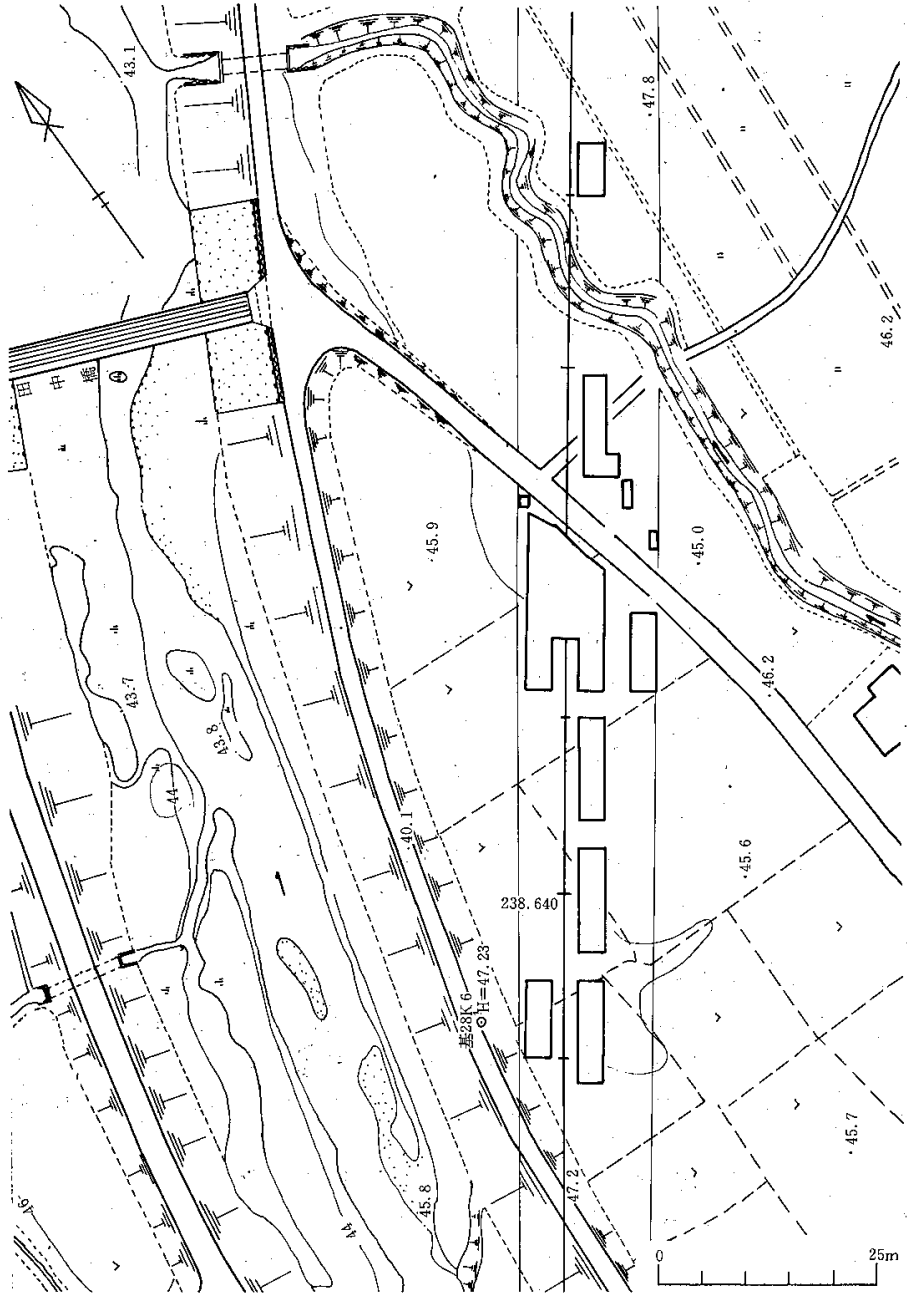
日本国有鉄道仙台新幹線工事局

調査担当者 宮 城 県 教 育 庁 文 化 財 保 護 課

遺 跡 番 号	遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	収 録 ページ
1	白 笹	白石市大鷹沢三沢字田中	昭和49年5月20日 ～ 6月18日	91
2	谷 津 川	白石市大鷹沢三沢字川崎	昭和49年5月20日 ～ 6月18日	95
3	清 水 (第1次調査)	名取市田高字清水	昭和49年11月28日 ～50年3月30日	99
4	八 幡 崎 B	宮城郡利府町利府字八幡崎	昭和49年4月15日 ～ 5月10日 昭和49年8月28日 ～ 9月10日	103
5	留 沼 (第1次調査)	古川市大柿字留沼46	昭和49年7月20日 ～ 7月27日	107
6	下 折 木	栗原郡高清水町陰ノ沢	昭和49年11月4日 ～ 11月20日	111
7	新 庄 館	栗原郡高清水町陰ノ沢	昭和49年11月4日 ～ 11月20日	115
8	八 沢 要 害 (第1次調査)	栗原郡築館町八沢字要害	昭和49年10月1日 ～ 12月20日	121

(1) 田^た中^{なか}遺跡

遺跡所在地：白石市大鷹沢三沢字田中
調査期間：昭和49年5月20日～6月18日
調査面積：1,720m²
発掘面積：370m²
遺跡記号：B〇
協力機関：白石市教育委員会



遺跡地形図・グリッド配置図

1. 遺跡の立地

田中遺跡は、国鉄東北本線白石駅より南方約1.5kmの白石市大鷹沢三沢字田中に所在しており、白石盆地のほぼ中央部を北流し、白石川と合流する斎川が形成した氾濫原の旧自然堤防状微高地に立地している。斎川流域には、本遺跡から北方約1.8kmに北無双作遺跡、斎川と谷津川の合流地点周辺には、今回併行して調査を実施した谷津川遺跡が位置しており、また約2kmの鷹ノ巣丘陵一帯には、鷹ノ巣古墳群が知られている。

2. 調査の概要

本遺跡は、以前に試掘調査が実施され、その際、地表下1.5mまで掘り下げ、若干の土師器、須恵器の出土をみたが、遺構は検出されなかった。しかし、さらに深い所に遺構・遺物の存在が予想されるため調査が実施された。調査は、遺跡にかかる路線内南北108m、東西16mの範囲を対象とし約370m²の発掘調査を行なった。基本的層序は、第1層暗褐色粘土質シルト層（表土）第2層黒褐色粘土質シルト層、第3層暗色砂質粘土層、第4層暗オリーブ色粘土層、第5層青灰色粘土層、第6層黄褐色砂礫層（地山）となり、地表から第6層上面までの深さは、約2.7m～2.8mに及ぶ、第5層以下は湧水が激しい。第1層～5層にかけて遺物の出土はあったが、その中でも、第2層、3層からの出土が多い。発見された遺構としては、調査区域のほぼ中央部から粘土を積み上げた土盛が検出された。この土盛は、現存高約1.7mで第4層上面にのっている。

その内部の層は、粘土層（9層に細別）がほぼ水平に堆積しており、土盛内部、周辺には遺構等もなく、そのうえ全体の広がりも把握できず、性格は明らかではない。

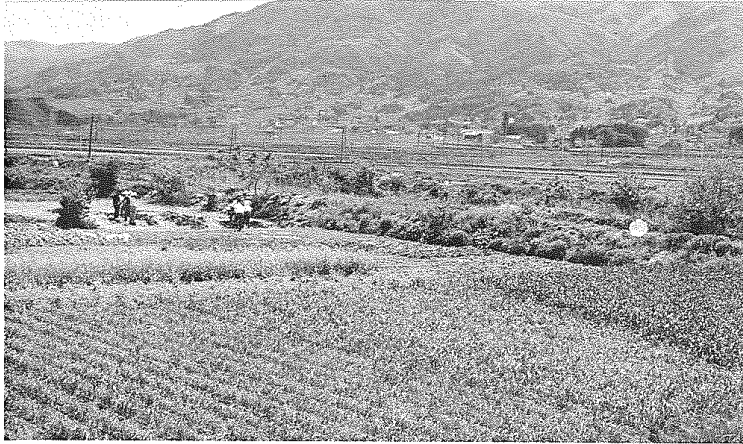
出土遺物は少なく、土師器、須恵器、中世陶器等で、土師器には、壺、甕、甑、坏、高坏等が出土し、須恵器は甕の破片が大半である。中世陶器は、大甕の破片である。その他、弥生式土器片2点が出土している。なお、調査区域南側地表下約2m（暗青灰色粘土層）から人骨頭上半が、それに伴う施設、遺物もなく単独で出土した。

3. まとめ

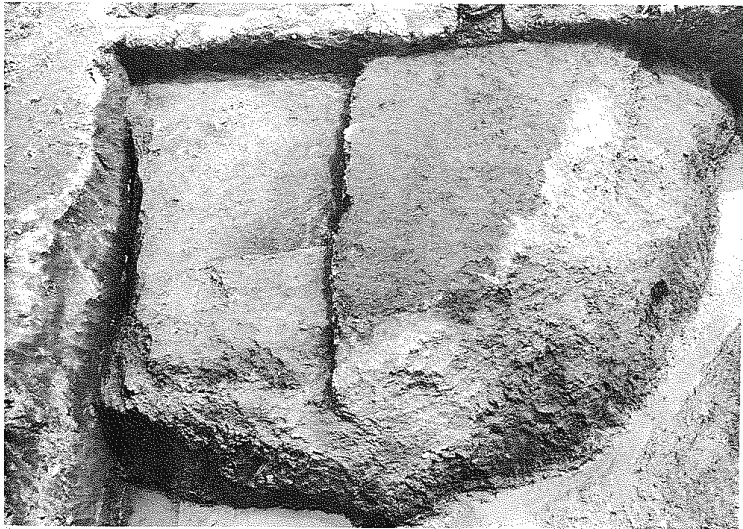
田中遺跡は、出土遺物により、弥生時代～中世中頃まで営まれた遺跡であると思われ、付近にも遺構が存在する可能性はあるとみられる。なお、遺構としては、粘土を積み上げた土盛のみであり、人為的に構築されたと思われるけれども、その性格については不明である。

参考文献： 県教委「東北新幹線関係遺跡分布調査報告書」宮城県文化財調査報告書 第27集—昭和47年—

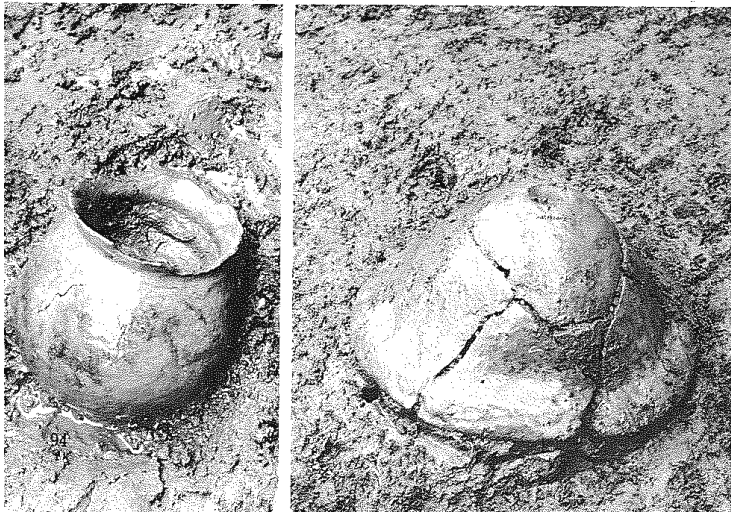
宮城県白石高等学校「斎川流域および北無双作遺跡出土遺物について」白石高等学校研究部誌第15号—昭和47年—



遺跡遠景



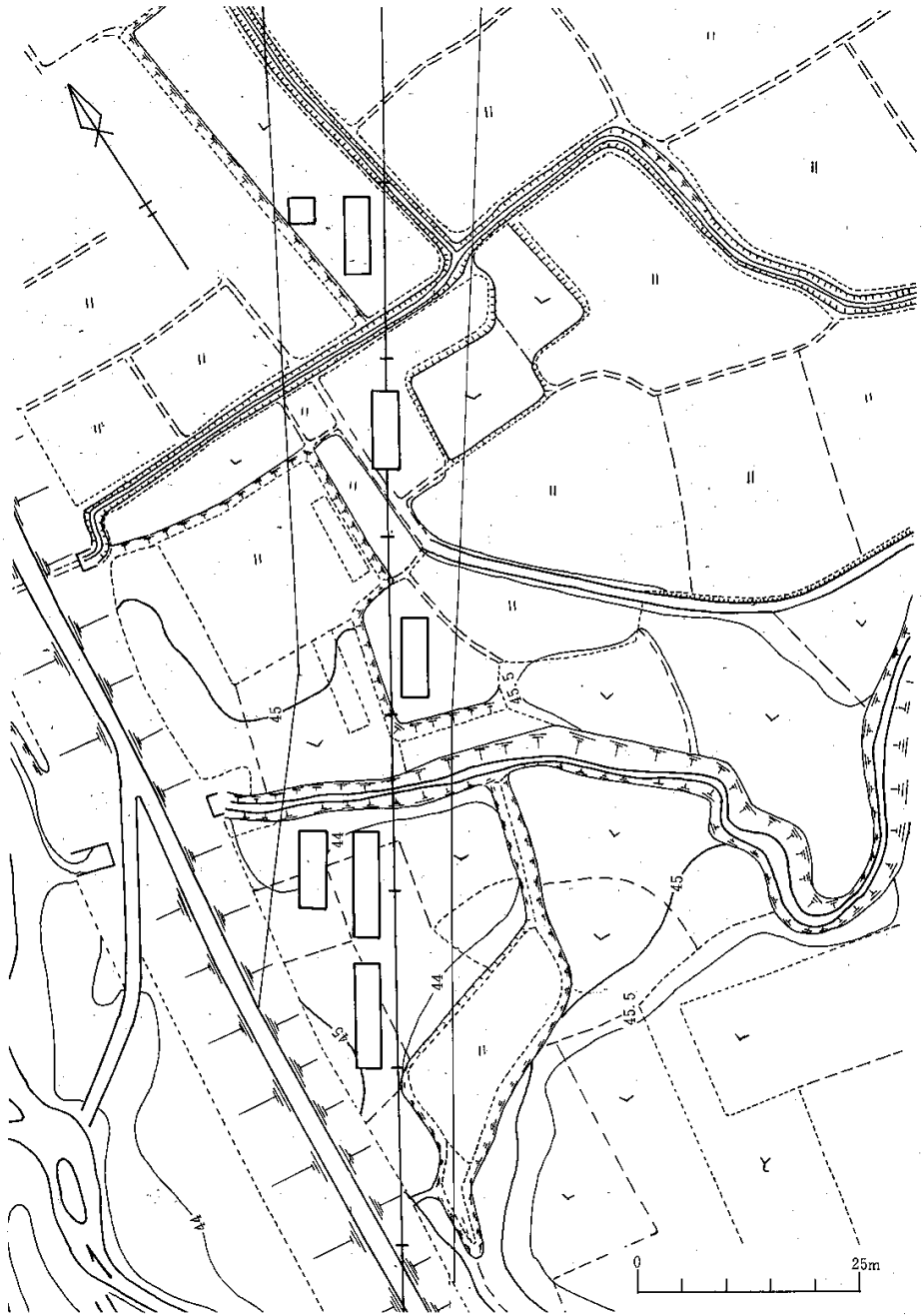
土盛狀遺構



遺物出土狀況
(左：土師器甕、右：甗)

(2) 谷津川遺跡

遺跡所在地：白石市大鷹沢三沢字川崎
調査期間：昭和49年5月20日～6月18日
調査面積：2,320m²
発掘面積：252m²
遺跡記号：BP
協力機関：白石市教育委員会



遺跡地形図・グリッド配置図

1. 遺跡の立地

谷津川遺跡は、東北本線白石駅より南方約1.5kmの地点に位置する。白石盆地のほぼ中央を北流する斎川に、東方山塊に源を発する谷津川が合流するが、遺跡はこの合流点付近にあり谷津川によって形成された自然堤防上に立地する。標高は40m程である。

2. 調査の概要

斎川の改修工事の際、土器等の出土をみた事が知られていた。昭和47年の試掘調査では、遺物等の出土はなかったが、試掘調査区以外に遺跡の存在を想定し、今回の調査を実施した。調査の対象面積は約2,300m²程であるが、大半が水田として利用されているため、畑地を中心に調査を進めた。谷津川をはさんで南側と北側にグリットを設定し、計252m²の調査を行なった。基本層序は、1層（表土）が暗灰黄色砂質土層、第2層暗褐色砂質土層、第3層黒褐色粘土質シルト層、第4層が褐色シルト層である。遺物は第3層から弥生式土器、土師器、中世陶器などが少量出土するだけだが、その殆んどは磨滅しているものであった。第4層では遺物は出土せず、湧水が激しかった。遺構としては、調査区南側から、壁面が焼けて赤化した土壇1基が発見された。中から古銭、骨片、木炭などが出土しているが、その性格は明らかでない。

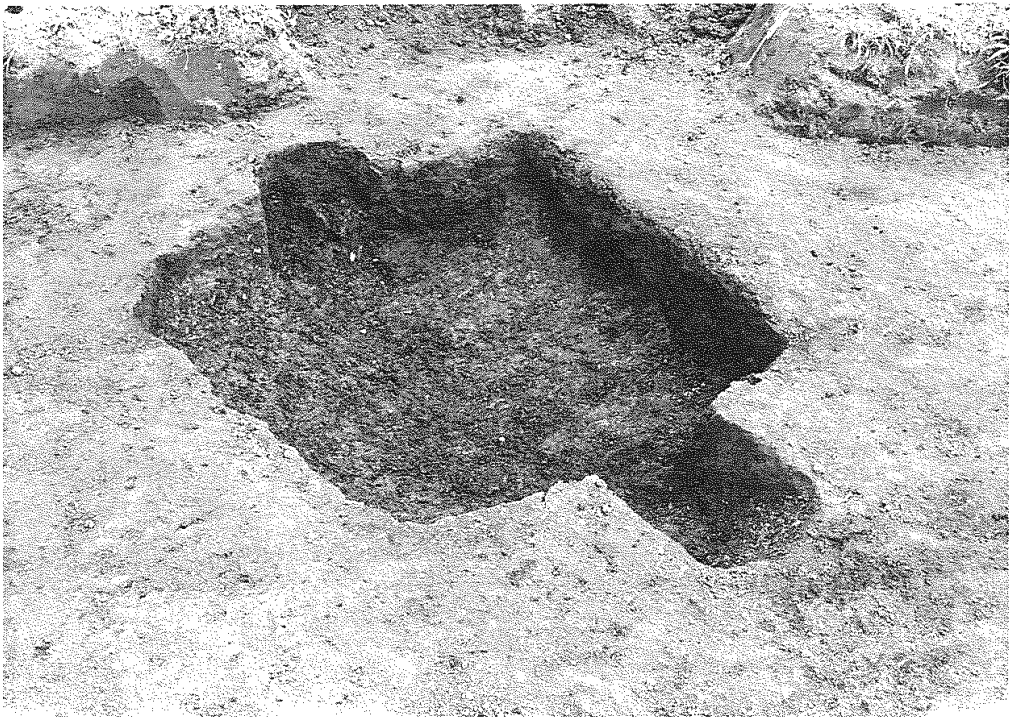
3. まとめ

今回の調査によって、弥生式土器、土師器、中世陶器等の細片がわずかに出土したが、周囲に住居跡が存在するものなのか、それとも上流より流れてきたものなのかは明らかではない。土壇は類例の増加をまって、その性格を究明していきたい。

参考文献：宮城県白石高等学校「斎川流域および北無双作遺跡出土遺物について」白石高等学校

研究部誌第15号—昭和47年—

県教委「東北新幹線関係遺跡、分布調査報告書」宮城県文化財調査報告書—昭和47年—



上：遺跡遠景
下：焼土遺構

(3) ^し清 ^{みず}水 遺 跡
(第1次調査)

遺跡所在地：名取市田高字清水

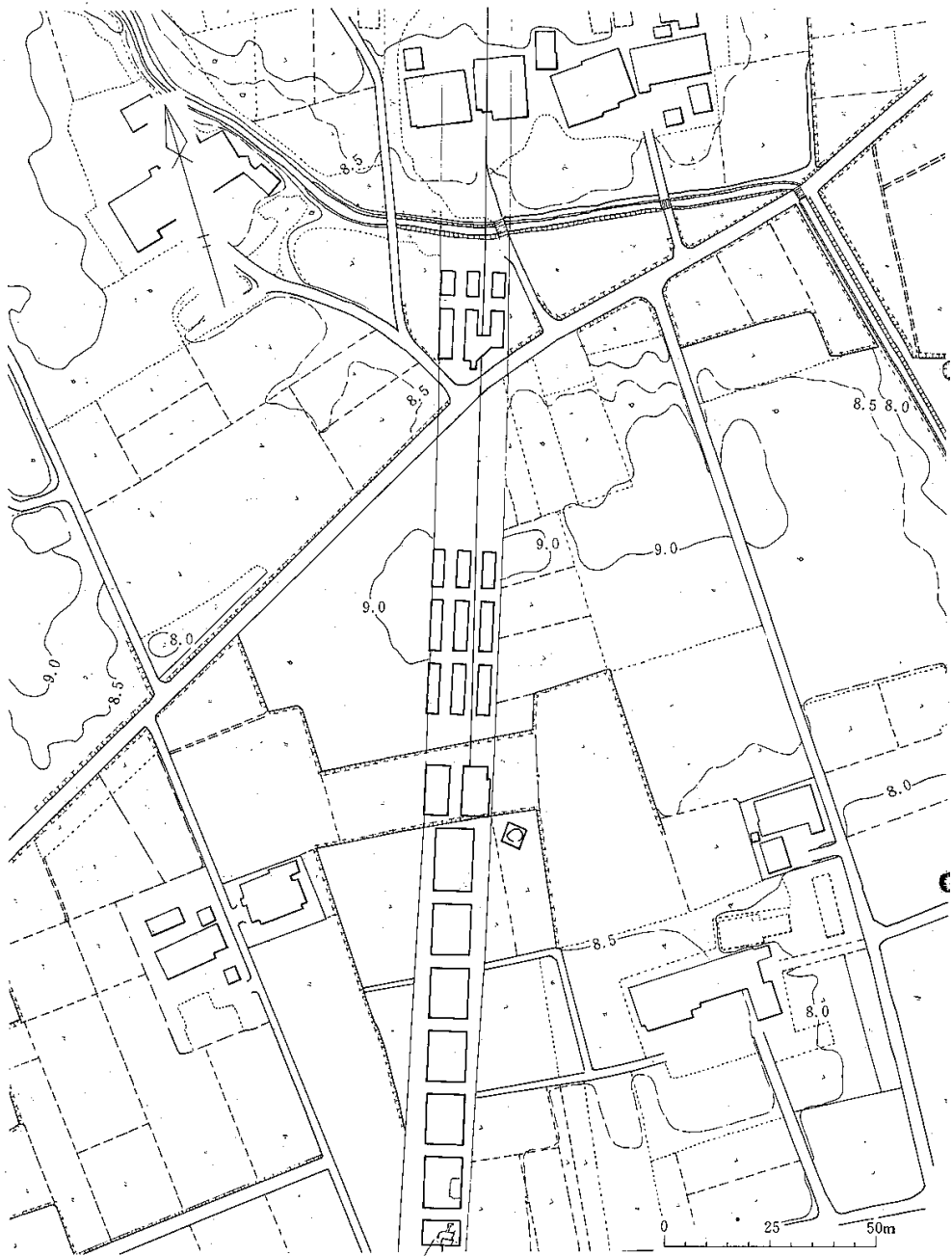
調査期間：昭和49年1月28日～50年3月30日

調査面積：2,300m² (6,200m²の予定)

発掘面積：1,368m² (4,000m²の予定)

遺跡記号：BU

協力機関：名取市教育委員会



遺跡地形図・グリッド配置図（昭和49年12月現在）

1. 遺跡の立地

清水遺跡は、名取市の中心部から北北西約1.5km、仙台市との境にあり、名取川が形成する沖積平野の微高地上に立地している。遺跡付近は、標高10m程で、現在、畑地や水田として利用されている。本市田高付近一帯は、広範にわたり土師器の散布する地域である。

2. 調査の概要

路線敷は東西15m、南北600mに及んでおり、今回の調査は、調査区中央の水田を境にして北側区域、1.5m×250mを対象に行なわれた。発掘面積は約1,400m²である。本調査区は幅約18mの水田によって南北に2分される。南側部畑地は、表土下約60cmで地山面に達し、基本層序は、第1層暗褐色土層（表土）、第2層明黄褐色土層、第3層暗褐色土層、第4層黄褐色土層（地山）である。第3層からは多数の土師器片が出土したが、それに伴う遺構はみられなかった。第4層上面において幅1～3mの溝9本、一辺約4mの住居跡と思われる遺構4軒、および土壇らしき遺構1基が認められた。

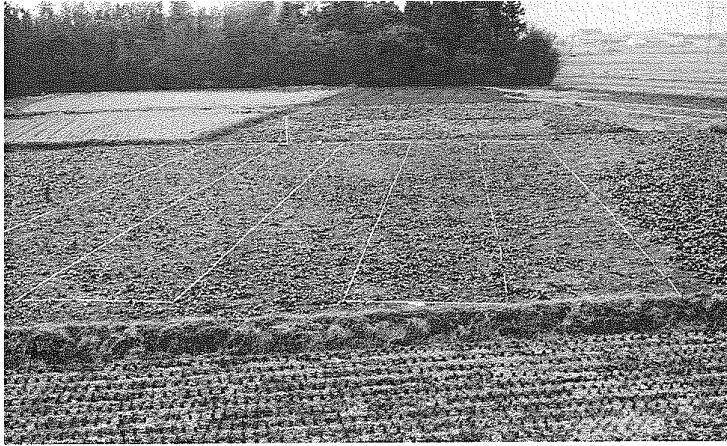
水田部は表土下約20cmで地山に達する。地山面で一辺約6mの住居跡らしい遺構1軒が確認された。

調査区北側部における基本層序は、南側部とほぼ同じである。第3層上面から多数の土師器が出土している。しかし、いまのところ遺構は検出されていない。なお、北区北端では、柱根と積石で土手を築いた近世の堀の遺構が検出された。

3. まとめ

- (1) . 調査区南・北側部の第3層からは奈良～平安時代の遺物が出土している。
- (2) . 奈良～平安時代のものと思われる住居跡5軒、土壇1基、溝状遺構9本、近世の堀遺構が検出された。

これらの遺構の精査、および未調査区の発掘は次回の調査にもちこした。



遺跡近景



発掘状況



近世掘遺構（上手）

(4) 八幡崎 B 遺跡

遺跡所在地：宮城県利府町利府字八幡崎

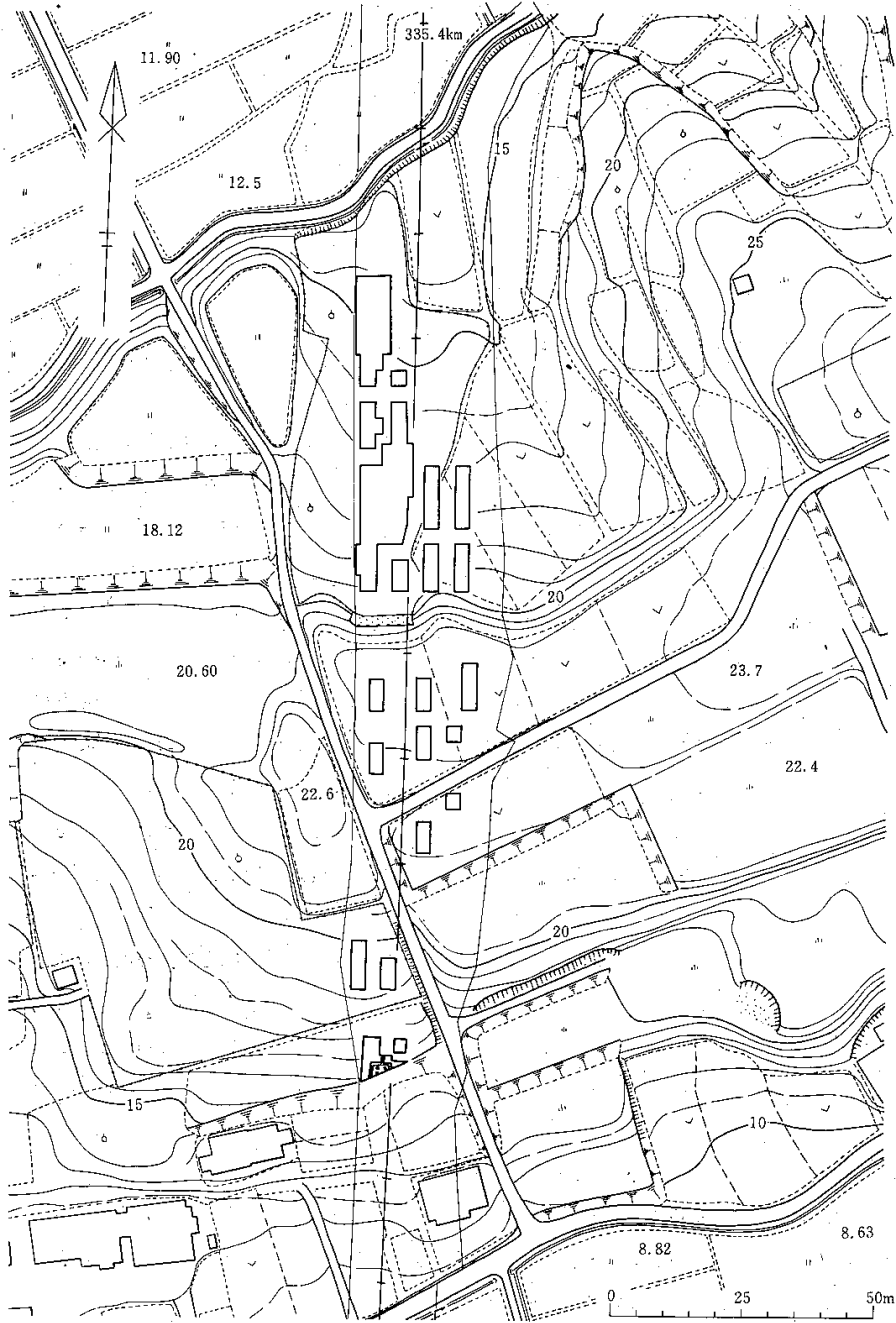
調査期間：昭和49年4月15日～5月10日（第1次）
8月28日～9月10日（第2次）

調査面積：4,800m²

発掘面積：699m²

遺跡記号：BW

協力機関：利府町教育委員会



遺跡地形図・グリッド配置図

1. 遺跡の立地

八幡崎B遺跡は、国鉄東北線利府駅北西約2kmの所にあり、中世の留守氏の居城、利府城から南西方向に延びる枝状丘陵（第3紀中新統の砂岩・凝灰岩・泥岩の互層をなす凝灰質砂岩性の富谷丘陵の範疇）の岬端部より東0.2kmに位置し、北向いの丘陵南麓には、48年度調査の沢乙遺跡や東隣の熊野堂遺跡等が分布している。

2. 調査の概要

路線敷は丘陵岬端を南北に縦断しており、その丘陵南北両斜面及び丘頂平坦面に東西尾22m×南北220mの調査区域を設け、そのうち699m²につき発掘調査を行なった。なお、調査は2期にわたって行なわれ、第1次調査区は北斜面を中心にし、第2次調査区では、丘頂平坦面ならびに南側斜面一帯を対象とした。その結果、次のような遺構と遺物を検出した。

掘立柱建物跡 調査区北側斜面からは、多数の柱穴群が検出され、2間×2間の建物跡4棟が確認されている。これらは、掘り方の大小により、2つのタイプに分類される。前者は、建物跡平面形がほぼ方形をなし、建物の四辺中央柱穴を結ぶ中心部にも柱穴があつて、9本の柱からなっている。特に、四隅の柱穴の掘り方は、一辺が60cmと大規模なもので、柱痕も明瞭であった。後者は、北斜面調査区の一般的な傾向をもつもので、平面形は長方形、または方形状を呈し、前者同様9本の柱をもって構築されている。なお、これらに続く斜面下側からも多数の柱穴群が検出されているものの、何れも組合うものがなく、その規模、性格はつかめない。

住居跡 丘頂平坦面から南斜面中腹部にかけては、すでに土地改造等のため、遺跡はかなり破壊されていたが、調査終末期になって、同斜面下側から住居跡1軒が検出された。この住居跡の南半は、すでに失われており、平面プランはほぼ方形を呈するものと思われるが、その全様は明らかではない。残存する遺構としては、北壁や地下式煙道、周溝、床面上柱穴等が検出された。

遺物 調査区北側斜面からは、少量の縄文土器片・石器・石製模造品と多数を占める須恵器片（ほぼ完形に近い臍点を含む）とロクロ成形で内面黒色土器を含む土師器などである。調査区丘頂平坦面ならびに南側斜面からは、土師器が主で須恵器等は非常に少なかった。この土師器には北側斜面出土のものよりも古い形式のものが認められた。なお、丘頂平坦面からは、遺物等の出土は全くみられない。

3. まとめ

八幡崎B遺跡は、概して古墳～平安時代に営まれた集落跡であると思われる。また、今回の調査からは竪穴住居跡〈奈良〉1軒、掘立柱建物跡〈平安〉4棟が確認された。なお、遺跡は調査区東側一帯にも広がっている模様である。



遺跡遠景



柱穴群遺構（北側斜面）



竪穴住居跡（南側斜面）

(5) 留^{とめ}沼^{ぬま}遺跡

(第1次調査)

遺跡所在地：古川市大柿字留沼 46

調査期間：昭和49年7月20日～7月27日（第1次）

調査面積：1,696m²

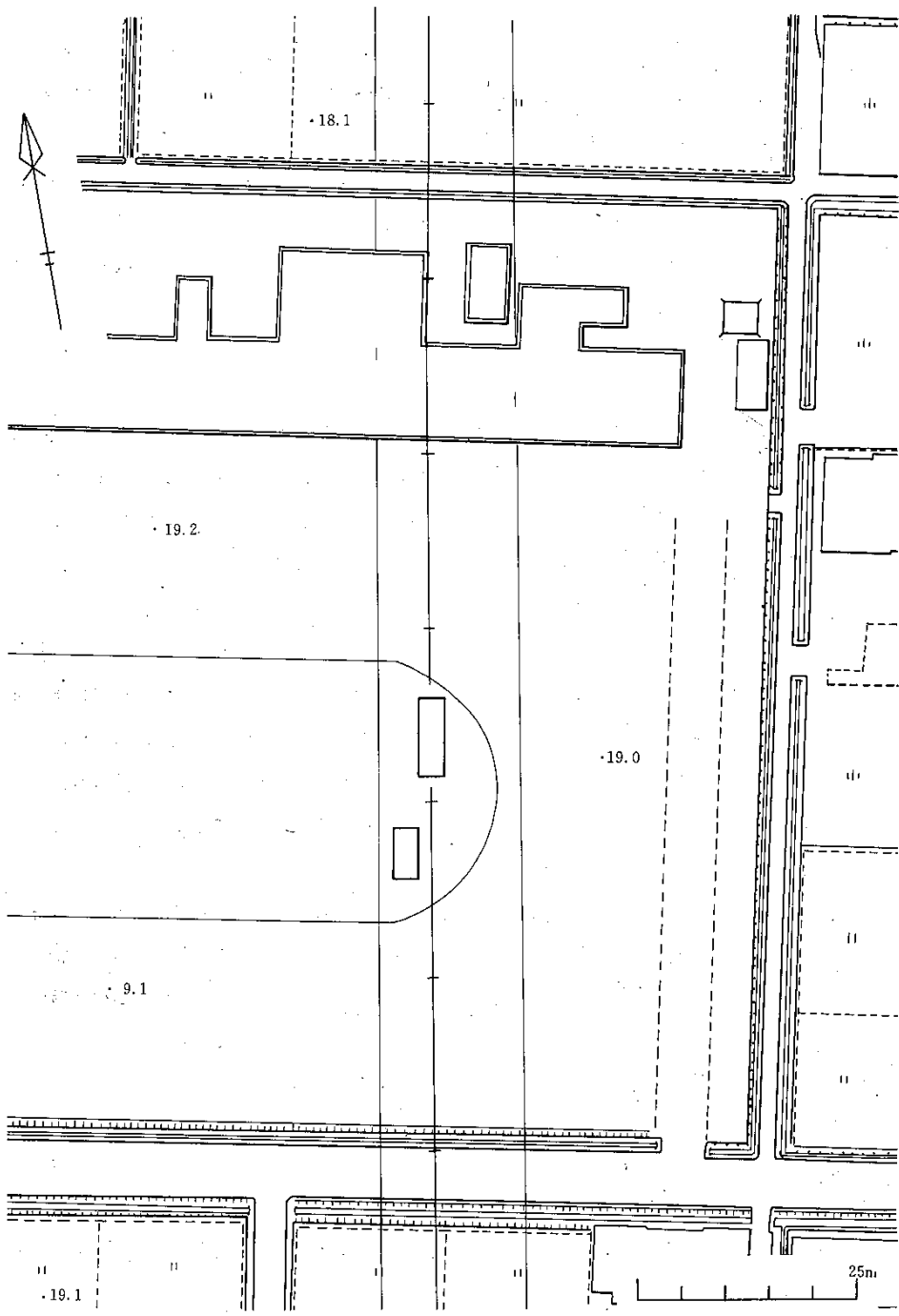
発掘面積：45m²（1,500m²の予定）

遺跡記号：BZ

協力・参加者：渋谷勝磨（三本木中学校主事）

古川市立第二小学校

古川市教育委員会



遺跡地形図・グリッド配置図

1. 遺跡の立地

留沼遺跡は古川市街北西部に位置し、大崎平野を東流する江合川によって形成された沖積平野上に立地する。付近は標高約19m前後の水田及び、沼を埋めた住宅地であり、また遺跡も現在古川第二小学校校庭として使用され、旧地形の面影は全くないといつてよい。

旧地権者によると、遺跡部分は、かつては微高地で、畑地として利用していたが、その後揚水に不便なため、削平したのち開田したとのことで、以前は若干高まった自然堤防上にあったものと思われる。開田及び校舎建築（昭和37年頃）の際、遺物が出土し、古墳時代の土師器、石製模造品等が知られている。

2. 調査の概要

遺跡の範囲は、小学校敷地を中心としてかなり広範囲なものと思われるが、路線敷にかかる部分は106m×16mである。しかしながら、現在校庭として使用されていること、また地元民にとっても付近では唯一の広場であることから、長期間にわたって発掘調査を実施することは不可能であると考えられたため、今回の調査は、遺跡の内容を把握する予備調査的なものにとどめることとし、比較的校庭使用に影響の少ないフィールド部分を対象として5グリット・45m²の発掘を行った。

基本層序は、最上部に校庭造成の際の砂礫を多量に含む盛土が約50cmあり、その下に、稲株稲杭等を含む旧水田の表土が約30cmある。この旧表土下に約20cm前後の厚さで遺物包含層が確認された。以下は砂と粘土の層となって続いている。遺物包含層以下では湧水が激しい。

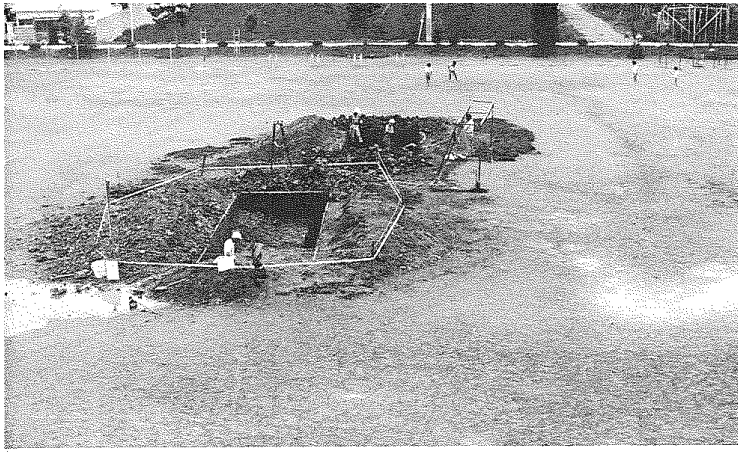
遺構としては、調査区北部から、長径100cm、短径60cmほどの楕円形の土壌が発見されたが、埋土は、旧表土であり、時期的には新しいものと思われる。内部から木製の遺物が出土したが、保存状態が悪く取り上げることはできなかった。

遺物包含層は調査区北部3区にみられ、甑1個体を含む甕、壺形土器が10数個体、ほぼ完形の状態で出土した。遺物の保存状態は比較的良好である。器形等の特徴からこれらの遺物は古墳時代南小泉式に属するものと思われる。この包含層の性格については、単なる遺物包含層か、あるいは、ほとんどが完形土器であることから、何らかの遺構との関連があると考えられるものかは、調査範囲が狭く、明らかにすることはできず、次回の調査に持ちこした。

3. まとめ

予備調査であるため、十分な知見は得られなかったが、本遺跡が、旧水田下に古墳時代南小泉式の遺物を包含する遺跡であることが明らかとなった。

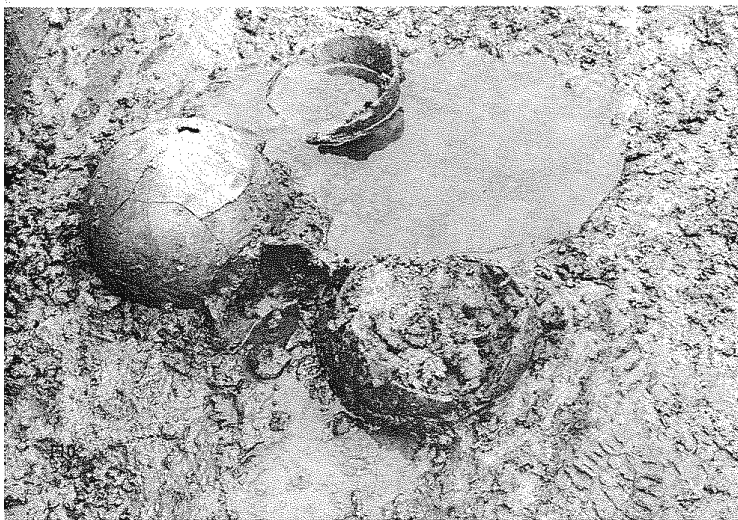
参考文献：伊東信雄「東北・石製模造品出土の遺跡」神道考古学講座2 昭和47年 雄山閣



発掘状況



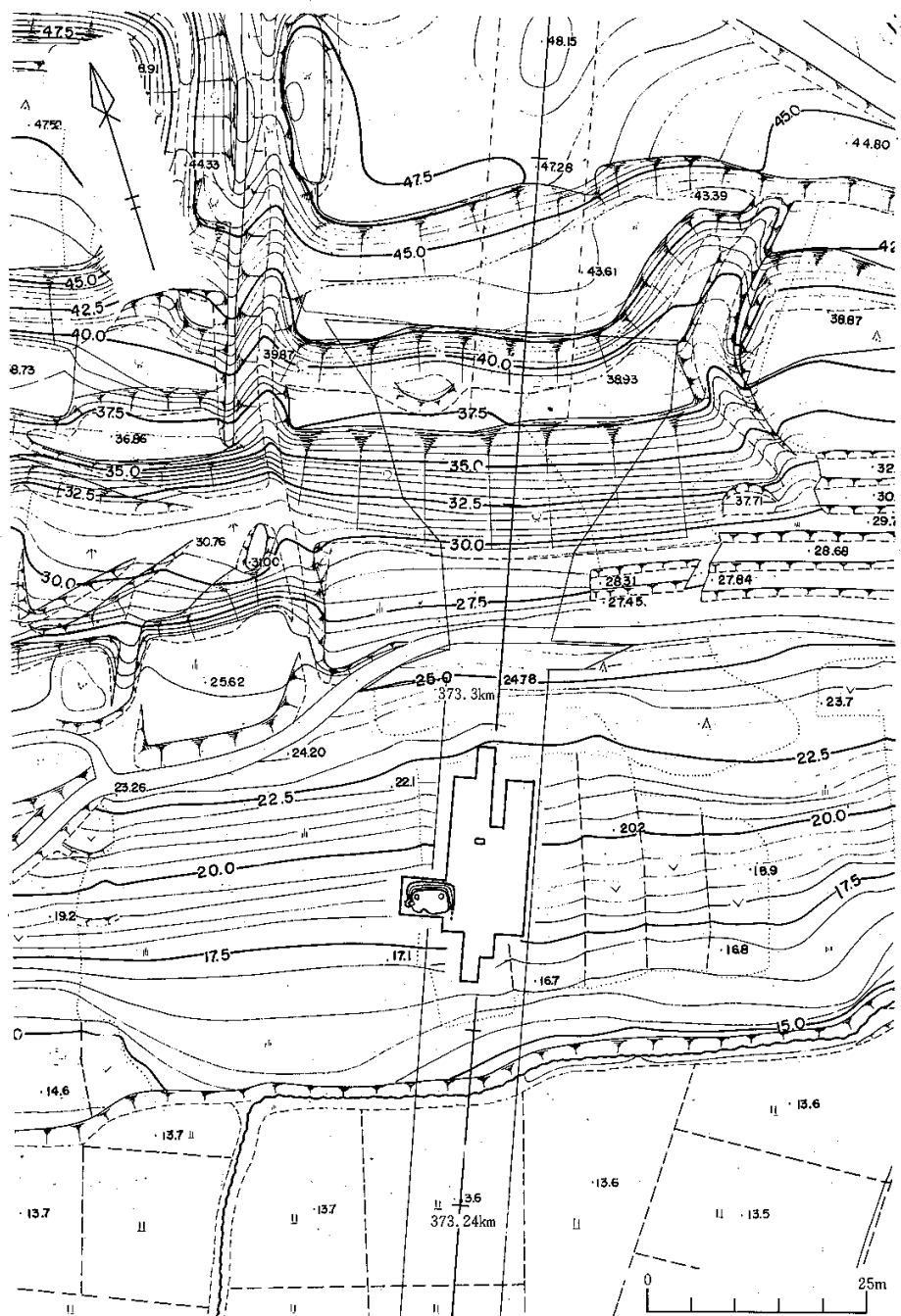
遺構と遺物



遺物出土状況

(6) 下折木遺跡

遺跡所在地：栗原郡高清水町陰ノ沢
調査期間：昭和49年11月4日～11月20日
調査面積：690m²
発掘面積：174m²
遺跡記号：CH
協力機関：高清水町立高清水中学校
高清水町教育委員会



遺跡地形図・グリッド配置図

1. 遺跡の立地

下折木遺跡は、高清水町の中心部から東へ約1km、県道高清水・瀬峰線のすぐ北側に位置している。同町北部は、北西から延びる築館丘陵が樹枝状に張りだしており、その張りだし部の尾根上（標高約50m）には新庄館跡がある。本遺跡は、その館跡南裾部にあたる傾斜地（標高約20m）にある。現在は畑地となっており、下の水田面との比高は約6mである。

2. 調査の概要

調査は路線敷内の約400m²を対象に行ない、昭和47年度の試掘調査で約69m²、今回の調査で約103m²の計172m²を発掘した。調査の結果、焼土遺構1（試掘調査時）、平安時代の住居跡1軒が検出された。基本的層序は、第1層暗褐色砂質シルト（表土）、第2層が若干粘性のある黒褐色シルト（下部には、こぶし大の円礫を含む）、第3層が黄褐色砂質シルト（地山）となっている。

遺構は、すべてこの第3層上面において確認された。また、第2層では、奈良・平安時代の土師器、須恵器が出土するが、遺物の包含状態から、傾斜が強いため上部から流れて堆積した可能性があると思われる。

平安時代の住居跡 住居跡の壁の一部が路線敷内東端に検出されたため、拡張して調査したものである。傾斜が強いため南半分はすでに破壊されていたが、ほぼ方形のプランをもつものと考えられる。北壁の長さは約5mである。西壁は、かなり壊されているが、黄色土で構築されたカマドの基底部分確認された。北壁の下には、幅約20cm、深さ約10cm程の周溝が、カマドのところまで巡っている。周溝の約40cm南側の床面には、柱穴と思われるピットが2個検出された。2個とも径約20cmほどである。遺物は、周溝内より須恵器甕破片が出土しており、時期は平安時代に属するものと思われる。

焼土遺構 調査区のはほぼ中央から発見され、東西約90cm、南北約90cmの方形の土壇で、現存の深さ約15cmである。東半分の壁は焼けて固くなっており、底面全体には焼土が分布している。時期については遺物が出土せず明らかでない。

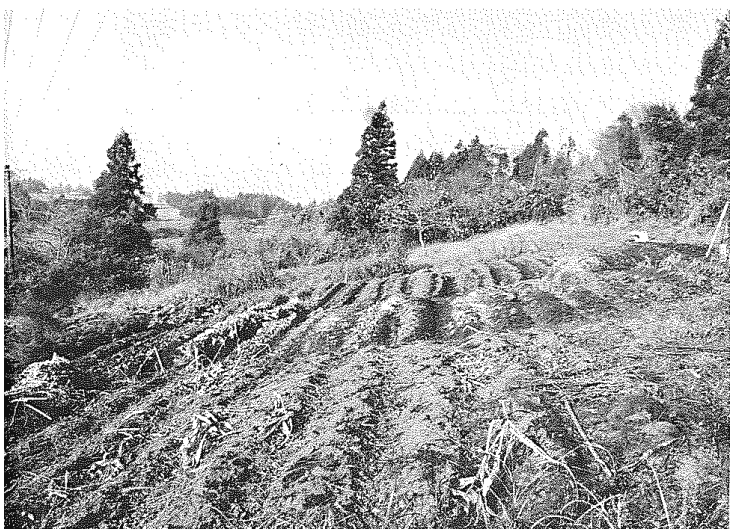
3. まとめ

昭和47年度の試掘調査と今回の調査の結果、平安時代の住居跡1軒、時期不明の焼土遺構が発見された。なお、路線敷内外及東西斜面から土師器、須恵器、縄文時代と思われる石器等が発見された。遺構は、かなり広い範囲に及ぶものと考えられる。

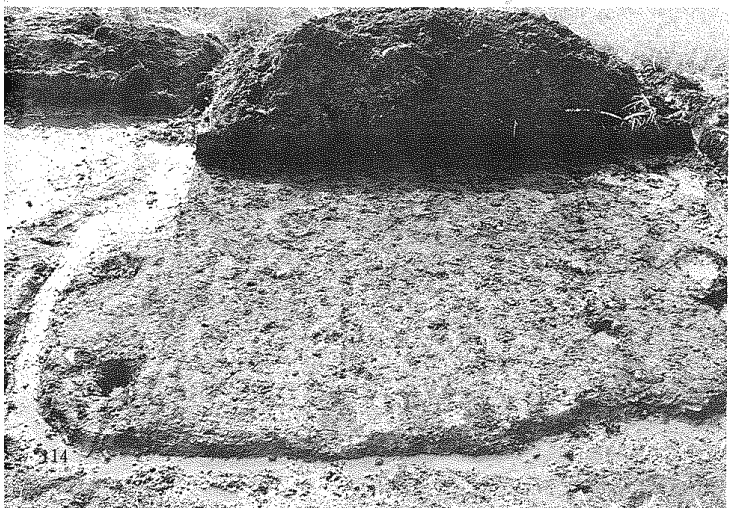
参考文献： 県教委「東北新幹線関係遺跡分布調査報告書」宮城県文化財調査報告書第27集－昭和47年－



遺跡遠景
(丘陵上面・新庄館、
東麓・下折木)



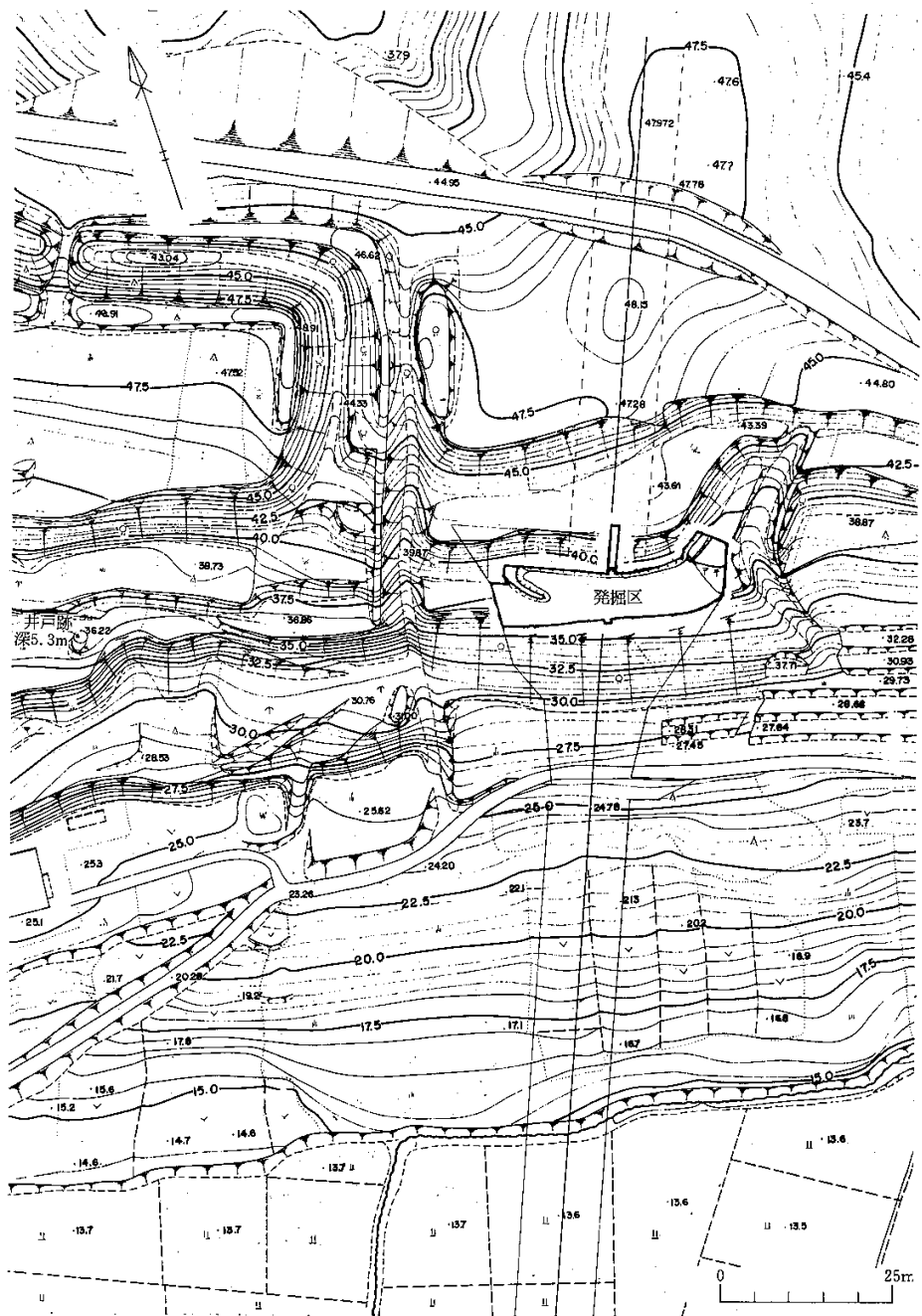
遺跡近景



竪穴住居跡

(7) 新庄館跡

遺跡所在地：栗原郡高清水町陰ノ沢
調査期間：昭和49年11月4日～11月20日
調査面積：2,600m²
発掘面積：224m²
遺跡記号：C I
協力機関：高清水町立高清水中学校
高清水町教育委員会



地形図・発掘区位置図

1. 遺跡の立地

高清水町の北部は、北西から南東に走る築館圧陵より派生した台山篋岳丘陵が延びており標高約50m程の小丘陵が発達している。この丘陵尾根上に新庄館跡がある。館の南側低地には善光寺川が流れ、東側から北側にかけては大小の沢が入り込んでおり、要害的な性格をもつ館である。館の範囲は東西約450m、南北約200mと思われる。館は、北側半分が牧場造成のため破壊されている。最頂部には東西約150m、南北約25mの平場があり、その北・東西には土塁が巡っている。その外には空堀があり、南側は段でもって平場を画している。さらに、その外側にも土塁があり、東側にも平場の存在が想定されるが、破壊されているため明らかでない。北部には空堀を遮って土橋状遺構が認められる。また、平場南側にみられた段はさらに3～4段あり、下側水田面へと続いている。この館については、古城書上、寛政10年(1798)記載の高清水拾遺志によれば、新庄伊賀守が足利の初め(14世紀半ば)より住んだとあり、天正14年(1585)になって、高清水直堅が御要害(高清水城)より一時移り住んだとされている。

2. 調査の概要

調査は、路線が館の東部をトンネルで通過することから、館の東側の腰郭(標高約34～36m)と考えられる地点において実施した。その結果、腰郭は斜面を削り、その土を積んで幅約6mの平坦面を造り出していることが明らかになった。平坦面は調査区東部で北東にカーブし、その部分で北側が高さ約0.6m、南側が約1.1mの段をもって立ち上がり、さらに北東に延びている。段の北側は幅約1.5mの通路と考えられる溝状遺構になっている。また、調査区の西部には、上位の腰郭に登って行く通路状の遺構が検出された。この遺構は、東側の通路状遺構と異なり、積土をして構築されており、その積土の状態から3期にわたって使用されたことが明らかになった。なお、館の構築、使用年代を決定すべき遺物等は出土しなかった。

3. まとめ

本館腰郭の平坦面の構築状態が判明したこと、通路状遺構の存在が確認されたこと、館の北側は、かなりの破壊を受けているが、南側は良好な遺存状態であること等が確認された。



腰郭全景（西側より）

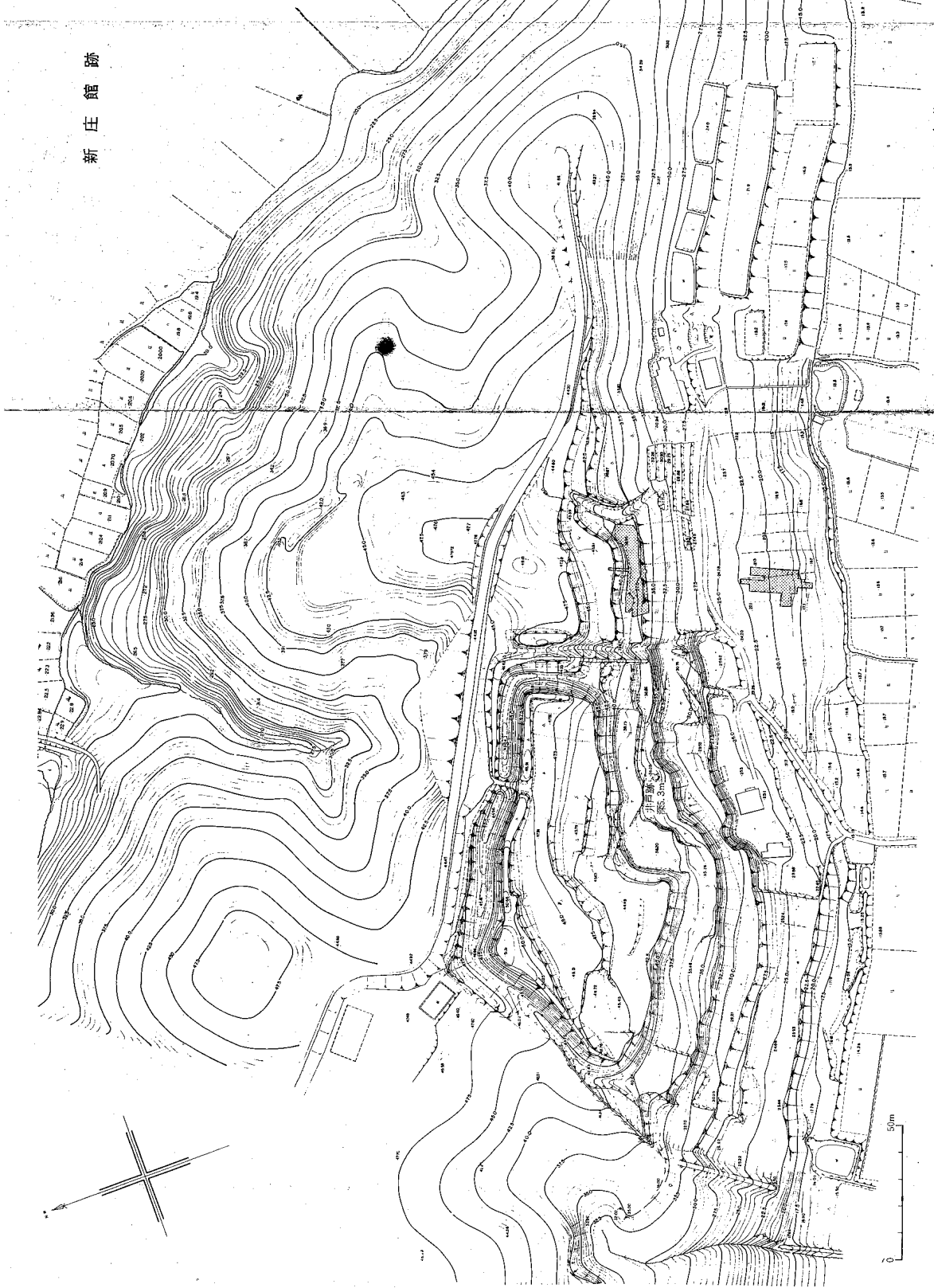


西側通路状遺構
（東側より）



東側通路状遺構

新庄館跡



(8) は ざわ よう がい 八沢要害遺跡

遺跡所在地：栗原郡築館町八沢字要害

調査期間：昭和49年10月1日～12月20日（第1次）

調査面積：5,000m²

発掘面積：4,500m²

遺跡記号：CJ

協力・参加者：金野 正（築館女子高等学校教諭）

佐藤信行（栗原郷土研究会会員）

清水芳裕（東北大学文学部研究生）

築館町教育委員会

※ 本遺跡は当初「八沢遺跡」としたが、今回小字名をとって『八沢要害遺跡』と改めた。

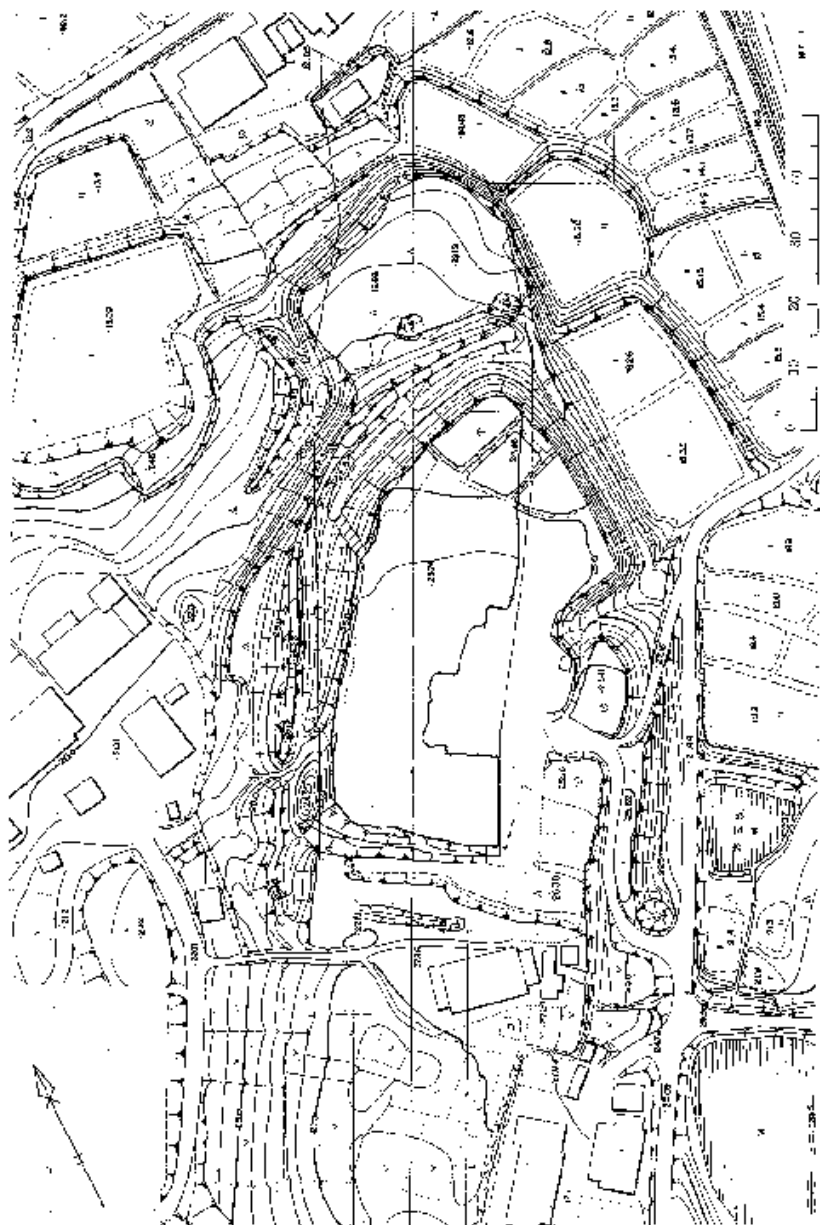


图 性全形地场造製

1. 遺跡の立地

八沢要害遺跡は築館町の中心部より南東約2kmの地点にあり、登米耕土に向って樹枝状に張り出した丘陵地帯（築館丘陵）の中にある小規模な八沢川沖積地に北向きにつき出た舌状丘陵上に立地している。なお北向いの丘陵上には照越、萩沢城等がある。

2. 調査の概要

調査は本遺跡の路線敷内を対象として行なわれ、そのうち約4,500m²を発掘した。遺跡は南北に三つの平場に分かれており（南から順にA、B、C平場とする）、その各々は空堀や段で区画されている。調査した結果、B平場を中心に下記の遺構および遺物が発見された。

掘立柱建物遺構 B平場では中央部を中心に多数の柱穴が検出された。重複個所が多く、建物の時期差が考えられる。現在まで5棟前後の建物跡を推定している。今後の検討によってそれら建物跡の形態、性格等が判明するものと思われる。A・C両平場ではまだ調査が完了していないが、同じく柱穴が検出されている。B平場と比較して密度は薄く、いまのところC平場に建物跡が1棟推定されるのみである。

土塁・空堀 土塁と空堀がB平場の西側から北側にかけて、平場をとり囲むようにめぐっている。またB平場の南端部に平坦面を東西に切ったような形で空堀が新たに発見されたが、B平場は以前に、この空堀によってA平場から分断されていたらしい。これは一つの防衛上の効果をあげたものとみることができよう。

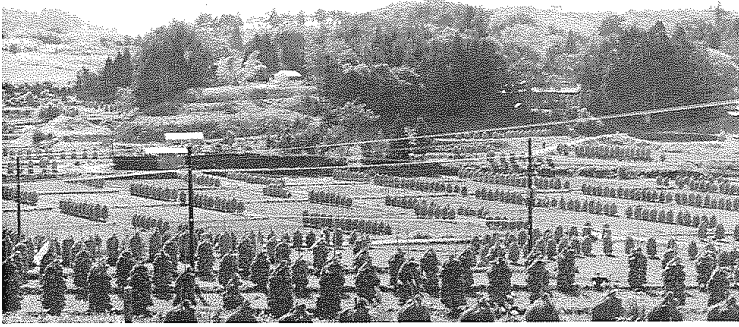
門と通路 B平場の東辺部に、斜面を逆台形に掘り下げて構築された通路が発見された。それは「ㄣ」を呈し平場に達している。またこの通路と平場との境に門柱跡と思われる柱穴が検出された。

井戸跡 井戸跡と確認された遺構はB平場から3箇所、C平場から2箇所である。そのうち完全に掘りあげたものはB平場にあるうちの2箇所であるが、遺物は北側にある井戸（第1井戸）の底部から曲物1点が出土したのみである。

出土遺物 遺物のうち陶磁器類は中世のものと思われる甕の口縁部片がわずかに出土しているが、大多数は近世以降のものと思われる。またB、C平場の空堀の埋土から板碑が出土した。欠損しているが貞治七年（西暦1368年）四月の文字と梵字が刻まれてある。その他、寛永通宝が2枚、建物に使用されたと思われる角釘数点、石臼、硯、和鏡、そして前記の曲物等が出土している。

3. まとめ

本遺跡は形態その他からみて、館跡もしくは屋敷跡と思われるが、その年代については、出土遺物等により中世から近世におよぶと考えられる。なお今のところ本遺跡の関係文献はない。



遺跡遠景

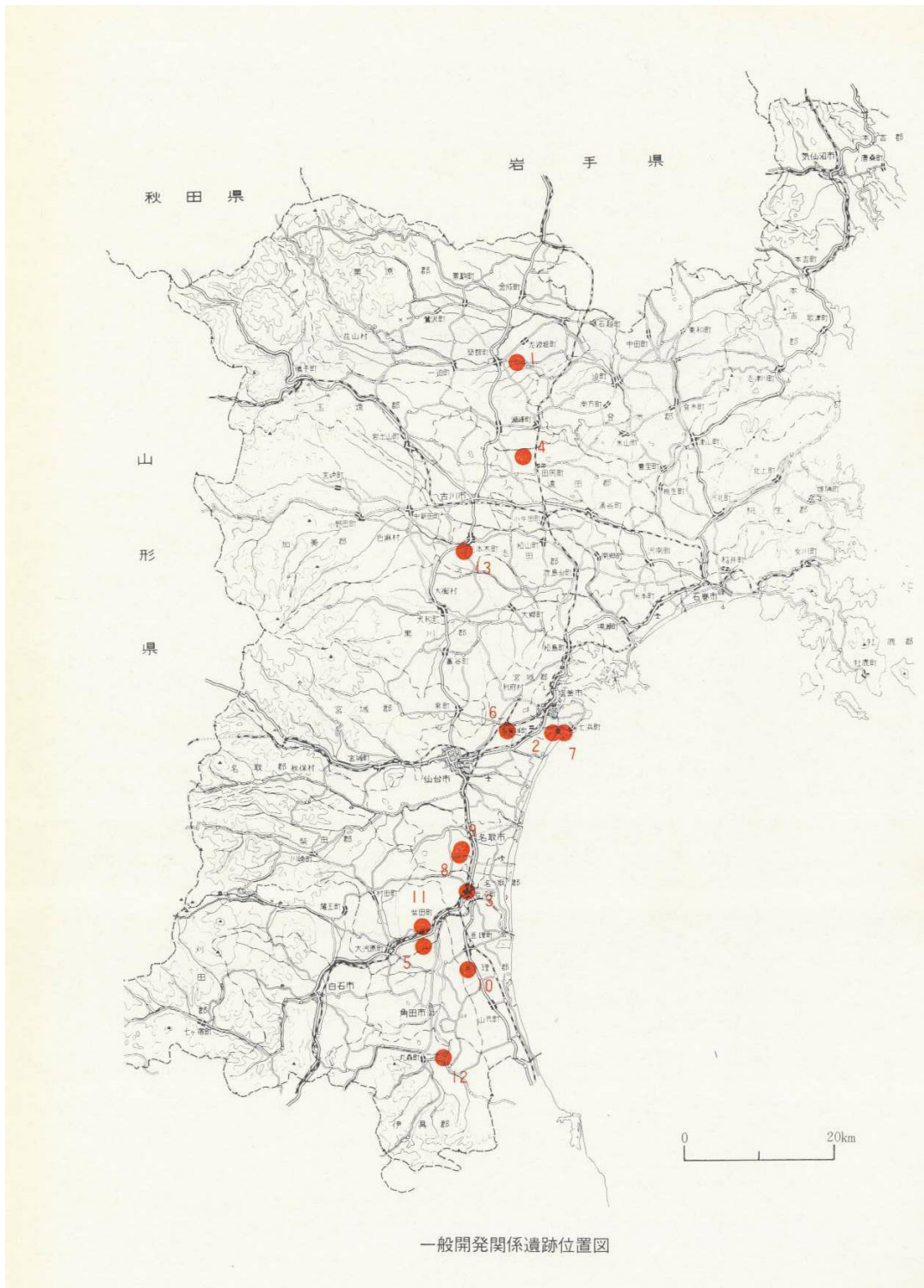


土塁・空堀



空堀発掘状況

IV 昭和 49 年度一般開発関係遺跡



調査遺跡

	遺跡名	所在地	原因	原因者	調査主体者	調査担当者	収録ページ
1	巖沢遺跡	築館町	開田工事	個人	築館町教委	築館町教委 県教委	129
2	新田前遺跡	七ヶ浜町	下水処理場 建設工事	県都市施設課	県都市施設課 県教委	県教委	133
3	三木横穴古墳群	岩沼市	宅地造成 工	個人	岩沼市教委	岩沼市教委 県教委	137
4	木戸瓦窯跡	田尻町	県道改修 工	県道路建設課	県道路建設課 県教委	県教委	141
5	船岡遺跡	柴田町	老人ホーム 建設工事	財団法人	柴田町教委	柴田町教委 県教委	145
6	新田遺跡	多賀城市	倉庫建設 工	民間企業	県教委	多賀城市教委 県教委	149
7	砂山横穴古墳群	七ヶ浜町	崖崩れ防止 工	県用地造成課	県用地造成課 県教委	県教委	153
8	十三塚遺跡	名取市	重文中沢家 移築に伴う 事前調査	名取市	名取市教委	名取市教委 県教委	157
9	宮下遺跡	名取市	土取り工事	個人	名取市教委	県教委	※
10	宮前遺跡	亘理町	宅地造成 工	個人	県教委	県教委	県報告第38集
11	壬平遺跡	柴田町	バイパス 建設工事	東北地方 建設局	東北地方建設局 県教委	県教委	県報告第39集
12	谷町古墳群	丸森町	町道改修 工	丸森町	丸森町教委	丸森町教委 県教委	※※
13	混内山横穴古墳群	三本木町	土取り工事	個人	三本木町教委	三本木町教委 県教委	※※※

※ 名取市教委で報告 (50年3月刊)

※※ 丸森町教委で報告予定

※※※ 三本木町教委で報告 (50年3月刊)

(1) ^{うなぎ}鰻 ^{さわ}沢 遺 跡

遺跡所在地：栗原郡築館町萩沢木戸

調査期間：昭和49年5月3日～16日

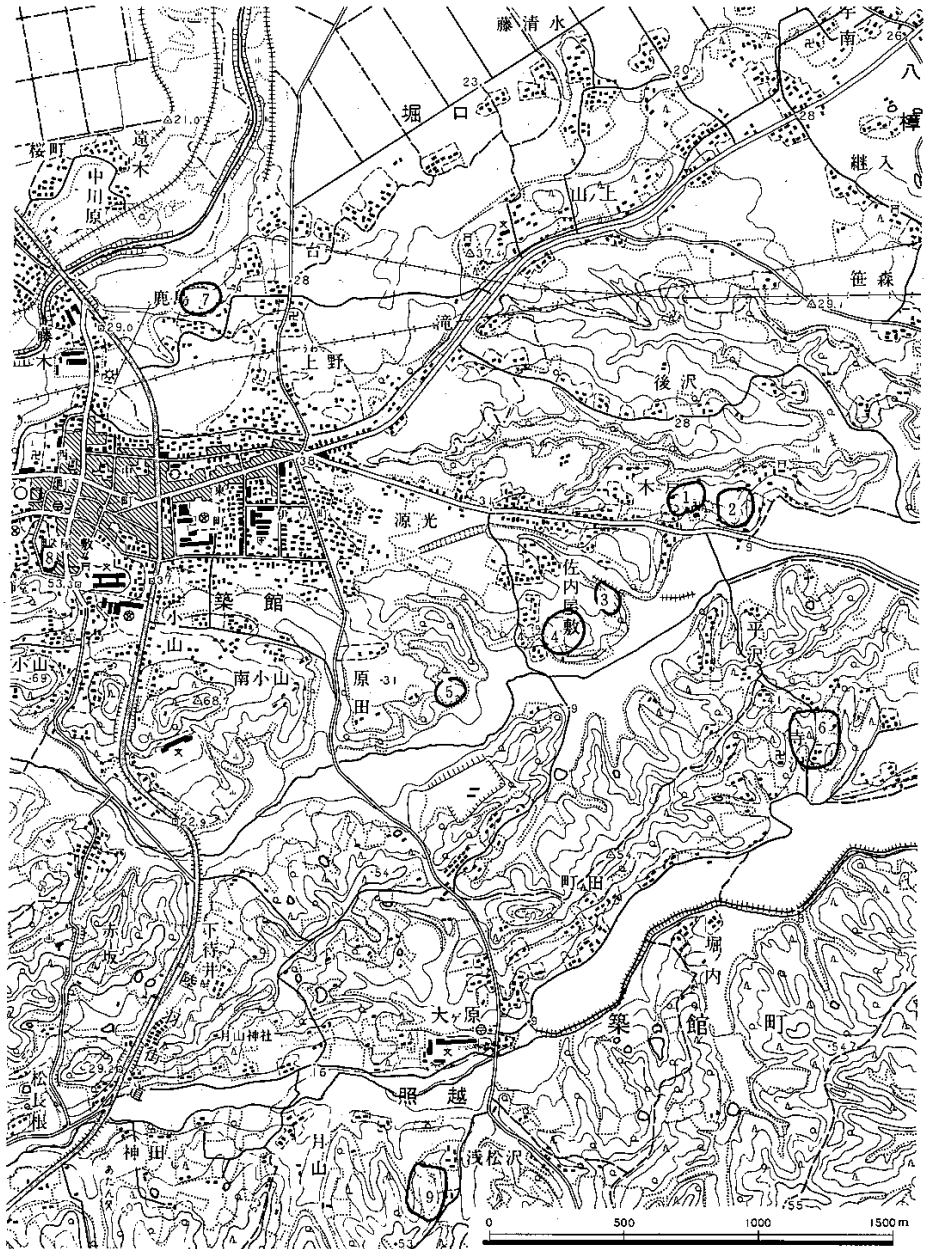
協力・参加者：金野 正（宮城県築館女子高等学校教諭）

三宅宗議（宮城県古川工業高等学校教諭）

佐藤信行（栗原郷土研究会会員）

宮城県古川工業高等学校郷土研究部

宮城県築館女子高等学校社会クラブ



- 1 鰻沢遺跡 2 萩沢城跡 3 木戸平沢遺跡
- 4 新田遺跡 5 原田遺跡 6 照越台遺跡
- 7 西館跡 8 薬師山北遺跡 9 照越城跡

鰻沢遺跡と周辺の遺跡

1. 遺跡の立地

鰻沢遺跡は築館町の中心より約2.5km東に位置し、伊豆沼へ連なる鰻沢とよばれる谷に面した標高20～30mの舌状丘陵上に立地している。この周辺は、奥羽山脈から派生する築館丘陵が迫川や、伊豆沼を中心とする湖沼地帯へ注ぐ小河川によって開析され樹枝状に丘陵が展開している。この丘陵上には縄文時代以降の貝塚や集落跡等、多くの遺跡の存在が知られている。

2. 調査の概要

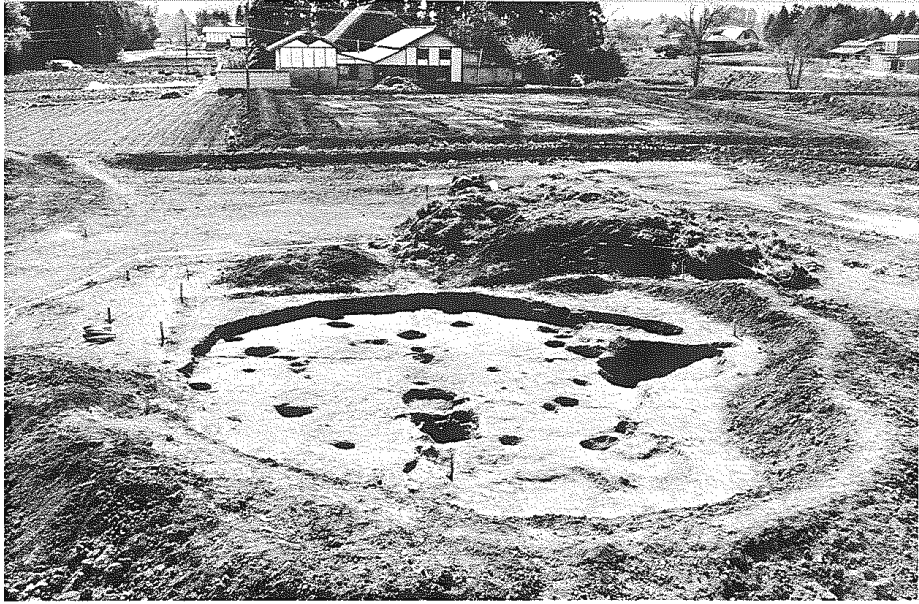
昭和49年春、遺跡周辺が開田工事により削平された際、多くの遺物とともに竪穴住居跡が発見された。確認された住居跡の数は9軒であるが、これらは土盛をして保存することで地権者の了解が得られたため、このうち1軒だけを調査し、遺跡の内容の把握を行った。竪穴住居跡の概略は次のようである。

平面形は直径7.6mの円形を呈し、北及び東壁の一部が後世の攪乱により破壊されている。壁はほぼ垂直に立ちあがり現存高約30cmである。床面は平坦で固くしまっており、貼床等は認められない。住居跡の東側に炉が検出された。炉は東西115cm×南北100cm、深さ35cmの長円形の掘り込みと、その西側に接した東西85cm×南北85cm、深さ10～17cmの浅い隅丸方形の掘り込みから成り、炉内堆積土の状況から両者は同時に使用されていたと考えられる。東側の掘り込みは、東壁がなだらかに立ちあがり、東に開くような形となる。西半分の壁には壁沿いに白色粘土が貼ってあり、この部分には熱を受けた痕跡が顕著に見られるが、底部までは及んでいない。西側の掘り込みの北には、北壁に口縁を接して深鉢土器が横位に埋設されている。この掘り込みの壁・底面及び埋設土器とその周辺は熱により赤変している。この炉には石を使用した痕跡は全く認められないが、このような形態の炉は福島県、山形県、宮城県南部を中心に縄文中期末に特徴的にみられる「複式炉」に近似するものである。また、この炉の長軸線上、住居跡中心から西によった所にも埋設土器が発見された。土器や掘り方埋立が熱を受けて赤変しており、炉としての役割を果たしたものと考えられるが、機能的に前者との違いは明らかでない。住居跡内には、この他にも数ヶ所焼けた面が認められた。柱穴には主柱穴と壁柱穴とがあり、主柱穴は炉の長軸線をはさみ対称となる位置に6個、壁柱穴は壁沿いに9個検出されている。床面からの深さは50～100cmと深い。住居跡内堆積土、床面からは多量の土器や石器（石鏃・石斧・石匙・石錘、刃器）土製装身具などが出土している。これらの遺物や、埋設された土器、炉中に落ち込んでいた土器などから住居の年代は、縄文時代中期末、大木10式期と考えられる。

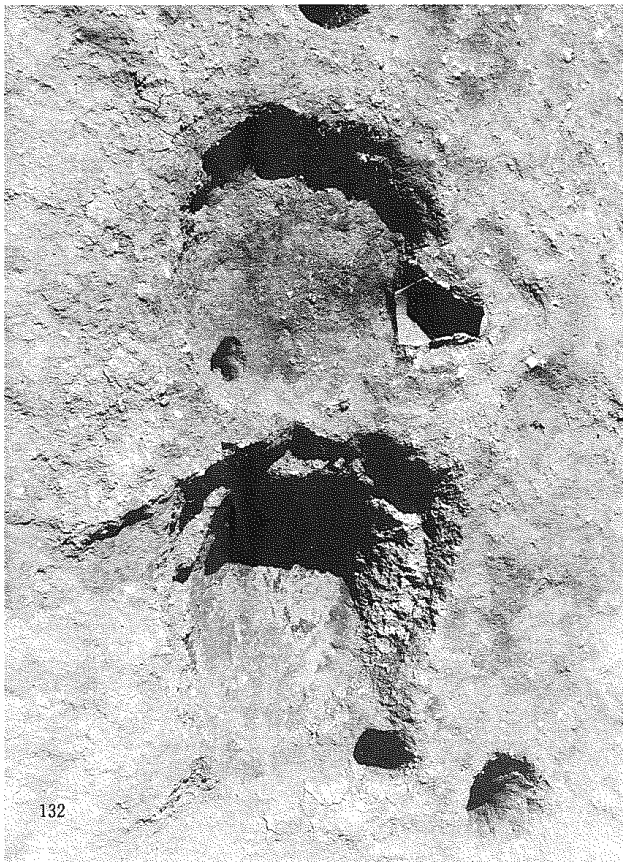
3. まとめ

調査の結果、鰻沢遺跡は縄文時代中期末葉の集落跡で、その範囲はかなり広いことが明らかになった。また、柱穴の配置、炉の形態や構造等々に新知見を得ることができた。

参考文献：古川工業高等学校郷土研究会 うなぎ沢遺跡説明資料 昭和49年



竖穴住居跡全景

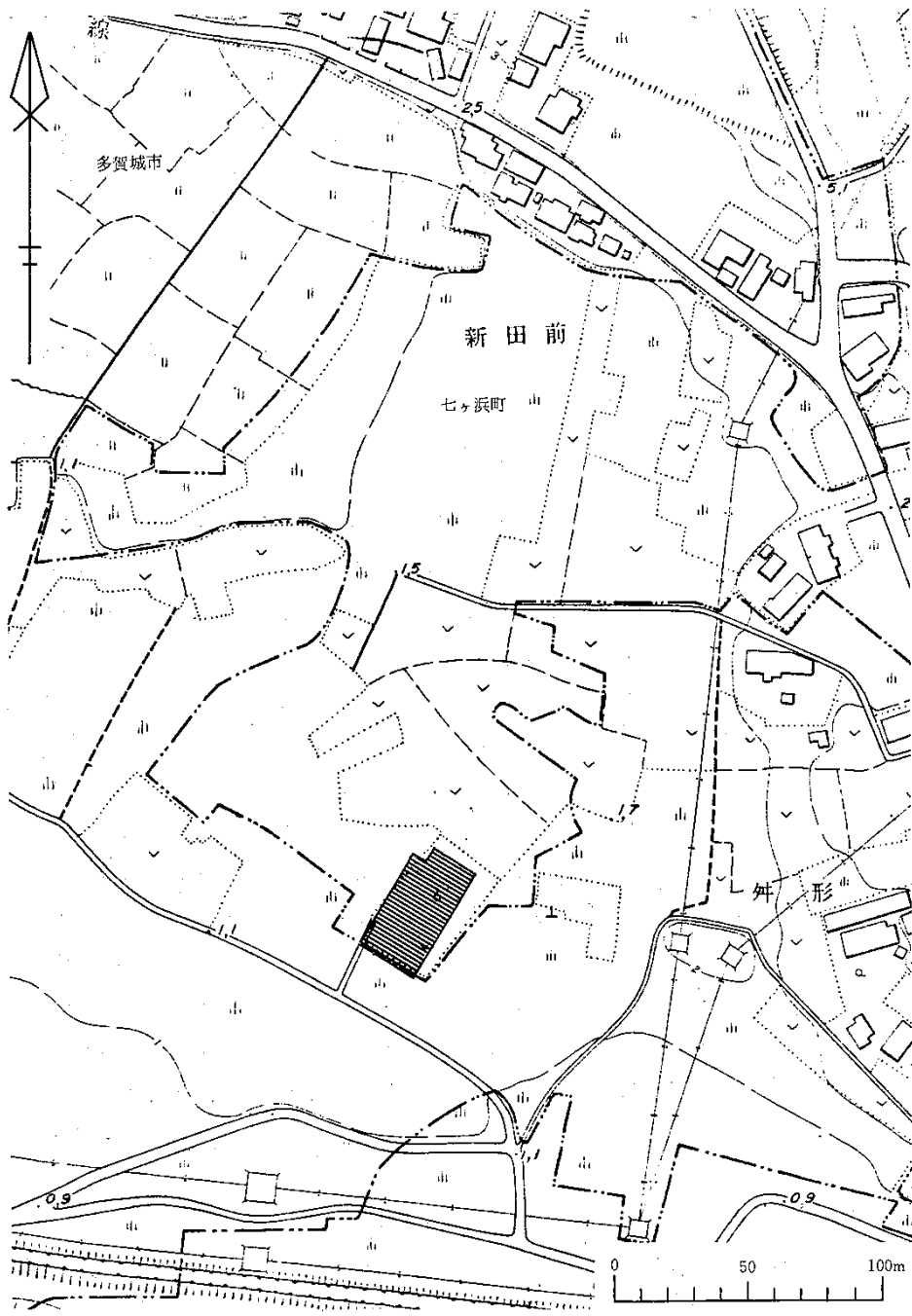


132

炉

(2) しん でん まえ新田前遺跡

遺跡所在地：宮城県七ヶ浜町新田前1～24
調査期間：昭和49年5月13日～6月27日
調査面積：約5,400m²
発掘面積：約2,700m²
遺跡記号：DG



調査地点

1. 遺跡の立地

新田前遺跡は、セツ浜町湊浜の西1kmに所在する。湊浜地区の西には標高1.5～2mの低砂丘地帯が、南に傾斜して広がっており、遺跡はこの砂丘地帯に立地する。付近には北方500mの地点に東北南半部における弥生中期の標準遺跡として著名な柵形囲貝塚があり、また砂丘地帯の北側にある小丘陵斜面には、大代横穴古墳群、砂山横穴古墳群等が知られている。この砂丘地帯は、水田・畑として利用されていたが、近年、工場用地・宅地・造園工事等に伴う盛土や掘削で、現状は著しく変化している。

2. 調査の概要

本遺跡は、柵形囲貝塚の南側にある砂丘地帯が仙塩流域下水道終末処理場用地に含まれることになったため、昭和48年5月に用地内の分布調査を行なった際発見された遺跡である。分布調査の際、弥生土器、ロクロ調整の土師器、須恵器等が採集され、その中には「葵」(?)と書かれた墨書内黒土師器片がある。

発掘調査は、用地のうち、処理場が建設される北東隅約5,400m²を対象に行ない、約2,700m²を発掘した。基本層序は第1層(表土)、第2層:暗褐色砂層、第3層:黒褐色土層、第4層:褐色砂層、第5層:灰褐色砂層であり、第5層までの深さは約2mである。第3層はロクロ調整の土師器、須恵器等を多量に含む遺物包含層で、ほぼ調査区全体にみられ、北側が厚く20～30cmほどである。また調査区北東部で、第3層の下に直径2mほど、厚さ10～20cmのハマグリ貝層がブロック状に2ヶ所みられ、層中からロクロ調整の土師器が若干出土した。この遺物包含層とハマグリ貝層は、さらに調査区北側にのびるものと思われる。

遺構としては、調査区中央部北寄りに大溝、井戸跡が検出された。〈大溝〉第3層上面から掘り込まれている幅8.5m、深さ50cmほどのもので調査区を東西に横切っており、この溝によって遺物包含層(第3層)は南北に分断されている。ロクロ調整の土師器、須恵器が出土している。

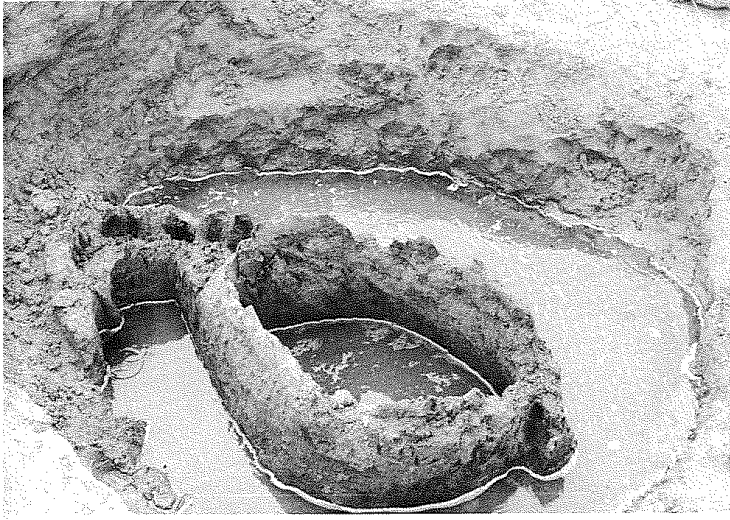
〈井戸跡〉第4層上面で長径1.5m、短径1.15mの楕円形の掘り方が確認された。流入土を20～30cmほど掘り下げたところで井戸枠が発見された。井戸枠は、厚さ5cmほどの弯曲した板を2枚組み合わせたもので、75×50cmの楕円形を示し、現存高は40cmほどである。井戸枠の下から、さらに30×20cmの隅丸方形の曲物が発見されている。掘り方の断面形は逆台形を示し、底径は約1mほどで、確認面から曲物下端までの深さは90cmである。流入土から土師器、須恵器片が若干出土している。

3. まとめ

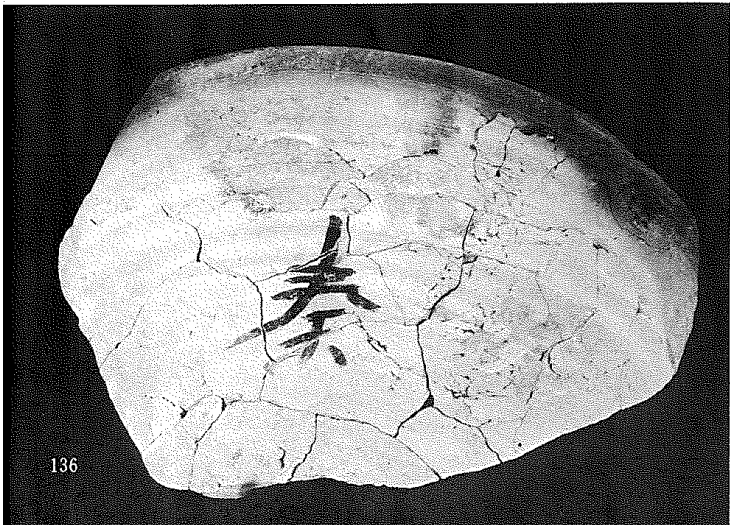
本遺跡は、奈良～平安時代の集落跡の一部で、遺物、遺構のあり方等から、遺跡の主体は用地北側へのび、それに伴う遺物包含層は調査地区北側の地域に広がっていたものと考えられる。なお、北側地域は現在盛土をして、公園化されている。



遺跡遠景



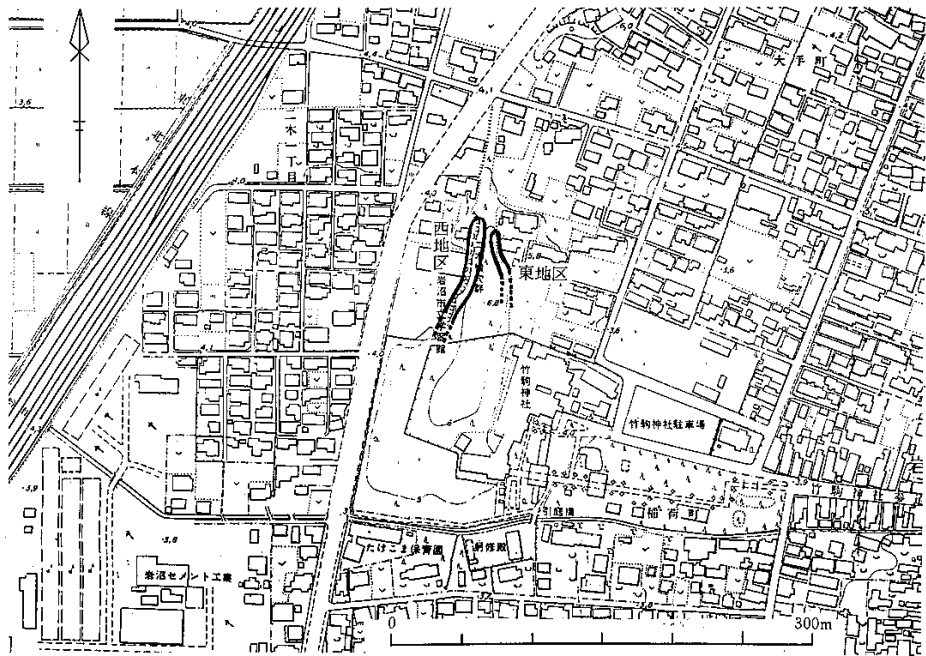
井戸跡



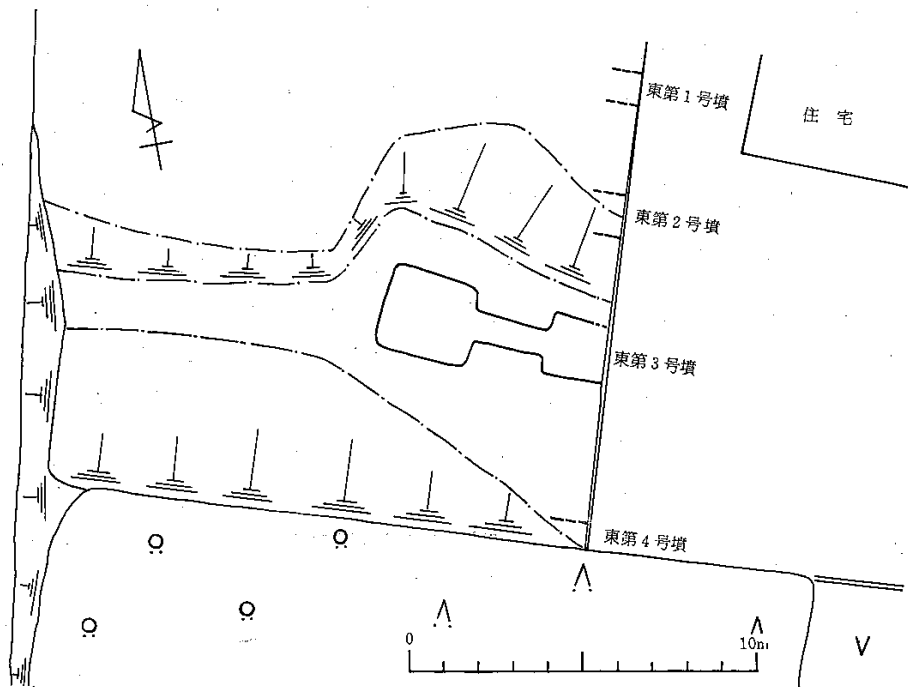
墨書内黒土師器坏

(3) ^{ふた き}二木横穴古墳群

遺跡所在地：岩沼市二木2丁目32-2
調査期間：昭和49年6月14日～15日
調査面積：約160m²
発掘基数：1基
遺跡記号：DR



遺跡位置図



二木横穴古墳群東地区・1~4号墳配置図

1. 遺跡の立地

二木横穴古墳群は、岩沼市竹駒神社裏の標高約10m前後の南北にのびる丘陵上にある。今回調査した横穴古墳は、この丘陵の東側に位置し、新たに発見された4基中の1基で「二木横穴古墳東3号墳」と命名した。この付近は現在市街地となっているが、阿武隈川によって形成された沖積平野である。横穴の造営されている丘陵は、市街地の西側に南北に走る千貫丘陵から東側に凝灰岩質の標高20m前後の丘陵が延びているその東端にあたるものである。この丘陵と沖積平野が接するところには、長谷寺、平等山、朝日等の横穴古墳群及び長岡古代集落跡等の遺跡が密集している地帯である。

2. 調査の概要

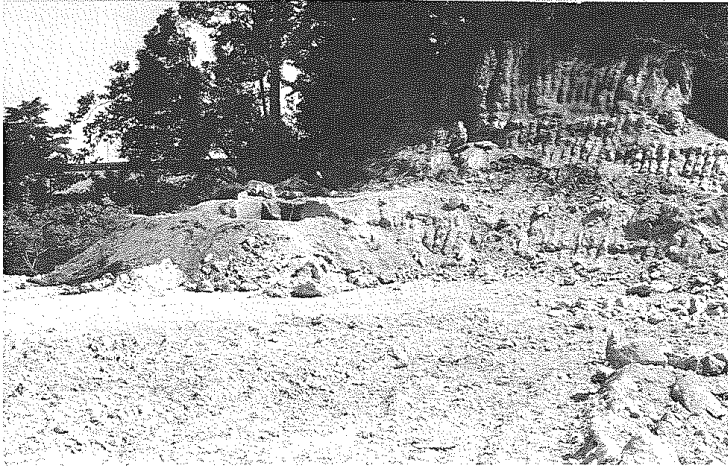
この横穴古墳は、宅地造成のために周知の二木横穴古墳群の東側を削平した際に発見されたものである。東1号墳は、造成の業者も知らずに削平してしまい、崖面の前庭の一部を確認したにすぎない。東2号墳は、岩沼市教育委員会の連絡により同市文化財保護委員、小野力氏により緊急調査が行われた。東3号墳は、県教育委員会が調査したが古墳の天井部は落ち立面構造まで把握できなかった。東4号墳は、造成地の南端に位置し、現状のまま保存した。1～4号墳は現地表より1～1.5mほどの高さに並列に造営されていた。

調査した東3号墳は玄室、玄門、羨道をもつ平面構造である。玄室の平面形は長方形を呈し、長軸約2.3mあり、玄門より見て左側にのみ、幅10cm前後の溝をめぐらして台床を造出している。玄門は幅約0.8m・長さ2.2mあって、この中央部と玄門入口に閉塞用の溝があり、それをつないで、縦に排水溝が走っている。羨道は幅1.8m、長さ1.6mあるが、側壁及び床面は入口付近では地盤との区別が不明確である。立面形は天井部が既に削平されたため不明であるが、玄室、玄門、羨道の残存の側壁より推定するとアーチ型を呈していたものと考えられる。

施設としては、玄門入口の閉塞溝に床面と接して2個の凝灰岩が置かれていたが、溝の中に入り込んでいた点より閉塞用に使用されたものと考えられる。なお玄室内に直径20cm前後の石が11個不規則に配置されていた。玄室内にはほとんど堆積土がなく床面に接してこれらの石が発見された。従って後世において搬入されたものと考えられる。遺物は羨道部の側壁に接して平瓶、提瓶、土師器甕が床面上約10cmほどの堆積上中から発見された。

3. まとめ

出土遺物の土師器甕は輪積み痕が体部にあり、形態等より考えて栗罎式に比定できる。従ってこの横穴古墳は7世紀後半から8世紀初め頃には使用されていたものと考えられる。



遺跡全景



玄室内部



羨道部の遺物出土状況

(4) 木戸^{きど}瓦窯跡

遺跡所在地：遠田郡田尻町沼部字木戸44の1

調査期間：昭和49年7月21日～30日

調査面積：約40m²

発掘基数：2基

遺跡記号：RKDB（但し、多賀城跡調査研究所の遺跡記号による）

協力・参加者： 三宅宗議（宮城県古川市工業高等学校教諭）

進藤秋輝（宮城県多賀城跡調査研究技師）

桜井幸喜（宮城県古川工業高等学校助手）

渡辺伸行（東北大学学生）

清水 毅（東北学院大学学生）



木戸寨跡と周辺の地形

1. 遺跡の立地

木戸窯跡群は、宮城県遠田郡田尻町沼部字木戸・沼部学的場・沼部字北沢地区内にかけて分布している。町の中心部から県道田尻～瀬峰線を約2.5kmほど北東方へ進むと、宮城交通の木戸停留所にいたるが、窯跡はこのあたりから北西部方面にかけての丘陵裾部斜面の各所に構築されている。今回調査を実施したものは、木戸窯跡群のうち、沼部字木戸地内の1群にふくまれるものの2基である。昭和49年春、県道田尻～瀬峰線のバイパス工事が同地区内で着工されたのに伴い、偶然に窯跡が発見されたための事前調査である。

2. 調査の内容

発掘調査により、丘陵の東向き斜面の頂部付近に並列する2基の窯跡を発見した。いずれも凝灰岩の傾斜面を掘り抜いて造られた地下式の窖窯である。灰原や前庭部は調査していないが、燃烧室や焼成室・煙道の各部分が遺存している。焼成室の床面は15°程度の緩傾斜をなすが、燃烧室と区分する段は認められない。また階段状の施設も存在せず、焼成室床面に多数の瓦片が散在している。今回の調査によって、1号窯からは瓦類のみが出土したが、2号窯からは瓦類のほかに須恵器坏や土鈴等が出土している。瓦類のうち、最も多いのは平瓦であり、丸瓦は少量であった。平瓦は4枚造りで両面をすり消したもの、丸瓦は有段の玉縁がつくものである。これらと伴出した軒瓦は、いわゆる古式重弁蓮花文軒丸瓦と手描き重弧文軒平瓦の各1種類のみである。これらの瓦類は、特別史跡多賀城跡および多賀城廃寺跡から出土しているそれぞれの創建期瓦と同じものであり、その製作年代および供給関係を知ることができる。

なお、路線敷に接して3号窯があるが、これはほとんど保存が図られることになっている。

3. まとめ

木戸窯跡群は、宮城県加美郡色麻村日ノ出山窯跡群および宮城県古川市大吉山窯跡群と並ぶ多賀城関連の生産遺跡である。これら3者の窯跡群は8世紀前半の早い頃の多賀城創建期に、多賀城並びに多賀城廃寺の屋根瓦を製作するために特設されたものである。東北地方における国府系の瓦としては、多賀城の創建瓦が祖型となるものであるから、これらの窯跡群は東北地方で最古の国府系瓦を製作した遺跡であるといえる。

付記

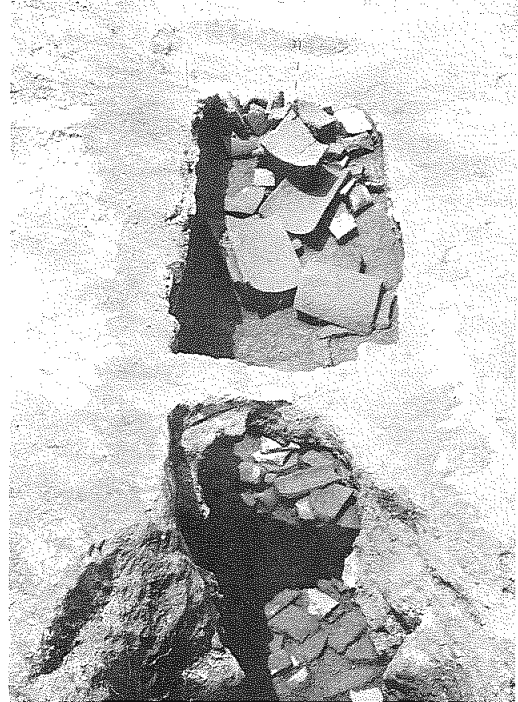
宮城県教育委員会では、昭和49年9月、発掘調査を実施した地点の北北西約700mの地区内において、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの協力を得て磁気調査を行なった。この場所は田尻町沼部字的場42番地内（高橋学氏所有地）で、ほぼ西向き傾斜面の畑地である。その結果、磁気の強度の高まりによるコンターラインの形から推して、5基の窯跡の存在を確認した。これらについては、現状のままでの保存をはかることにしている。



調査区全景



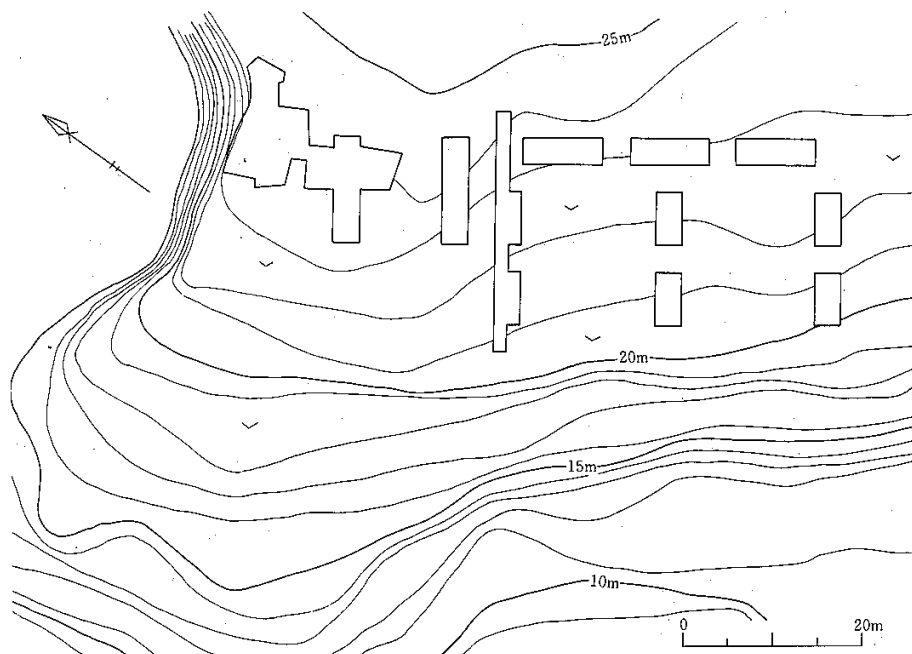
1号窯跡（煙道部より焼成室をみる）



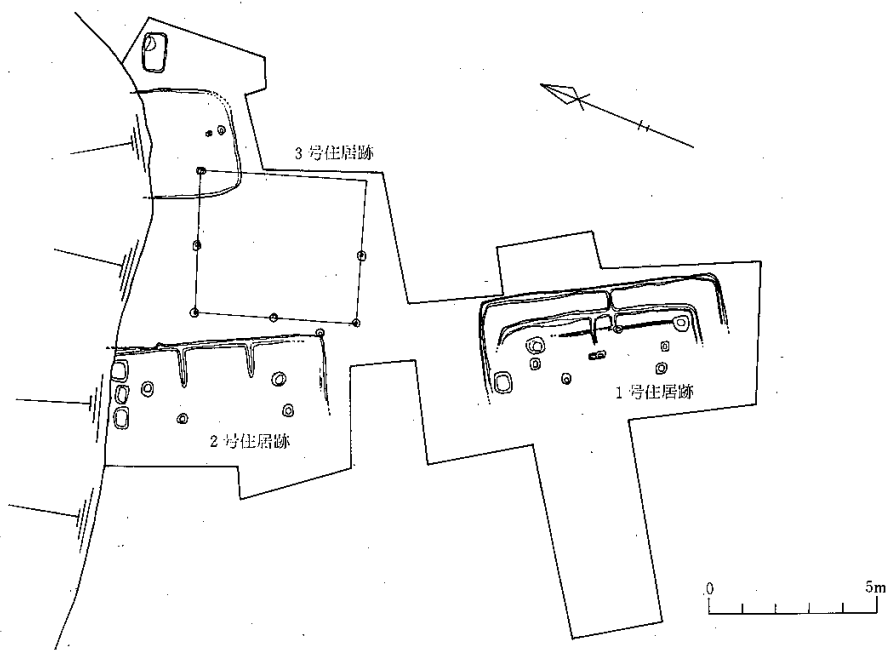
2号窯跡（焼成室より煙道部をみる）

ふなおかはさま
(5) 船岡迫遺跡

遺跡所在地：柴田郡柴田町大字船岡字船岡迫
調査期間：昭和49年8月6日～9日，8月27日～30
調査面積：約2800m²
発掘面積：約410m²
遺跡記号：D○
協力・参加者：永沼外科病院



グリッド設定図



遺構配置図

1. 遺跡の立地

船岡迫遺跡は、柴田町大字船岡字船岡迫に所在し、東北本線船岡駅より南東へ約2kmの地点に位置する。柴田町と角田市が境を接する付近には、角田丘陵が延びてきているが、さらにこれより枝分かれした舌状小丘陵が数多くみられる。遺跡は、この小丘陵群のうち北西に向かって延びた標高30m程の舌状小丘陵上に立地する。遺跡地からは、白石川によって形成された沖積平野が眼下に眺望される。周辺には古墳～奈良・平安時代の遺跡が数多く知られているが、最近行われた分布調査によって、本遺跡の南方200mに船岡迫横穴古墳群が新たに発見されている。

2. 調査の概要

遺跡の立地する丘陵突端部の西側斜面に、老人ホームが建設される事になったため、建設予定地域内の約410m²を発掘した。その結果、土壇1基・竪穴住居跡3軒・掘立柱建物1棟が発見された。

土壇 直径184cmの不整な円形を呈するもので、底は平坦である。深さは東壁で48cmほどである。堆積土より縄文晩期土器片が10数点出土しているが、その性格は明らかでない。

竪穴住居跡 3軒発見されたが、いずれも耕作などによって著しく損われている。

1号住居跡：周溝、柱穴の配置から改築が行われたようであり、3つの時期が認められた。また切合関係などから、漸次拡張されたものと考えられる。最初の時期のものについては、規模が明らかでないが、2回目・3回目のものは一辺が各々6m、7.4mほどである。全て周溝がめぐっており、2回目、3回目のものの床面には、東壁より直角に溝が延びている。

2号住居跡：東壁の現存部分は6.5mを測る。床面に、東壁の周溝から直角に延びる溝は2本確認されている。床面は1号住居跡同様岩盤である。壁の立ち上がりは垂直に近い。

3号住居跡：東壁で3.3mを測る。周溝はみられなかった。北壁の側に焼土が分布し、焼けた長方形の砂岩と土師器の長胴の甕が発見された。壁の立ち上がりは緩やかである。

掘立柱建物跡 東西2間、210cm等間隔で、南北2間、240cm等間隔であるが、一部柱穴の認められない所もある。

住居跡内外より出土した土器は、ロクロ調整以前の土師器であり、内黒の丸底坏・長胴の甕がみられる。その他弥生土器片も数点出土した。土器以外の遺物はみられなかった。

3. まとめ

今回の調査によって、縄文時代・弥生時代・古墳時代の遺物が発見された。古墳時代の竪穴住居跡は、改築されたものや、床面に周溝より直角に溝が延びるものがあり、住居跡の構造を考える上で注目された。また住居跡は、今回の調査区の東側にも延びる事が予想され、遺跡の範囲はさらに広がるものと思われる。



遺跡遠景



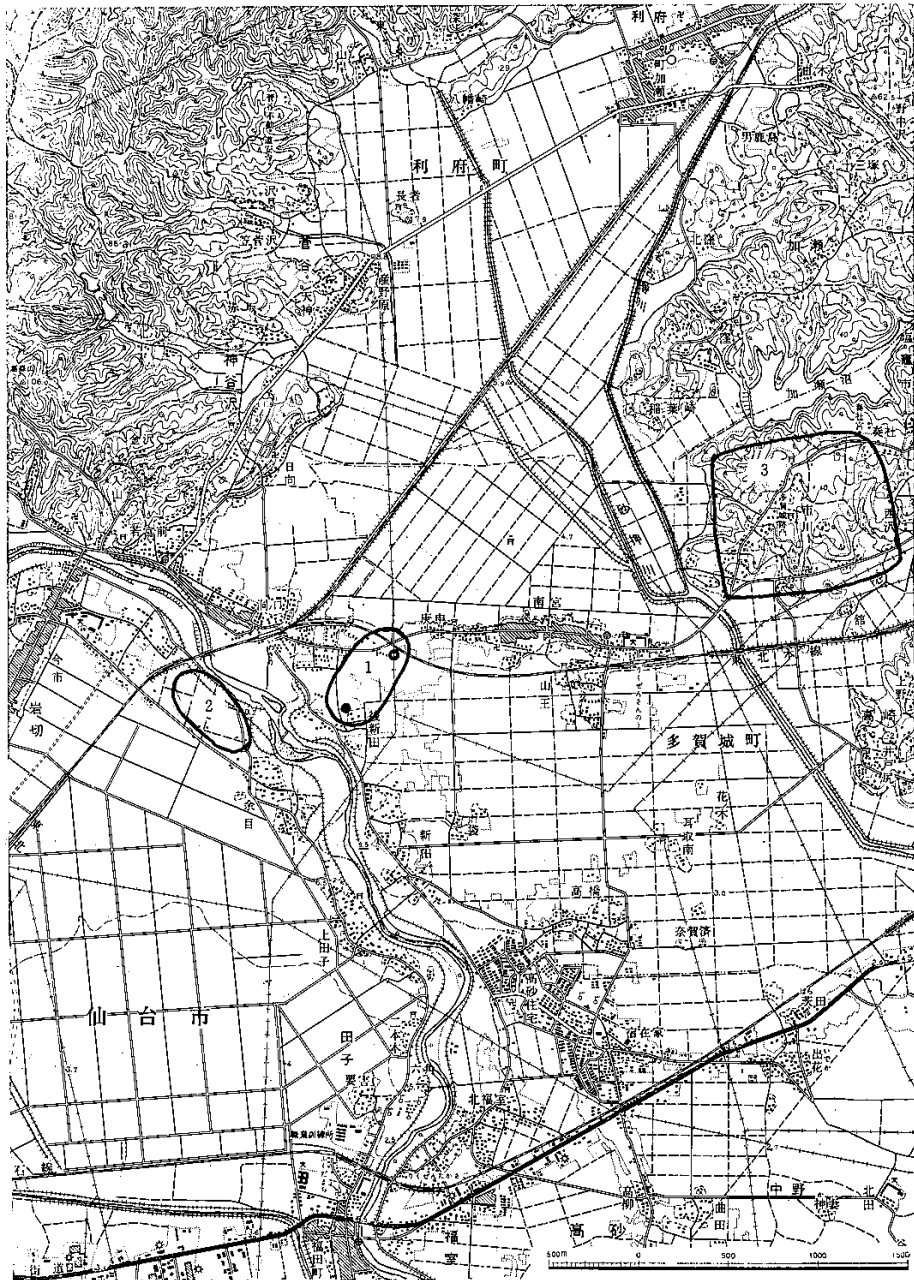
1号竪穴住居跡



2号竪穴住居跡

(6) 新^{にい}田^だ遺跡

遺跡所在地：多賀城市山王字北寿福寺
調査期間：昭和49年8月20日～21日
調査面積：約2,270m²
発掘面積：81m²
遺跡記号：DK
協力・参加者：門脇鋼材株式会社



新田遺跡と周辺の遺跡

- 1 新田遺跡 2 鴻ノ渠遺跡 3 多賀城跡

1. 遺跡の立地

新田遺跡は、仙台平野の東北部を西北から東南に流れる七北田川が形成した氾濫原に位置しており、多賀城市新田から山王まで東西約800m、南北約500mの広い範囲に及んでいると考えられる。今回の調査地点（○印）は、遺跡の東部で国鉄東北本線沿いの岩切駅より東方約400mの地点である。付近には、北東方約2kmに特別史跡多賀城跡、また七北田川をはさんで西南に鴻ノ巣遺跡が知られている。尚、本遺跡は、昭和39年に別の地点（●印）において調査が行なわれ、古墳時代の土師器が出土している。

2. 調査の概要

今回の調査は、民間会社の倉庫が遺跡の範囲内に建設される計画があるため、その予定地内における遺構・遺物包含層の有無の確認のための試掘調査である。調査は、予定地の西側は保存されるため東側半分の約2,270m²の範囲を対象とし、その内の3地点計81m²を調査した。表土下約1mで各地点とも湧水が激しく、以下の調査を断念した。層は、いずれもほぼ水平に堆積しており、地点によって4～7層に細分される。遺構としては、調査区東側、北側地点で東西に延びる幅約60cmと、1mの溝状遺構が2本ずつ確認されたが、性格は明らかでない。また、北側地点の表土下約35cmのところでは口縁部を下にし、中に土師器（坏）を入れた土師器の長胴甕が埋められているのが検出されている。出土遺物は、土師器、須恵器、瓦、中世陶器等がみられるが、量は多くない。第2・3層からの出土が主であり、調査区西側地点からの出土はみられない。土師器には、長胴甕、坏があり、いずれもロクロ調整のものである。須恵器は、全体の器形がうかがわれるものはほとんどない。瓦は、布目平瓦、丸瓦の2点である。中世陶器は、多くが大甕の破片で量的にまとまっており、口縁部形態がN字状になるものとならないものの二者がある。その他の遺物として、（古銭「皇宋通宝」）が1枚出土している。

3. まとめ

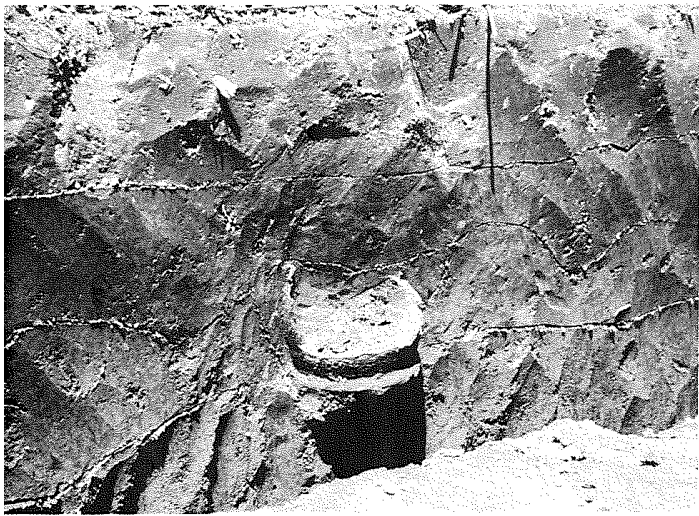
本遺跡は、以前、別の地点において古墳時代の土師器が出土しているが、今回の試掘調査では、平安時代から中世中頃にかけての遺物を包含している層が確認され、かなり長期にわたって営まれていたことが明らかとなった。特に、今回出土した中世の遺物は、留守氏城下の冠川（七北田川）流域に発達したといわれる中世の市場との関係においても注目される。

参考文献

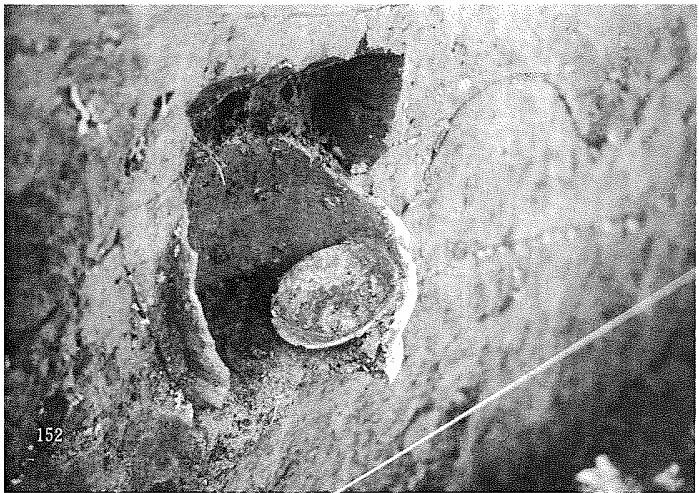
小笠原好彦, 阿部義平「宮城県新田遺跡の土師器」考古学雑誌54-2 昭和43年



遺跡近景



長胴甕の出土状況



長胴甕の出土状況
(内部に環がある)

(7) ^{すな やま}砂山横穴古墳群

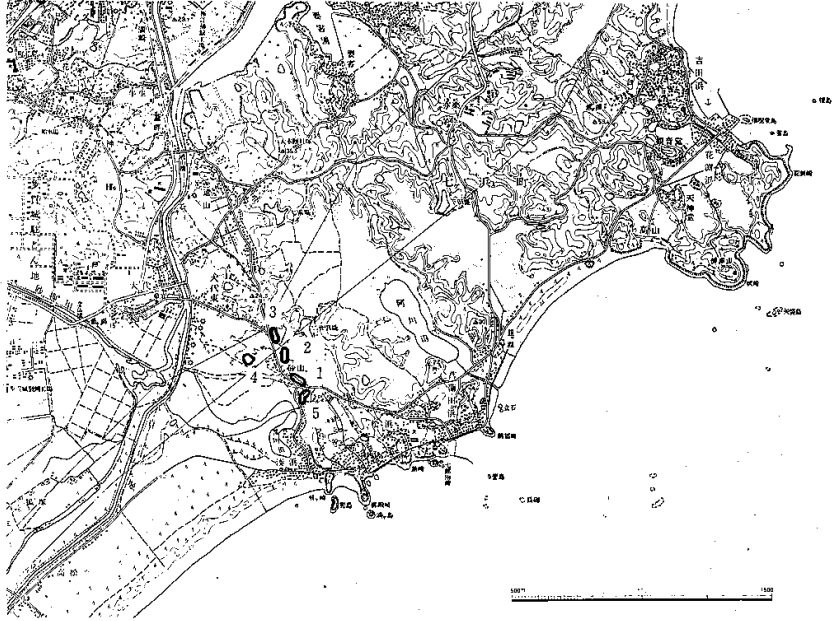
遺跡所在地： 宮城県七ヶ浜町湊浜字榊形囲1-1

調査期間： 昭和49年9月12日～26日

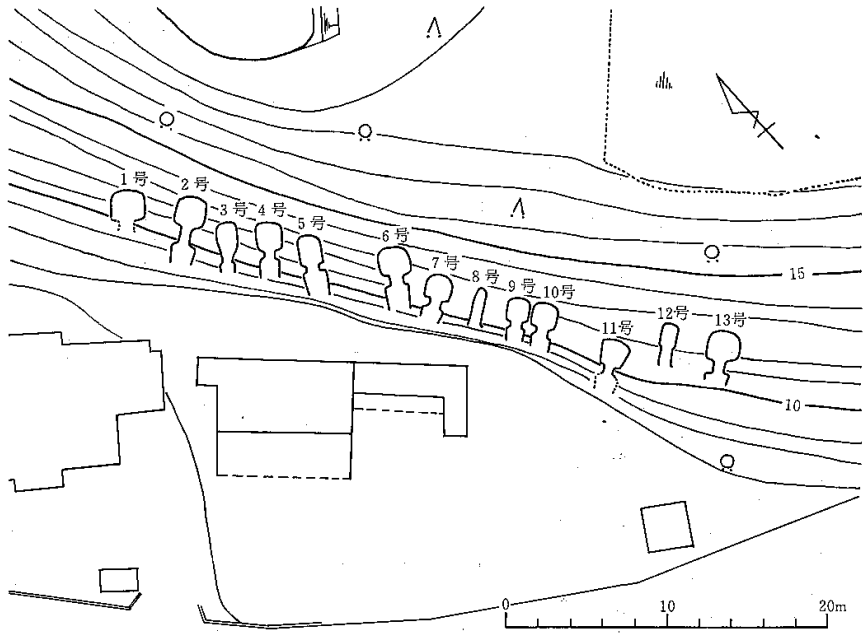
調査面積： 約400m²

発掘基数： 13基

遺跡記号： DJ



遺跡の位置 1 砂山横穴古墳群 2 辨形横穴古墳群
3 大代横穴古墳群 4 新田前遺跡 5 薬師横穴古墳群



砂山横穴古墳配置図

1. 遺跡の立地

砂山横穴古墳群は、第3紀の凝灰岩よりなる七ヶ浜丘陵の東南端に位置し、前面は標高1mほどの沖積平野で、仙台新港周辺の工場群が望まれる。この丘陵は標高10～30m前後の緩やかな起伏を保って松島湾に臨み、松島の島嶼へと移行している。

本古墳群はこの丘陵端に造営されている。これに接して大代、柵形、薬師の古墳群があり、仙台平野の北東部における横穴古墳の密集地帯である。この一連の古墳群の中で柵形横穴古墳群は、昭和38年に加藤孝氏、氏家和典氏によって調査が行なわれている。

2. 調査の概要

この横穴古墳群は、宮城県企業局の崖崩れ防止工事实施中に発見され、緊急調査を実施したものである。

横穴は、平地と境する崖面、標高10～11mの地点に約40mにわたって一列に13基が造営されていた。横穴は、丘陵の地盤である硬い凝灰岩をくりぬいて造られている。1号墳は工事によって前庭及び羨道部が破壊されていたが、残る12基はほぼ原状のままで遺存していた。横穴は崖面に対して長軸がほぼ直角になるように掘りこまれ、南西方向に開口している。各横穴は、玄室奥壁より現存前庭部端まで1.5m～2.5m程度で、特に大形のものや特殊な構造をもつものはなかった。

この横穴は平面形において2つに分類できる。即ち、玄室、羨道、前庭部が明瞭に判別できる1, 2, 4～7, 9～11, 13号墳の10と、3, 8, 12号墳の如き、玄門の形式的な退化が著しく、横穴全体が細長い構造を示すものである。玄室の立面形では、1, 3, 4, 6, 9, 10～13号墳はアーチ型、2, 9, 5, 7号墳はドーム型を示している。施設の面では、2, 4, 5～7, 12, 13号墳の玄門に閉塞石があり、径40～50cm程度の丸みを持った河原石を用いている。2, 4, 5, 6, 10, 13号墳は閉塞用溝が玄門部にみられ、5～7, 9, 10, 13号墳は、玄室及び羨道の一部に排水溝がある。特に10号墳には玄室の四周と羨道にこれが認められる。

遺物は、5号墳より直刀、11号墳より小玉が玄室内より出土し、5～7, 12号墳の前庭部より土師器坏、高坏、須恵器長頸瓶、平瓶、蓋、坏、大甕(破片)、刀子が発見された。坏は重ね合わせた状態で出土した。長頸瓶、平瓶は、口を上にして置かれたものと推定されるが、閉塞石が崩れたために移動し、横倒しになっているものもあった。

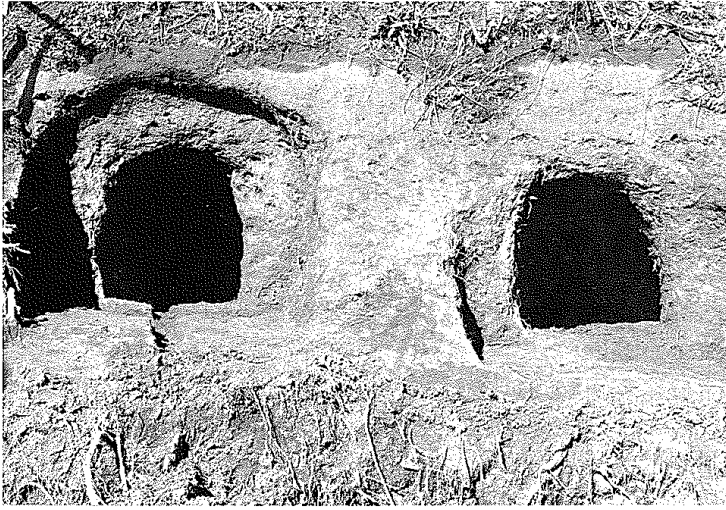
3. まとめ

横穴は形態的に玄門の退化したのが見られ、ドーム型よりアーチ型のものが多い。出土した土師器は栗圀式で、須恵器坏はヘラ切りヘラ削り調整のあとが見られる。これらのことより7世紀後半から8世紀初め頃には使用されていた古墳群であると考えられる。

参考文献 昭42 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 第12集 宮城県教育委員会



発掘状況



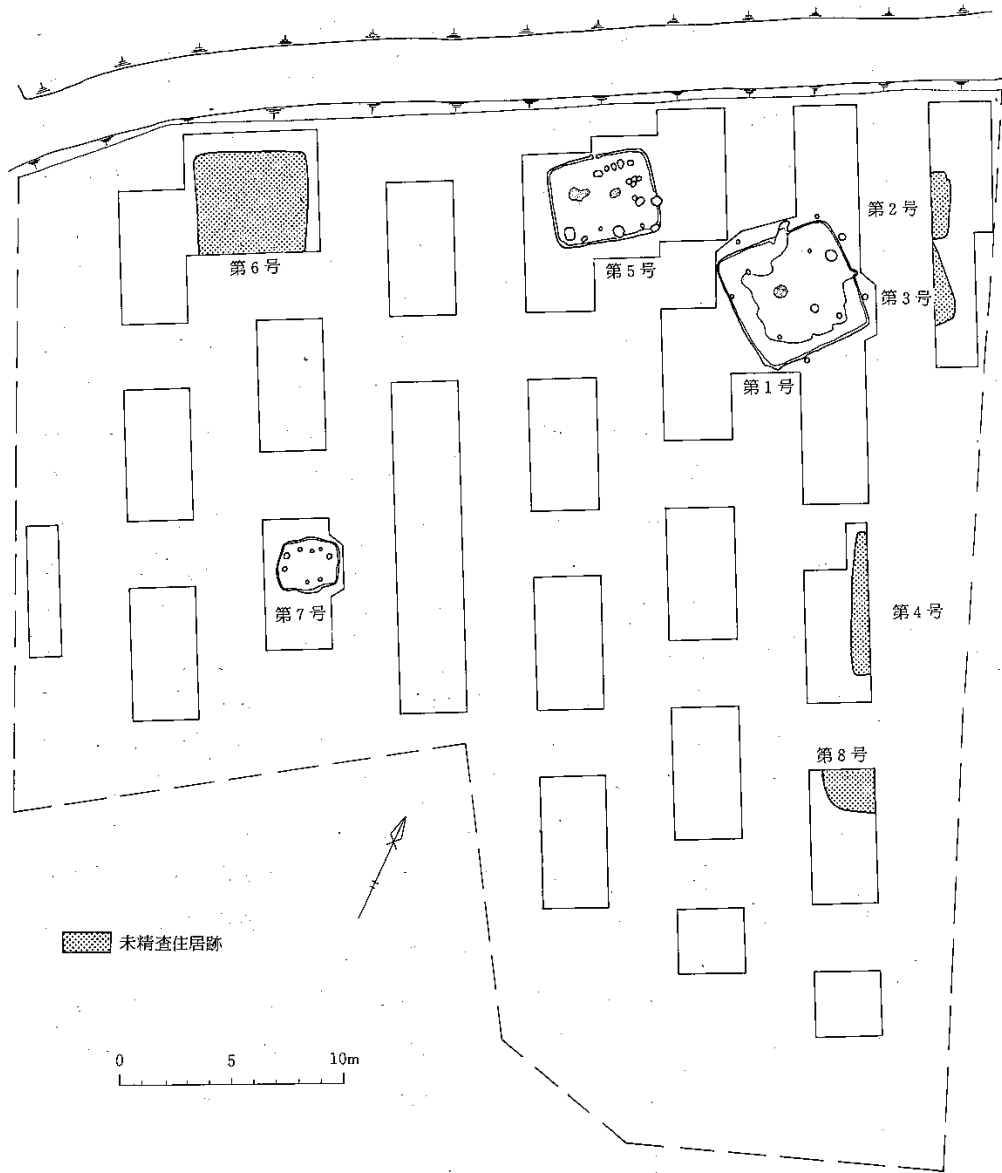
6・7号墳玄門



6号墳前庭部
遺物出土状況

(8) ^{じゅう} ^{さん} ^{づか} 十三塚遺跡

遺跡所在地： 名取市手倉田字山216の78, 79, 80, 81
調査期間： 昭和49年11月16日～28日
調査面積： 1,667m²
発掘面積： 518m²
遺跡記号： DN
協力・参加者： 名取市老人ホーム



遺構配置図

1. 遺跡の立地

遠く蔵王山系からのびてきた高館・愛島地区の丘陵は、さらにいくつかの小丘陵となって東へ続き、仙台平野を南北に二分するような形で名取市の中央丘陵地帯を形成しているが、これらの小丘陵帯には古くからの貴重な遺跡が埋没している。十三塚遺跡もその一つで、名取市倉田字山一帯に広く展開し、往古以来開墾されたことのない森林中には、いまなお41軒の凹み状を呈した竪穴住居の跡を数える。

2. 調査の概要

この十三塚遺跡は、従来、弥生時代後期にあたる十三塚式土器分布地として著名であったが、その他にも、縄文時代・古墳時代・奈良～平安時代の遺物の散布をみる。近年、この遺跡一帯に公園化の企画もあり、その一隅に重要文化財中沢家住宅移築の計画が立案されたので、その候補地内の遺構有無の確認と、移築建物の下に埋没される遺構の精査を目的として、緊急発掘を実施した。移築候補地内は現在畑地となっており、丘陵尾根部にあたり土砂の自然流出が予測されたことや、すでに地山まで掘りかえされた部分もあることなどで、遺構の消滅も予想されるところであった。しかし調査の結果は、表土より地山面まで20cm前後という浅さであったのかかわらず、8軒の竪穴住居跡を確認した。このうち中沢家住宅そのものが移築される部分に含まれる3軒の住居跡の発掘調査を実施した。

第1号住居跡 平面形は一辺5.3mほどの方形で、現在壁高は2～20cmである。床面は貼り床で中央部に炉跡の痕跡がわずかに認められる。柱穴は4個検出されほぼ方形に配置されている。

出土遺物は古墳時代南小泉式土師器が主体であり、住居の年代もこの時期と考えられる。

第5号住居跡 4.6×3.5mの長方形の平面形を有する。現存壁高8～10cmとかなり削平を受けている。床面は1号住居同様貼り床で、焼土の分布により2ヶ所の炉跡が認められた。柱穴は検出できなかった。出土遺物は折返し口縁壺・台付甕等がみられ、古墳時代塩釜式に属する土師器である。

第7号住居跡 長軸2.7m、短軸2.3mの楕円形の平面形を有する住居跡である。床面は中央部が若干くぼみ、この部分に炉跡が認められる。炉跡の周囲には多くのピットが検出されたが、その性格については明らかでない。また住居の年代も出土遺物が少く不明である。

3. まとめ

十三塚遺跡には、現在地表から確認できる41軒の住居跡の他に、今回の調査で明らかになったようにかなりの数の住居跡等の遺構の存在が予想される。これらは、付近に散布する遺物で弥生時代から古墳時代にかけての時期のものと考えられ、その学術的価値は極めて高いといえる。なお、本地区は今回の発掘調査後、すべてを埋めもどしたが、中沢家住宅はさらに盛り土を置いて移築される予定である。



遺跡全景



5号竪穴住居跡発掘風景



5号竪穴住居跡

